うつろ舟

松井太郎

著者自装

目次

うつろ舟
赤縄
作者後記
作者略歴

うつろ舟

野にひそむ者

二日つづいて尾鋏鳥の群れが南方に渡っていった。鳥たちの旅だった。どこか遠い地では天候が変わりはじめているのかもしれない。部屋の土壁にはってある絵暦では、すでに冬の乾期はおわって、春を告げるさきがけの雨のくる季節であった。

州境をなすP河の一支流を、奥ふかく遡行したはての辺境では、九十日このかた地表を潤すほどの降雨は一度もなく、水気をふくんだ湿原の泥土もひびわれはじめ、日を追うにつれて、喝にあえぐ獣の口のように亀裂をひろげていった。

過ぎさった夏の日に、あれほど背たかく繁茂した牧草も、しだいに生気をなくしてうす汚れた白灰色にかわった。時おり巻きあがるとほうもない突風に、弱腰をおされた牧草は一ように伏したおれた。

まだ気象の変わる前ぶれはなく、無風の暑い日がつづいていた。鳥の群れがさっていく日かの後、いく条もの煙が柱となって上がる野火を西の空にのぞんだ。それらは真っ直ぐに、ときには横になびき、日の没したのちの

空を赤くやいた。

秋から冬にかけて太らせた家畜を処分したくて、ジイアス農場にいきゴンサルベに商人をよこしてくれと、頼んでから一カ月になるがまだ便りはない。手持ちの食料は底をついていた。どちらにしても近いうちに州境の町までくだって、くさぐさの用事もすましたいのだが、遠くでも野火の煙の上っているかぎり、一日でも家をあけることはできない。季節の変わりめにかならずおきる暴風にのってくる火から、放し飼いの豚、山羊を守ってやるのに気を使わなければならない、住居と追い込み柵のまわりに、十米幅の防火道をきって延焼にそなえたのは、日を追って盛んになる火の手をみてからであった。早すぎる迎え火は農場からかたく止められているので、こちらから手を打つこともできないでいた。

昨日から台所のどこかに潜んでいるらしいガマがしきりになくので、天候の崩れるのは近いうちだろう。

独り身のおれには家畜の世話のほかは、雨のくるまでは別に仕事もないのだが、この地方の風習が身について、朝はやく昼まえまで働き、暑い日中は四時ごろまで昼寝をし、それから日の傾く夕方まで、すこし仕事をするというのが癖になった。けれども朝は早い。しののめが壁の割れ目を明るませてくると目がさめる。まだ暗い土間で仕事着にかえると台所にはいり水樽から瓢箪を

わった杓で水をくみ、土着人のように口をすすぎ顔をぬらす。

大鎌をとって川岸におりる、乳をだす牝山羊を農場からもらったが、すこしずつ乳の出が悪くなってきた。神経質な山羊は糞尿の臭いのうつった草には、口をよせ鼻をひくつかせるだけで、いっこう食もうとしないので、このところ一荷の青草を川をわたって刈るのが朝の仕事になった。

雨期には流水が氾濫して、湿原地の窪地に流れこみ、いくつもの沼をつくるこの支流も、いまは減水して川床の石は流れから顔をだしている。川の岸の土質はどの年代の生成期に属するものか、黄の斑のはいった粘土の崖は三米も高さになった。

一荷の束はすぐ刈れたので、前から気になっていたモンジョーロ（水車）を調べにいった。商人がまだこないとすると、手持ちの籾を精米する必要があった。それは誰が作った代物なのか、牛追い橋の下にある古物だが、一日に一俵の籾を精白する力があり、玉蜀黍の製粉にもけっこう使えたのであるが、いまは上流からの引き水はかれ、跳ね上がった水箱にひびがはいり、水海苔ははがれて垂れ下がっていた。

土着人のように食い物は、木芋、玉蜀黍、干し肉に豆汁ぐらいですごせたらよいのだがこの腹もたせのためのこわい食事は、胃の弱いおれにはどうもなじめない、し

かし、車の便のくるまでは、あまり自分の好みばかりもいっているわけにもいかない。
約束してある商人は、農場主の弟でレオといって、この地方を縄張りの内にして、乾期には商売にはいってきていた。

外からはめったに人のくることもないのだが、どうかすると、ジープを駆って行商人のくることがある。この前にきた男は、壁に干してあった山猫と河豚の皮に目をつけ、売ってくれたのみ、これは代金だとはらった額をみて、牧童たちが狩りに熱をあげる理由がわかった。行商人は本番はこれからという顔で、
「親方。草はありませんかい、気張りますがね」
と必要もないのに声をおとしてたずねた。
人煙まれな辺境をよいことにして、禁制の大麻の栽培をやる者がいるとはきいたが、おれは豚飼いで、気狂い草などに用はないといってやると、へへーと愛想笑いをした男は、
「前にこの川の上の一軒家にいったことがありましてな。顔立ちは親方によく似ているので、一族の方ですかい」
行商人はおれを同族ばかりで結婚している、先住民の一人と思ったらしい。いつかジョーンが教えてくれた、この川上にいるという日系人の家族のことをいったのだ

ろうか。

目的のはずれた男は車に飛び乗るなり、やけに後輪で砂をまきあげて、草原の果てにきえていった。後に残ったガソリンの匂いが、捨てたはずの過去を思い出すよすがとなり、二・三日は頭の芯がうずいた。

今日もまた暑くなるらしく、すこし動くと脂汗が肌に光ってくる。家畜の餌づけをすますと、油いためのの飯に、干し肉の天火焼き、・いんげん豆のスープと、変わりばえのない朝食をすました。夕方までは暇なので、パンツ一枚の裸になってハンモックに長くなった。

食前にやった甘藷酒がまわって、いつ眠ったかおぼえはないが、飼い犬の吠える声で目をさました。いそいでシャツを引っかけ、壁の自動ライフルを身もとにとって窓からのぞくと、ゴンサルベともう一人若い女が馬でくる。

二人は庭にはいると乗馬からおり、農場主は平鞭で長靴の腹を打ちながら戸口にきた。

ニスをはいたようなうす褐色の細面の容貌で、蓄えた頬髭は白い。ポルトガル人と先住民の混血した家系らしいが、この地方の古い家柄の統領で、無学ながらしぜんと備わった威厳がある。わかい女はジエアンの紺ズボンに、白のナイロンのブラウスを着て、ボタンはかけずに前のすみをぐいと、引きむすんでいるので臍がでてい

る。骨の細い長身で肌白いところは都会育ちとみえた。
「えろう乾くのう」
農場主は挨拶ぬきで、ぼそりと独り言のようにいった。
「かわいそうに、牛も痩せますな」
おれは受けて、愛想にそういうと、
「畜生どもは干上がるばかしでしょうもねえ」
「もう近いとおもいますが」
「そうあってもらいたいもんだ。昨日レオはきたんだが、ここで聖ヨハネ祭をすごしていきたいというんで、豚の積みこみは明日昼すぎになる。あー、これは姪だ。弟の娘でな、馬で歩きたいというんで連れてきたんだ」
といって、娘のほうに目をやった。彼女は口許に笑みをうかべたが、灰色にうすく青のかかった眼は冷たかった。
「お嬢さん、はじめまして。お世話になっているマリオという者です。よろしく」
おれはここの人間らしく、腰をおってばか丁寧な挨拶をした。
「それじゃ、晩にでもな」
そういい残すとゴンサルベは馬にのった。
おれがここに尻を落ち着けるについて、ジィアス一家からいまのような、好意があったわけではなかった。それどころか出ていけよがしの意地悪をずいぶんとされて

きた。

おれは他人の土地へ無断で入ってきたのではない。持ち主のジョン（コンサルベの弟の一人）に借地料は払ってある。ジョンは酒で身をもちくずし、砂取り船でなんとか家族を養っている。本流の古顔で川宿「万作」の主もいかがわしい人物だが、この男の紹介でジョンと話し合い、内約ではあっても一札はとってあった。

三隻のカヌーで荷物をはこび、ここで仕事をはじめた頃、一族のなかの暴れ者が脅かしにきたこともあった。それがあの出来事があってから、農場から使いの者がきたり、なにかと好意の押しつけをするようになった。おればつねに間をおいたが、それにもおのずから限度というものがあった。

あれは昨年の雨期もおわる頃で、大雨のあくる日であった。風で屋根の丸瓦がずれて、貯蔵食料の上に雨もりがするので、放ってもおけず屋根にのぼった。雨後のさわやかに晴れたすばらしい天気で、空たかく筆のひとはきのような雲がかかり、その下はるかに地平線はゆるい円をなし青くかすんでいる。

アスンソン行きの鉄道はあの辺りを走っているのだろうか、どうかすると夜半風にのってくる、列車の警笛を耳にすることもあった。

屋根からみると川はちかい、水嵩はそれほどではない

が、雨後のこととて流れはかなり荒れている。瓦の修理はすんだが、爽やかな気分に屋根から降りるのはおしい気持ちになった。ここは川に突き出た瘤ににた土地であるが、農場にいく道をなかに両側から、水に囲まれている岬のようであった。

低地の稲はこのたびの雨で収穫はきまり、台地の玉蜀黍は褐色の穂をだしかけている。おれはこのジョンの土地のすべてを借りていたが、恐らく借地の十分の一も利用してはない。その時、なかば放心の体のおれの耳柔に、人のおらぶ声がする。声のほうに目をやると、荒い流れを二人の少年がカヌーでくだっていく。大声をあげているのはその一人であっった。動作のおどけた様子から、こちらを嘲笑しているのはすぐ分かった。

危ないことをやると思った。すると、カヌーが嘘のようにくるりと返った。二人は船底に手をかけているが、いつまで保つことか。二百米ほど下流に早瀬がある。そこにかかれば間違いなく、船も人も流れに巻き込まれるだろう。

おればどうして屋根からおり、どこをどう走ったのか自分に気のついた時は、身体の浮き上がる流れに足をいれていた。やや問をおいてカヌーは突きかかってくる。舟をうけとめるなど考えはなかったが、とっさにへさきに手がいった。ともは流れに押されて回ると船腹はどっと岸の砂をかんだ。

動転した二人はすぐには立てるどころではない、それでも水はのんでいず怪我をしているようでもなかった。

聖ヨハネ祭の宵宮、夕方になって大気はよどみ、野火も一時おさまったようみえた。こんな夜はあわただしく風の起きることもないと思い、久しぶりにゴンサルベの招待をうける気になった。六キロの小道を馬でいくと、西の空はいくらかの明かるみを残していても、草原はもうたそがれて、馬の歩むまえうしろにコウモリがひらついた。やがて窓に黄色い灯のはいった丘の地主屋敷がみえてくる。

門構えのつもりか太い自然木を二本たて、その上にさらした牛の頭蓋骨を魔除けにのせてある。大戸もない門柱のあいだをすぎ、高床に建てた邸の下の柵に馬をつなぐと、広間にいた主人に挨拶をすますと庭にでた。獣糞の臭気が鼻をつく広い砂地には、山と盛り上げた丸太がさかんに炎をふいている。焚き火を囲むようにして、荒挽きのままの板で腰かけはしっらえてあった。すでに十人からの人たちが座って、手ぶりを加えた話題に興味がわいているらしい。かがり火を中にして子供らと犬は騒いで、影は砂地にみだれ動いた。

「ようこそ」

すんだ声をかけて、おれの横にすわったのは昼間みた娘である。

「へえ、大旦那さまのお招きをうけて上がりました」
おれはなるべく田舎者らしい言葉をえらんでこたえると、彼女は白い歯をみせてたかく笑った。
「あなた、ここら辺りの牛飼いはごまかせても、わたしには無理だわ、高等教育をうけた人はどうしても顔にでるものよ」
「おれ、日系だが。ただの流れ者だす」
「そう、あなたがそうおっしゃるなら、そうとしても、こんな僻地に入り込んできて、一人暮らしなんて、なにか訳がありそうだわ」
「べつに訳などないんで、縁あってここで豚を飼っているだけで、他所でもよかったんです」
「そういえば、前に伯父はあなたを追いだそうと、したことがあったそうね」
「そんなこともあっただが、おれはとくに土地の人たちから、迎えられたいとも思っていねえから」
「従兄弟たちを救ってくださったそうで、伯父には子供の命の恩人じゃないの」
「あの時、近くにいただけで、大仰にいわれても困るんだな」
牧夫のなかの器用なのが我流でならす、ビオロンの単調なしらべにのって、ジィアス一家と近隣の者たちの交わった踊りがはじまった。十歳ぐらいの少女が甘藷の焼けたのを、串にさして持ってきた。かわいらしい顔立ち

なのに口もとにしまりがない、娘は二つうけて一つをおれにくれた。

「このジィアス一家は名ばかりで、もう亡びかけているのよ。土地の細分をおそれて血縁とばかり結婚するので、ご覧なさい。あの踊りの輪の中で、一人前でとおるのはほんの二人ほどよ、それも読み書きがやっとという程度なの、しっかりした男なら五・六人もあれば充分な仕事に、二十人からの者がその日ぐらしでのらくらしているんだから。飼料の当てもなく豚でも山羊でも、殖やしほうだいにして、夏草で肥えた牛は冬には骨と皮だけになるものと決めて、なに一つ手を打とうとしないのですからね」

「大旦那も考えておられるのでしょうがね」

「なに一つ考えるものですか、わたし伯父とあなたの所にいったでしょう。その時、感心したのはこの人こそ養豚家だと思ったのです。前に伯父は若い者などやらずに、自分でいけばよかったのです。今でもおなじでしょう。人をみる目がないのですからね」

影がのびてきてとまった。どこか抜けた顔の若者が、瓢箪の器に落花生の殻のまま炒ったのをもってきて、おれと娘にひとつかみずつくれた。

「きょうだい、これを食って生妻酒でもやってみな、精がついて手ぐらいでは始末がつかなくなるから、なあー。姉ちゃん」

「ばかね、ほんとうに」
娘は顔をあかくして、若者を叱りつけた。
「あれですものね、躾もなくて人前にだされもしない。あなたに助けていただいた一人は、伯父が身内の娘に手をつけて生ました子なの、伯母は知らんふりしているけどね」
なぜ、この娘は一族の内密のことまで、なんの縁もないおれに話すのだろう。
「あなたはこの家の人たちを好いていないのですかい」
おれは彼女のすげない見方に興味をおぼえて、つい余計なことまで尋ねてみた。
「わたしがこの家に恨みのあるはずはないでしょう。わたしもジィアス家の一人ですものね、わたしが男ならここに止どまって、大斧をふりたいのですが、年に一度父についてくるぐらいでは、改革はとてもできないのです。あなた、ここに移ってくださらないかしら、農場の管理をしていただきたいのです。待遇は好きなようにしますが、伯父も承知しているのですよ」
「ご厚意はうれしいだが、誰ともかかわりのないのが性に合っているんで」
「そう。あなたは相当なミザントロフィア（人嫌い）ね」
おればこの娘と会ったときから、用心はしていたので、誘導してきたなと感じて、分からないふりをして踊りのほうに目をやった。

仲買人のレオがきたのは約束の日の昼すぎであった。これが終便になるというので頼んでやった食料が『万作』から一つも届いてないのは、ひどすぎる手違いになった。レオは店によってくれてはいた。噂によれば手入れがあったといい、事実店の戸はしまっていたという。

この季節では荷をはこぶほどの舟は、支流には入ってこないので、本流の渡しから牛車で二日がかりになるが、それも仕方のないことになった。

助手は二人で豚の積込みにかかった。不意の侵入者に驚き逃げまどう奴を、男たちは馴れたもので手あたりしだい、ひっ捕まえると、恐れて悲鳴をあげ口から泡を吹いている重い肉塊を、苦もなく檻におしこんでいく、日頃手がけた家畜だけに、一たん商人にわたすともう手伝う気にもなれない。

おれば手持ちぶたさに、赤土の埃をかぶった車の前にまわり、なに気なしに車体の標識板をみると、登録はＡ市になっている。あー、Ａ市。事の意外さにおれは思わず声をあげそうになった。ジイアスの一族の家畜商が、Ａ市を根拠地にしているとは少しも知らなかった。

積み荷をおえた助手の話では、これから州境まで出て、最終の渡し船にのり、夜を徹して走るという、レオは首をかしげ鉛筆をなめながら手帳に計算をだしていた

が、腹につけた胴巻きから札束をだし数えおわると。
「きようだい、改めてくれ」
といって差し出した。
甘藷酒で取り引きを祝って、冗談のでる気分に、おればそれとはなくＡ市について問うてみた。
「さようですな、今年になって転居したので、わしが納めている肉会社が新しく冷凍倉庫を、Ａ市に建て仕事をはじめたのがわけで、Ｂ市いればなにかと不便で今の所に引き越したんで、まだ半年たらずで家にいたこともないので、よくは分からんのだ、連れてきている小僧はＡ市生まれなので、あれにきいてくれ」
そういうと、レオは馬の水船にあゆみより両手をいれると、掌にうけた水で顔を洗った。
赤毛で顔に雀斑のちっている小僧は、Ｓ方面へでる町外れの製材所の裏に家があるといっった。ノォゲーラ親爺の工場の下なのは分かる、さりげなく尋ねてみると、共同墓地から谷一つこえた丘陵地には、コーヒー園はないという。Ａ市はもと馬市で知られていたが、大手肉会社の進出につれて市は景気にわき、あの丘陵地帯は住宅地に達成されつつあるといった。
「あにさんの忘れられん娘でもいるんですか」
小僧は不審顔におれをみたが、自分でもおかしく思ったのか、へへーと鼻に皺をよせて笑った。
「なあにー、あそこでは日雇いをやったことがあるん

で、ちょっと聞いてみただけだ」
運転台に首を入れていたレオがおりてきて、
「うっかりして忘れるところだった。きょうだい、この紙に一筆たのみますぜ、近頃はだんだんとうるさいことになりましてな、売り手の署名のないことには、渡船場でどえらい罰金ですわな」
レオはおれの前で、複写紙をはさんだ書類を太い指でととのえた。
こんな事態になるのなら、A市のことなどロにだすのではなかったと後悔した。しかしこの二枚の送り状の署名で、なんの関係もないペローバ区の知人たちに、おれの現在の居所が分かるはずはないと思いかえした。
「神さまのおぼし召しなら、また来年もよろしくな」
と車一台分の商談に気をよくしたレオは車窓から手をふった。排気管から黒煙をふいて始動したトラックは、柔らかな牛追い道にタイヤを食いこませ左に右に揺れながら、本道にでると速力をあげて砂塵のかなたに消えていった。

期待していた食料はとどかず、とくに節約して耐えていた塩の不足には、我慢にも限界があった。農場へいって当座の分をかりる手もあったが、まだレオの娘は逗留しているというから会いたくはない。
ジイアスの若い者がいつか教えてくれた。この川の上

流に住むという邦人の家を訪れてみる気になった。どんな地形になるか見当もつかないので歩いていくことにした。川にそっって四粁もくると流れの曲がっている所で、一面の蒲原につきあたった。湿地を遠く迂回して高みにある疎林に入った。この季節には毒蛇に気を使わなくてよいが、刺草など払って道を開けるのにいらだってくる、林をぬけるとその先は萱草の野原で、幾十としれない白蟻の塔がたっている。枯れ草をふみしだいて歩くと、水のないゆるい谷をへだてた先の岡に、赤錆のトタン葺きの倉庫が目にはいってきた。屋根の中ほどは大きく凹んでいて、建物はやっと倒壊を免れているさまにみえた。

小道にそって川べりに下ると、とっくり幹の木綿の陰で、水の流れにはいって洗濯している女がいる、誰かを尋ねてここにきたのだが、このような寂れ果てた土地で人に会うとかえって身の引きしまる凄みが加わる。とっぜんに声をかけて驚かせてもと考え、かるく口笛をふくと、予想どおりに女はとびあがると、すばしこく木綿の陰にかくれた。

「こないで、くると撃つよ」

と甲高い声でわめいた。事実ちかよると引き金をひかれそうな緊迫感が伝わってきた。

他意のないのを示して、おれは両手を頭のうえでくんだ。

「きみ、橋の下にいる者だ。塩をきらして困っているんだ。余分があれば分けてくれないか」
下手にでて頼んだ。女はおれを獣じみた目であつかましいほどにみつめた。
「お前、ジィアス農場にいる日本人か」
「血はなあー、だがここの者だよ」
女はここで待てと合図をすると、木綿のもとを離れて坂道をかけ上がっていった。やがてもどってきた女は、動悸でこまかくふるえる両手に、五ｋｇはある岩塩をかかえてきた。
それを地面になげると、肩で息をしていたが喉がつまって、激しく咳くと痰を水にはいた。
おれの頼みを受けて塩を取りにいったのが、それも急いでいったのが障ったのだろうか。なにか悪性の病気が彼女をむしばんでいるらしく、樹液ににた粘ったものが流れにういて波紋をひろげた。
「あんた、どこかわるいね」
「ずっと前からこうなの」
「熱はある」
「でないけど、ひどくだるいの」
「一度、泊まりまで下って医者にみせたらどう」
「家からはひと足もだしてはくれない」
おれはなんとも奇怪な印象をうけて女と別れた。教えてくれた帰途につき川を渡るとき浅い川床をみると、飴

色のゆるい流れの底の砂礫をおおって、黒い巻き貝のむれが仲間の殻の上に、またその上にと盛りあがってからみあい、長い舌のばして這っている、恐ろしい肝臓吸血虫に宿をかす貝がこれほどいる川に、あの女がいつも素足で入っているなら彼女の病気はそれからきているに違いない。

もらった岩塩をかじったのが障ったのか、炎天の帰り道でしきりと生唾がでる、頭痛もするようで家についたが飯もくいたくもない。

聖ヨハネの宵宮で一夜焚き火のそばで過ごしたのがいけなかったのか、あるいは家畜商の連中がわるい風邪でも持ってきたのかもしれない。

ひどく悪寒がする。マラリヤかもしれないと思った。買いだめのアスピリン錠をかんで呑みくだした。ひどく寒い。

美しき人形

混濁した意識のままに、なん日を過ごしたものか、容易ならぬ状況に追い込まれているのも知らずに、薄織りのカーテンにうつる、影のような女の夢をみていた。もう妻とは呼べないアンナがそばにいて、―熱はもうひき

ましてよ。リオからのお帰りを待っていましたのに、お戻りにもならず、なぜこんな不便な土地で、一人暮らしをなさっていられるのですー。といって声をあげて泣いた。

もし彼女におれがみた夢の中の情愛の一片でもあったなら、誰ひとり看護してくれる者もいないこんな荒野で病んでいることもなかっただろう。

なにか物のたおれる音がして、はっと目をさました。幻の女は夢とともに消えて、外は部屋にくらべて異様なほど明るく、ただならぬ騒ぎは家の中からでも察せられた。

おれは上体をおこしハンモックから土間におりた。頭はふらつくが歩けないほどでもない、瓢の杓子で樽の水をくみ、ジャタイ蜂の蜜をたらして飲んだ。引きつった喉につめたい水が甘味をのこしてすぎると、いたいほど胃に泌みていった。病みあがりの身では体力に自信はなかったが、土間をふんでいる両足はあんがい確かのように思えた。

部屋にまいこんでくる煙からおして、天候の変わりと近くまで野火のきているのは推察できたが、おれは自分のおかれている状況をあまくみていたのは、すぐに思い知らされる破目になった。

いつものように戸口までいき、なに気なくかんぬきを外すと、戸は外から蹴られたように開き、どっと突風が

屋内におどりこんできた。取っ手を支えにして外にでたおれば思わず声をあげた。いつの間にか起きた風にあおられて、猛然と勢いをえた野火は、あの無風の日々にほそぼそと遠い彼方で、くすぼりつづけていたものである。強風にのってくるおびただしい煙に、火の粉と灰ばこりの量からみて、広い枯れ野をなめつくしながら来襲した野火であった。やっときく視界のさきであがる炎のようすでは、火ははや防火線をこしたとみてよかった。

この風ではもう手の打ちようもなく、あまりにも時機を逸しすぎていた。かすかな異常にも吠える飼い犬のチグレは、名をよんだが姿もみせない。前もって野火の延焼には意をはらい、食料の不足にたえて州境の河港まで行程三日の旅も、延ばしのはしにしていた。

熱に浮かされていたとはいえ、恐れと憎しみしか持たない別れた妻の幻をみていたとは、なんとも悔やみようもないが、現実にはこの身にもぬきさしならぬ危険が迫っていた。いま少しで火と煙に巻きこまれるところであった。

この辺りの農場では、洪水や野火の災害がくるとみれば、草原にちっている牛群を、たからかに吹く角笛で誘って、追い込み柵にあつめる光景にあうことかある。ジィアス農場なども十粁もの原野で、隣接農場と境をせっしているが、境界にちかい山かけや川岸に茅屋をか

まえて、身内の牧夫が自家の格印のある、放牛の移動をつねに監視している。ひとたび野火がくるとみれば、風向きによっては迎え火をはなつのだった。

そういう状況になると、思いもせぬ近い処から火の手があがる、借地の一角からのぼっている煙はそのような迎え火のひとつであった。風にのった炎の舌はめらめらと高く立つかとみれば、風におされて低く地をはい、一片の枯れ草ものこさずに、乾ききった湿原をなめつくす。

いっそう強まった風は、重い丸瓦を落ち葉のように巻きあげ屋根をはがしはじめた。もう一刻の猶予もおしまれたが、家畜にするだけの事はしてやりたいと思って、飼い馬の柵にいくと、鹿毛は刺鉄線をきって逃げていた。　おれば足をかえして豚小屋にはいると、繁殖用にのこした二十頭の牝と子豚どもは、おしよせる煙にむせて、豚舎の隅にかさなりあい、われさきに仲間の下にもぐりこもうとして悲鳴をあげていた。押されてぐらついている板の一枚を外してやると、動転した牡の一頭が風上にむかって駆けだした。すると全部かそれに習って煙にのまれてしまった。こうなると後手の処置でどうなるものではないが山羊の囲いもといてやった。こいつは日ごろ乳を出してくれていたので、出口なしの柵で見殺しはしのびなかった。わずかな作業の間にも、火の手はまじかに迫ってきたのか、ボール玉ほどの枯れ草の塊が

もえながら飛来して、農場に頼んではこんだ牛車三十台分の玉蜀黍の山が黒煙を上げはじめた。

おれは三年ごしの自分の仕事が烏有になっていくのを目の前にしたが、この身にも一刻の躊躇もゆるされないほどの危険がふりかかっていた。丸太で組んだ屋根と壁だけになった家にかけこむと、財布をかねて二重におった弾倉バンドを腹にまき、ライフル銃をおろして戸口にむかったが、吹きつける熱風と火の粉で目もあけられない。とっさの思いつきで六枚つづりの山羊皮を寝床からめくり、それをかぶると足もとだけを頼りに橋の下にかけ下りた。そこも安全な地帯というわけではなかったけれど、猛りたった火勢も川岸の水気のおおい雑木林にはいると、青葉をあぶり、樹皮をはじけさす音はたてても、上がる煙はしだいに衰えて白くなった。

一方では養豚の設備一切を灰にした火勢は、風にのって川上に遠のいていった。おれが避難した橋の下あたりは運よくも延焼をまぬがれた。この身ひとつさえ一時はどうなるかとやみくもに逃げてきた。かぶっていた干し草をなげすて、倒れるように川原に身をなげだした。

家を出たときは覚えなかった疲労が、重くのしかかってくると、空腹の状態がひどく体の芯がぬけた感じだった。もうすこし下火にでもなれば、焼けのこりの品で食料になるものを、探しにいかねばなるまいと考えながらも、指一本あげるのも大義な気分におちていた。

どれほどの時間をそうしていたのか、あるいはわずかな時の流れに身を任していたのかもしれないが、時間の感覚はしっかりせず放心の態でいると、誰か境の上からおれの通り名を叫んでいるのを耳にした。たぶん農場の者だろうが、一度は住まいに引き返す用もあるので、痛む体をやっと起こした。

乱れた牧草の茎を支えにつかみながら、土手の段々をふんで岸にあがった。見知らぬ土地ほどにも眺めの変わった焼け野原を背にして、三人の者が馬できていた。かすむ視力ではじめは牧夫たちだけかと思ったが、その中にレオの娘マリヤ・イレネがいた。

余燼のあがっている道を、拍車でせめられて駆けてきた馬は、気がたち轡をかむ口からは泡をふき、前足をおってさかんに土をかいた。いまにも飛び出さんとするのを、乗り手はやっと手綱でひさしぼっている。

マリヤ・イレネの身についていない皮の牛追い服すがたは、いきり立っている馬をやっと制御しているだけに、薄いクリスタル硝子のコップを、不安定にゆれる台の端においた危さがあった。

「マリオ。あなたはどの人が、これはまたなんとした事ですの」

時が時だったから、日に焼かれていても、おれの顔は青かったにちがいない。

「風邪熱にうかされていて、気のついたときは、もう手のうちようも無かっただ」
「身体のほうはどうなの」
「もう熱のほうはひいたし、怪我もしておりませんので、農場のほうはどうですかい」
「残らず追いこんできたので、べつに被害はないことよ、あなたはあれだけ用意しておいて、憎しいことでしたね」
「桶の底の穴をしらなかった迂闊者です。あなたに褒めてもらった豚飼いは、どうも偽物らしいですて」
マリヤ・イレネは出会いのときから、おれからなにかかぎだそうとする様子はあったが今日はまた何故こんな処へきたのだろうか、あの猛火のなかでおれがうまく処置をして、災厄をはずしたのを見にきたのたろうか、彼女の驚きの言葉から察してそのあたりと理解した。
「わたしたちね、ここへくる途中あなたの家によってきました。あなたは不在で、わるかったけど、ちょっと調べさせてもらったの、するとね。壁にかけてあったらしい暦のメモランダムに、家畜の疫病予防注射の日づけ、肥育の記録、それから土間に落ちていたノートには、種類別にした牧草の成分表や、この地方に適応、不適応の実検。その他わたしには分からない文章もありましたわ」
おれはこの娘の出しゃばりに腹がたった。明日は食う

ものはなくても、暦やノートなど焼けたほうが良かったと思った。

「わたし、あなたにお会いしたおり、どこか違っている印象をうけましたものね、これでどんな相談もできるわね」

レオの娘は蓮っぱらしい口をきいた。

「いまは、あなたも他人どころではなくお困りでしょう。伯父に援助を頼んでみますから」

この度の火災は大きな痛手ではあったが、回復不可能なほどではない、仕事がもとに復するのに、一・二年かかっても別にかまわない、なんとか食っていければ良いと考えている。養豚でひと儲けしようとか、なにか他に世間なみの目的があって、こんな僻地を選んだのではない。これはおれの将来を決める一つの実験のつもりで移つってきた。その裏にはある決意をだいていたが、三年の歳月はすぎて、それはひとつの杞憂にすぎなくなったようだ。

いまのところ農場の人たちは好意を寄せてくれているので、貸し主のジョンさえ許すなら、この先々も世話になるつもりで、災害をうけた後も自分の考えは変わらなかったが、マリヤ・イレネがおれの学歴（といっても農業技師の成りそこない）を知って、何かに利用したい考えなら困ることになると思った。彼女はおれに好意を持ってくれているのは否めないが、その真意はおれを相

談役にして、本家の乱脈をただし、農牧の改善を企てているようだが、おれは自分の過去を顧みるまでもなく、もっとも避けなければならないものであった。

まったく他人ごとではない、おれは今日の日もわからないでいた。いまジイアス家の者に便宜をうけるとすれば、時間と日にちを知らせて貰うことであった。二人の牧夫のうち一人はゼーといって、日ごろ口などききあう仲なので尋ねてみた。

「X日の昼ごろだな」

というセーの返事をきいて、うつつに三日も寝ていたのかと、記憶の奥を探っているとマリヤ・イレネの乗馬は騒ぎ立ち上がろうとする。

「雨がきそうよ、マリオ。屋敷においでなさいな、野宿することもないでしょう」

そういって彼女は馬の頭を回して手綱をゆるめた。悍馬は放屁しながら駆け出すと、二人の牧夫もあとに続いた。

暗い空からはたえず細かい灰がふってきた。ときたま炭化してねじれ曲がった草の葉がくるくると舞ながら落ちてくる。ひと雨くるのだろうか、大粒な一滴が焼けた地表をうつと、シュウーと音をたてるような錯覚をおぼえた。

マリヤ・イレネの好意に頼って農場にいけば、当座の

必要品は困らないだろうが、ここを去るのは裸の今が潮時ではないかと考え、明日は川を下ることにした。古い血の澱みのとどこった旧家などというものは、どうにもならないほど土台から朽ちていて、傾けばそのままに倒壊するに任しとけば良いのだ。その一族の中に一人でも進取の気性のある者がいれば、新しい階級が生まれてくるだろう。レオの娘も古い皮袋などにかかわらずに、学業を修めて父の仕事を助けていけば良いだろうに。

おれが再びここに戻らぬ旅を考えたのは、彼女の善意にせよおれの断りを承諾しないに違いない、強いて自分の考えをおすとなると、その理由も明かさなければならない。

おれは自分の過去を葬る気持ちはない。しかしマリヤ・イレネの依頼をしりぞける理由のために、過去の傷を他人にさらしたくはなかった。

彼女から素姓をみやぶられたことは、「ただ、そこらのピオン――雇い人――ではないということだけだが」レオの娘に妙な予見の自信をつけさせたかもしれない。この度の火災にもあわず、何年かこの借地に腰をすえるとすれば、うけた相談は知らぬ顔ではすまない、というほどの気持ちはあった。けれどもそれは一対一の立場のことで、いまの場合、おれの立場はすっかり変わってしまっている。

一身上の都合のために、彼女の提言を受け入れることと、おれが求める生き方の認識では、ひどく食い違いのあるのに気がついた。

前に財産と名のつくほどのものを持っていた頃には、知らなかった独りぐらしの不便や孤独にたえ、自分の力で暮らしをたて、この度のように生命の危機にもあってきた。この三年の年月の間に、おれは精神の上では大きく成長した。以前には無かった生きる力が身体にみちている。

いまからのおれは自分に納得のいく生き方だけを、これからの長い、あるいは短いかもしれない生命のために、鍍金のはげない自分になりたいものと思った。するとここを去るよりほかに術はない、そのように考えがきまると、急に空腹をおぼえてきた。

マリヤ・イレネは、おれの住居は延焼から免れたと教えてくれたが、前もって庭のまわりは除草しておいたのと、荒屋といっても土壁なので、わずかに火勢をくいとめたらしい残った食料は前から切れかかっていたので、全部かき集めてもしれた量だが、ともかく様子をみようと坂道を上っていった。まだ盛んに煙をふいている玉蜀黍の山をみて、自分の不運が身に泌みて辛かった。目がくらむので家の中にはいった。部屋といっても寝間と台所しかないが、まったく狼籍のかぎりであった。おおく

もない道具でもこのようになると、足のふみ場もない。なん冊かのノートと月めくりになった暦はどこにもない、たぶん彼女が持ち去ったのだろうが、そんな詮索ほいまのおれにはどうでもよい。この度は食料品だけにし、二・三の皿に鍋などともに麻袋におしこむと、橋の下に戻った。

レオの娘の望みに添えないとなると、今夜はこの橋の下ですごし、明日ははやく川を下ることにしよう。三日ぐらいの携帯食はいるし、ながく放っておいたカヌーの点検も必要であった。

ありあわせのもので飯をくい、口の中に粉がのこるようなコーヒーではあったが、熱いのを飲むと、さきほどの疲労はしだいに引いていくのが分かった。飽食による神経の弛緩と活力の充溢によるものか、今日の災害は過ぎた事にし、--負けてたまるかい--という気分になり、つい笑い声をたてようとして、はっと思った。

持病もちが久しく発作のないのを、もう快癒したものと思い込んでいたやさき、突然に兆候の予感におびえて、愕然とする病人におれは似てはいないだろうか。たえて人の気もない川岸で、ひとりの男が笑っているさまは、もう狂人の他のなに者でもないだろう。もうずっと以前になるが、アウダスト博士から退院の許しがでた日、--君のは一時の心理的な鬱積による発作で軽いものだから、人を恨まず多くを望まない、平穏単純なくらし

を選べば、おそらく再発はないだろう。こんごの君の生活の便りはくれたまえー、と忠告と励ましをいただいた。

しかし、一時の発作で無意識にしたことでも、妻に危害を加えようとした行為は、おもく決して消えはしない。その事件を奇貨おくべしとして動いた妻の実家のことで、心労がつもり母はおれの入院中に亡くなり、父の代からの支配人の小林も、おれを庇って追放されるはめになった。母のことを想い、小林のことを想い、離婚をせまった妻を思えば、胸に熱いものがわいてくる。こんな感慨は今に始まったわけではなく、なん回とはなく想いだしては退けてきたものであった。

暮れるにはまだ早いか、明日の計画もあり、舟旅となるとちいさいカヌーでも、ちょっとした道具はいるので、もういちど住居にいく必要ができた。

去る者はなんとやら、屋根の修復は無理としても、家の中だけても片付けておきたかった。未練のようだが、おれの三年間の仕事の焼け跡も見さだめておきたかった。

地肌は黒く焼けていても、灰塵は一物ものこさぬほど強風に吹き払われて、地面のひび割れや、雨期につけた獣の足あとまで、くっきりと凹んだままに洗いだされていた。豚舎のあとにたつと、両手にすくえるほどの黒い塊がころがっている、火にまきこまれた仔豚の死体で

あった。柵の外にごろりと寝たすがたで焼かれたのがいる、その先に孕んだ牝が長い舌をだし仰むけにのびて、ひろげた後脚の間に三匹の仔をひりだしていた。山羊は助かったのか何処にもいない。丘の下の窪地に異様とみえる物がうずくまっている。まさかと疑いながら坂をくだると鹿毛であった。風下に向かい反って火に巻き込まれたらしい腹は熱にむされて膨れ、剛直した四つ足は空ざまに突き出し、見ひらいた眼の球、むきだした長い歯の白さ、鹿毛は図体がおおきいだけに、その死に様は無残であった。

設備の柱一本のこさず灰にした火は、埋めた丸太の穴にまで食いいって腐れ木をいぶらしている。玉蜀黍の山は日を疑うほどの炭の盛りあがりでしかない。必要な道具、残っていた食料など別にして、不要の物は火になげた。

橋の下にもどると、夏の出水の頃から、川岸の樹につないだままにしてある。カヌーの点検にいった。草にからまれているのを引きだして、流れにいれると船底から水が泌みだしてくる、このくらいの浸水なら一晩川に放っておけば、とくに手をいれるほどでもない。

突き棒と櫂は無くしていた。それらは長い夜のうちに作れるだろう。

ジイアス農場に顔をだして、一応は事情を話してから去るのが礼だろうが、そうするとおれの決心を鈍らすよ

うな、厄介な場合が予想される。押しっけがましいマリヤ・イレネの独断にしても、おれへの好意には違いなかった。ゴンサルベも引きとめてくれるだろう。そのように二人から止められたらとても断りきれるものではない。

ジイアス家との関係もはじめの頃はともかく、たいへん世話になったのは稀有のことと思っている。一族のことは日ころから気づいている事はあった。レオの娘が指摘するまでもなく、ジイアス農場のやり方はあまりにもアナクロニズムでありすぎる。その中の二・三を改善するたけでも、一家の収入はずいぶん増すたろうに、けれども、おれが避けようとしている事柄の恣意な想像はやめておこう。自分の気持ちを書きのこしていこうかと考えたが、なんとなく未練がましくて好かず、黙って旅立つことにした。

亡父がよく口にしていた。一期一会のふかい意味は知らないが、ただ一時の雨やどりの縁であっても、ふかく胸に残る印象でも残したのだろうか。縁あって二世の契りの糸をむすんでも、いくさきでおれたちのように他人になる者もいるのだ。

今夜は焚き火をして、この橋の下で過ごすことにした。突き竿をきり、板を削って櫂にし、携帯食を作れば旅の支度はすむが、暮れるにはまだ時間はある。おれは川岸にすわりこれからのたつきを考えていたが、思いは

いつか四年前の事件にさかのぼっていた。

妻のアンナにくわえたおれの傷害未遂の行為は、あの当時でも何故あんな兇行にでたのか、後からいくら考えても思いだせないでいる。

その日、現場には妻、女中のマリザ、それに母がいた。三人の目の前の行為だから、無意識のうえとはいえ、おれがやったという事実は疑う余地はすこしもない。

小林にいわせれば、妻のまえに並べられた食卓の皿をわっただけで、主人の一時の錯乱だと、弁護をしてくれたが、彼は目撃者ではなく証言にはならなかった。母は息子は嫁に害を加えるような人間ではないと力説したが、女中マリザの見たところでは微妙な点で違っていた。後日、妻の証言では、夫はたしかに自分にむかって金槌をふり下した。が自分は危ないところで身をかわしたので助かったと、証言した。

行為の直前までのことはよく記憶にある、午前十一時すこし過ぎていた。朝食の刻であっった。マリザの作った料理が食卓にのっていた。おれは耕地にでて雇い人に仕事の指図をしておき、家に帰ってきたところであった。別にその日のかわった事は知らない、軽い立ちくらみがするようであったが、こんな症状は前からのもので、いつもしぜんと消えていたので、気にもかけず食堂にはいった。台所と共になっているこの室は、父が生前

に改造したもので、台所用品、食器、食卓に椅子すべて、コロニヤ風の様式に統一したもので、重厚な感じのする一室であった。

母は壁にかかった父の額縁が落ちかけているといった。止め金の一本がぬけて額はひどく傾いていた。その絵は多くもない父の形見の単物で銅鍋に南瓜と玉葱を描いた一枚である。絵にした素材はジプシーから買わされた鍋であった。それを卓上において、父は熱心ににカンバスに向かっていたのは覚えている。

父の残したものでは、自画像と母を写した二枚は客間に上げてある。子供の頃からこの静物の一枚は好きであった。窓からきているらしい明かりをうけて、銅器の半面はにぶく光り、陰の面は沈んだ鉱物の暗色が良くでていた。鍋のわきにおいた二つ割りの南瓜の黄色い切り口からは、いまにも養液のしたたり落ちそうな鮮やかさがある。画面の左下にあしらった玉葱のまるみ、めくれおちた薄い皮はそよとふく風にも、まろぶかと思うほどに描いてある。

けれどもおれが大人になり、いくらかの鑑賞力がついてくると、父の作品はレンブラントの真似と、忠実に写実しただけの、素人の習作にみえてきた。しかし、おれがその絵を通じて父を敬慕する気持ちは、また別のものであった。

落ちた止め金を金槌でかるく打って、額縁をもとのよ

うに架けなおした。
妻は食卓について、マリザの給仕するスープに口をつけていた。日によっては食事の時間が不規則になるので、時刻になればおれにかまわずとるように言ってあったから、その事については、おれはよく了解していた。けれども、母はまた席に着いていないのに、妻が勝手に食事をしているのは、おれの不在のときは、いつもこのようなのかと思い、目がくらむように感じた。こんな無作法はわが家のものではなかった。
前の日に、おれたちにちょっとした口争いがあったので、妻はわざと不貞くされの態度に出たのかもしれないが、母までも無視した様子に、おれは怒りで目の前が暗くなるのをおぼえた。踏み台をおりて妻の方に歩んだのは知っているが、その後、どんな行為にでたかには全く記憶はない。
おれが正気にかえった時、母は足もとにたおれて泣いていた。母がおろおろしい声で告げたのは、金槌で妻を打とうとしたことで、彼女は危ないところで身をそらしたらしく、危害はのがれたが、おれがどんな狂暴な行為にでたかは、妻が手にしていたスープ皿が砕けちっていたことで分かった。
あの事件いらい一度も妻に会っていないので、彼女はどんな感情を持ちつづけているのか、注射一本でも顔色をかえるほどの女だったから、どれほどの恐怖と憎悪を

おれにたいているのは推しはかることはできる。
おれば二度と妻にあわす顔はなかったし、自分の理性も信じることはできなくなった。いままで緑のない他人の病気としていた狂気が、おれの立場を崩し深淵に突き落とすのを知った。いてもたってもおれない焦慮におわれて、おれは自室にかけこみ引き出しの拳銃をとりだした。
いつ母がついてきたのか、背後からおれの右手にしがみつき、
「継志（つぐし）、おまえが死ぬなら、わたしも一緒だよ」
と血の気のひいた蒼白な面で、必死に取りすがられては、おれはどうなっても、母を道連れにすることはできなかった。急をきいて駆けつけた小林におれは手から銃をとりあげられた。
妻の実家は親戚の弁護士を通じて、おれを殺人未遂犯として起訴し、兇暴な狂人として生涯精神病院の鉄窓におしこめる手続きをすると息巻いたという。おれはその当時自宅の一室に監禁されていたので、母がどれだけ辛い思いをして、嫁の実家と交渉したのかは、後日、小林の口から聞くまでは知らなかった。これも彼から知らされたが、事件の後始末の条件というのは、身内の相談などという易しいものではなく、おれの財産を妻の側に譲れという苛酷なものであった。母の説得もあり、おれも

自分の過失は充分認めていたので、つぎの書類に署名した。

一、神西継志（じんざいつぐし）は農場の所有権を妻アンナに譲り、合名会社として発足する。

一、継志はすすんで入院して治療をうけること、経費はすべて会社の負担とする。同人は現在自由の身なるも、再度暴行の徴あるときは、この度の恩恵は取り消されるべきこと。

一、神西宇賀（うか）は会社の相談役として、ふつう日雇い人の給料の五倍を支払われること。ただし住居は農場外に移すこと。

一、神西アンナは現在夫とは別居中なるも、将来当国にて離婚法が認められた時点において、両人はなんらの条件をつけることなく離婚すること。

まだその他に細目はあったが、主な項目はこのようなものであった。おれはこの結果について、あまり深刻に考えないことにしている。治療にあたって下さったアウグスト先生は、リオまで付きそってきてくれた小林から、およその事情は聞いておられたのだろう、―過ぎた事は忘れるようにー　と忠告して下さった。事実おれの新しい人生はあの事件の始末のついたところから始まっている。

雨がしげくなり、思いなしか橋の下は暗くなった。まだ夕刻には間があるはずだが、雲の層が重なり深くなったのだろうか、気温か下がってきて、薄いシャツ一枚ではすこし寒い、おき火にカヤを積んで風をおくると、煙がわいて岸にそって流れる。すると煙をくぐって一羽のアヌー（注・小型のカラスのような鳥）がとんできて、土手から垂れている木の枝にとまった。しばらく枝でゆれていたが、人の顔をみてアノーと鳴いた。暗い回想にひたっていた折りなので、おれは救われたような気分になり、アノーとまね声で返してやると、いつの間によってきたのか、原のあちこちで、二十羽からの黒い鳥の群れがいっせいに鳴きかわした。

益鳥で昆虫を捕捉して餌としている鳥だが、羽毛は黒く艶はない、長い尾を持っていて身長三十糎ほどで、猪首でくちばしは太くて短く角質がもり上がって顔の一部をなしている。

脚も短くて太い、可愛げのない鳥で動作はにぶいので、悪童のパチンコの的にされがちだが、食えないので大人たちは相手にもしない。

野火におわれて、おれと同様にまたいくらか青いものと水のある、この川岸によってきたものだろう。食料の無駄使いのできる身の上ではないが、脂でいためた干し肉のこま切れを砂原になげてやった。鳥たちはいっせい

によってくると、われさきにと餌をつつきはじめた。ここ一日は火と煙からにげるのがやっとで、彼らの砂袋にはなにも入っていないのだろう。せっせと忙しけに餌をついばむ動作が、おれの推察とあまり違わないことを示していた。

遅れてきた一羽は仲間の背にとびのり、慌ててたあまりころげこむ奴もいる。おれは彼らの嬉々とした動きをみているうちに胸の内が熱くなってきた。投げてやったわずかな餌でも、彼らはあんなに喜んでいるのだ。物いわぬ禽獣とはいうまい。おれら夫婦は一年の問、心をひらいて一度でも、相手を受け入れたことがあっただろうか、破局はついにおれの犯行で取り返しのつかないものになった。

しかし、いま思い合わせてみると、おれら夫婦は別の事情で離別しなければならい欠陥があったようである。その理由は先にゆずるとして、前にはアンナに含むところもあったが、今はすべて水に流した心境でいたい。ただ残念なのはあの事件を介して、妻との離別、母の死を招いたことだ。

人はあまり恵まれた境遇にあると、不幸さえ望むといわれるが、少年の頃、日雇いの家の小僧がうまそうに玉蜀黍粉の厚焼きを食っているのをみて、欲しくてたまらず母にねだったところ、長屋まで出かけていった母は、

皮のほんのりとこげた切り口の鮮やかな黄色い一切れを貰ってきてくれた。おれは一口食ってみて、ぺっと吐きだしてしまった。この時ほど厳しい母の顔は知らなかった。さんざん叱られたうえ、その塩っぽい砂をこねたような厚焼きを、しまいまで食わされたことがある。

これは罰あたりの考えかもしれないが、自分の生い立ちをかえりみて、篤信な家庭でなに不足なく育ったので、もう一段向上しようとする人生の目的がなかったのは、自分の不幸だったと考えられる。

いくさの始まる前、父は日本から財産をこの国にうつして、A市近郊にイタリヤ人の手になる牧場とコーヒーの農園を買った。

おおくの邦人移民の歩んできた道、まあ一言にいってみれば成功であろうが、移民の前途に待っている代替わりなど、まだまだ先のこととして、十年、二十年の歳月をものともせず、コロノから借地、小地主から中地主へと、運ばれた者は大農場主への夢と、なにはともあれ目的があれば生きがいもあるだろうが、父が不慮の死をとげ、その跡をついだおれは若くして家長になった。そのの事情もあって学業はやめ、農場の経営をみるようになったけれど、生涯かけて果たしたいと望む目的はなにもなかった。

その頃、おれはひとりの娘に心ひかれていた。父の代から取引のあった食料雑貨店０商店前の、通りをはさん

だ裁縫学校の生徒であった。下校の時間にどうかすると、通りに溢れてくる娘たちに出会うことかあり、アンナはその生徒たちの一人であった。別れた妻のことはどうでもよいが、おればあの出会いまで日本人の娘で、色は白く上背がありあれほどの美貌の女はみたことばない、通りにでると娘は友達と別れて、駅のほうに帰っていった。名はもちろんどこに住んでいるかも知らなかったが、できれば求婚したいものと思う心はしだいに募っていった。

それが０商店の隠居の世話で、あっさり話が決まりそうになった。娘は十粁ばかり離れたＣ町に住む高森作造の長女アンナとわかった。おれはこちらから頼んだことば伏せてもらい、０氏に母のところへ使者にたってもらった。隠居しているとはいえ０商店創立者でＡ市の邦人有力者の一人なので、母も一応は承諾した。

０氏の招待ということで、Ａ市の外人のホテルで晩餐を共にすることになった。一流のホテルといっても田舎町のことだから知れたものだが、高森夫妻は給仕人つきの食事ははじめてなのか、ひどくまごついた様子にみえた。アンナは固くなって微笑さえしないので美しい顔の目と口に険がでて、高慢で我値な根性曲がりにとれないこともなかった。０氏は場所なれた人で冗談などいって、この会合を上出来にしようと努めてくれた。おれば過不足なくふるまったつもりでいた。その夜の席で一ば

ん立派だったのは母であった。田舎住まいの婆さんでも、このような席につくと、歳は歳なりに美しく品位があり、物おじしない態度にはゆとりと落ち着きがあった。倒産したとはいえ海産物問屋の老舗に育った娘だけのことばあった。

後日、アンナの里方が母を目して憎むべき敵としたのも、この夜に端を発しているようであった。ホテルからの帰途、おれば母とあまり口をきかなかった。

「この度は0さんにはたいへんお世話になったね」

と母は気の毒そうにいった。

その時、おれは今晩の会合は失敗だったと直感した。案の条、母はあの娘では困るといった。アンナが家にくるまでには、糸の乱れにもにた経緯があった。

おれたちの婚約が世間の噂にたった頃、親しい友人の一人はアンナとの仲を取り消せといった。理由は高森の過去に良くない噂があるから、親戚になれば将来災いのもとになりかねないといった。おれは友人の忠告や母のそれは心にとめたが、あれだけの女を他人のものにするのは我慢ならなかった。よしんば娘の回りに財狼の影がうろつこうとも、ふかくは気にもしなかった。しかし、おれはアンナとの結婚生活一年たらずで、あんな狂気をよびこんでしまった。

母はあの事件で早死したようなものである。こちらの

弱みを握った嫁の里方との交渉で母が心身をすりへらされたことを思えば、今のおれの辛苦など物の数ではない、病気になり、財をうしなってはじめて人の真情を知った。世の中にはよろめく者の足を払う者ばかりではない。小林や助力を申しでてくれた二・三人の友人もいたのだ。

発作は治まっていたが、まだ病状の分からない時期に、おれをリオまで連れていってくれたのは小林だった。また雇い人の身分をこえて、母の相談にもなってくれた。母が亡くなった時、強いておれを病院から戻したのも彼であった。縁者の会葬は一人もなく、もしおれが喪主にならなかったなら、いかに母の葬式は惨めなものになり、悔いを後日に残したたか分からない。母の野辺おくりをすますと、自分はもう農場には用のない身だから、リオの病院に帰ることにした。

自分はひとりでもいける由をつげたが、小林は是非にも共にといってきかない、予想したように彼はおれに話したいことがあったのだ。

リオまでの汽車の旅はサン・パウロで乗り換えになるが、小林の話をきくにはあり余るほどの時間はあった。彼はこの旅から帰ると農場を辞めたいといった。

高森も高森だが、アンナが母を敵視するのは見ておれないほどだともいった。妻が家にきてから母と話しあっているのはおれは知らない、里方の強い要望で夫婦用の

別棟を建てておれたちは住んでいた。食事も別にというのは断わった。そんなわけで、母はおれにいえないことも、小林に相談していたのだろう。あの人を家に入れれば神西家の先は目にみえているとまで言われたという。結果からいうと母の予言は当たったわけで、その償いにはおれの新生をみてもらうことよりほかに術はない。

おれたちは一等客車のゆったりした座席でいくらかは眠ったようであった。朝はやく着くというから、明るんできた窓外の流れで、間もなくリオに着くだろう。

今日、小林と別れてしまえば、また会える日はいつのことだか分からない。アンナと床を一つにして、二カ月ぐらいたった頃、おれは小林に尋ねたい疑問をもった。それはおれたちの閨室のことだったので、つい聞きそびれたままになっていた。その件を自分で判断するには手かかりはなかった。というのは、自分の気性から金であがなえる女は嫌であった。なかには良家の息子とみて、接近してくる外人の娘もあったが、結婚は二世の娘と考えていたので相手にしなかった。そうはいってもストイズムを信奉していたわけでもなく、純潔でもなかったが、他に比べてみる異性も知らないままに、大きな疑問を妻に持ちつづけていた。

横の席で小林はよく眠っているようであった。起こすのは気の毒と患ったが、この時を逸してはふたたびの機会はないと考えた。

「小林さん」
と呼んでみた。彼は眠っていなかったらしく、
「なんですね、坊ちゃん」
おれはこの呼び名は嫌いで、そう呼んでくれるなと前に頼んだことがなん回かあった。
しかし、その時はなぜとはなくしっくりと調和しているように思った。おれは前置きをいってから、妻と新枕を交わしてこのかた、一年たらずの夜の床のことを打ち明けて、彼の感想を求めた。小林ははじめおれがなにを話しだしたのかと、いぶかしい態にみえたが、おれの本意を知ると、ひどく驚いたふうにみえた。
「坊ちゃん、水くさいですね。なぜ気のついた頃わたしにいって下さらなかったのですか、この度の事はすべてそこから起きてきたんでしょうな」
おれもうすうすは気づいていた。けれども小林のいうほどとは考えてもいなかった。
小林は前に亡くした妻のことから、いまの女房との性生活まで、隠すことなく知らしてくれた。おれはそこで男女の性愛のことは彼の話によってはじめて知った。
「そういえば、アンナはまだ自分の身体のことは知らんでしょうな、情が移らないからことごとに意地張ったのですな」
フリジデス（冷感症）は心理からくる病気の一つだと、小林はいった。全く知らないよりはましだ

が、もう凡ては手遅れであった。

明朝はこの川を下って本流までいこう。行く先はどうなるか分からないが、もうこんな不便な土地に入りこんでまで、自分を虐げることはしまい。

つい物思いにふけっていると、にわかに烏たちは囁ぎたし、アノーと一声鳴いて一羽が飛びたつと、アヌーの黒い群れはつぎつぎと川原にでていった。おれは何かが近づいてくる予感がした。敏感な烏たちは早くも異常を察して逃げたしたのだろう。橋の上を渡ってくる足音がする、細かい砂粒が上からふってきた。いつか雨は止んでいた。

雨の川

こんな時刻に、牛追い道にかかった橋を、渡っていくのは何者だろう。

おれは目をあげて、きき耳をたてたが、人とも獣とも判断はつきかねた。踏み板をかるくならして去った様子では、かなり急いでいる足音のようであった。うまく生き残った家畜でも戻ってきたのだろうか。

どちらにしても、堤まで上がって確認しておく必要は

ある。モンジオーロ（水車）の軸に立てかけておいた銃をとった。出会い頭に相手とぶっかる不利をさけて、すこし間をおいて土手にのぼった。身のまわりに気くばりしてのち前方に目をうつした。余燼の煙がひくく地にはっている暮色のなか、揺れていく輪郭ににぶく赤い色があった。

直感でおれは人だと分かった。それも女らしい、もしおれの推定が外れていないとすれば、この辺りに女が一人で入りこんできたのはまだ知らない、訪ねていくのは誰だろうか、もうすぐに暗くなるし、この橋から先は迷路のような小径だけで、末はさい果ての荒れ野につづいていて、女のいける地域ではない。

二年前のこと、気のふれた牧夫の女房が家を出て、ウルブ（禿鷹）に喰われたのだろう散乱した骨になって、家に戻ってきたという事件があった。おれはそれを連想して異状なものを感じ、放ってはおけない気持ちになり口に指をあて口笛をふいた。辺境の住人たちが合図につかう生活の技の一つで、高い響きがあって、広い土地では実際の役にたった。おれがここでならったものの一つであった。赤い影は鈎にかかったように立ち止まった。

おれは旅人が女らしいから、とくに好奇心を強めたわけではない。ここは往還に面した村落ではないので、誰にしても持ち主に挨拶はするし、主も旅人にいく先は

尋ねて、時には食事を与え、宿も貸すのは辺境の人たちの慣例でもあった。
袋の荷を足もとに投げ出して、放心の態でつっ立っている女は、つい五日ほど前に、おれに塩をくれた娘であった。ことの意外さに、
「あんたかー」
と言ったものの、すぐにつづくはずの言葉は喉につかえてしまった。
彼女は怒ったような固い表情でだまっている。胸に大きな包みをかかえていたが、どうかすると、ずり落ちそうになるのを持ちなおした。仕草のようすでそれにかなり気をとられていた。何を抱いているのかおれは娘に近づき胸元に目をやると、灰汁づけにしたような毛布に、しっかりとくるまれていたのは、生後三カ月ぐらいの幼児であった。
「この子あんたのか」
まだ二十代前の娘っ子らしい彼女が、子持ち女とはちょっと納得できかねた。けれども自分の子だからこそ連れているのだとも考えた。
「そうー、わたしがうんだ子供よ」
彼女は当然とばかりそう答えると、固い表情はくずれて顔に媚びがういた。行き暮れの道で同類の牡にあい、本能的な牝の感覚からほっと安堵した一匹の獣のようであった。

もちろんおれは彼女の境遇など知る由はない、けれども一度会っているので、土地に家や家族もあるらしいのに、なぜ女ひとりが子を連れて家を出たのだろう。

彼女は自分ら母子がいま、剥きだしの生命の危うさの中にいるのを分かっていないようであった。

「どうしたんです」

「罰あたりの恥知らず」

誰とも知れず放った彼女の悪罵は、クヤバ訛りの早口で一くぎりの間に俗卑語の間投詞をさみ、舌うちしての話ぶりは、ひどく血が頭に上がっているようであった。野火で家を失い、これから顔見しりの牧夫を頼って農場へ行くのだという。

おれの観察したところでは、彼女は初等教育をはじめ、母親からの躾もうけていないようで、知能は人なみに持ちながら、土俗化した移民の裔をみる思いがした。

「農場まではまだかなりの道程だ。もう遅いし、あんたには無理だな」

途中で暮れてくるし、いまは止んでいても険悪な雲行きから、大雨になる気配もある。それに農場では野火をさけて、追い集めた牛群で、地主屋敷は十重二十重に囲緯されていようから、男でも馬でなくては近寄れる場所ではない。とは言っても、今のおれには彼女の望みをかなえてやる手立てはなにもない。

「どうしてでもと、言うわけでもないの」

彼女はおれに引きとめられたのを好いことにして、宿を貸せと言わんばかりの態度をみせた。おれはただ女ひとりが危ない地域に入るのを止めただけで、この母子の世話ができるほどの境遇ではない。過ぎた期待はこちらが困るので、いちおう自分の立場も知ってもらった。

彼女は先取りして一夜の宿ぐらいはしてもらえると思っていたのか、だんまりのままなんとも言わない。ひどく困惑のようすは、毛をふくらませて居座った捨て犬ににていた。

彼女の行く先をただ塞ぐだけでは、おれも心苦しいのでなにか良い法はないかと考えてこれはギイドに頼むより仕方はないと考えた。ジイアス家の統領とはどんな血縁につづくのか知らないが、一族の中でも頭株の、女房持ちの初老の牧夫で、川べりに小屋をたてて住んでいる。信用がなければ任してもらえない境界の見張り役である。

ここからは三粁ほどの道のりで、放牛はいないし、しっかりした道もあるから、暗くなるまでに着けるはずだ。一夜とめてもらって、明日馬で送ってもらえは心配はない。

おれは彼女にギイドのことを話した。いまのところ農場へ安全にいける方法はそれしかない、彼は夫婦者だし信用してよい男だから、明日は屋敷に連れていってくれるだろうと言った。

なんとなく彼女は追い詰められた鼠のように、目の前にあいた出口に走りだそうとしない。なにか陥昇でもあると考えてか、尻ごみする様子に見えた。

「あたし、あんたと川を下ろう」

おれがつい明日はここにいないと口をすべらしたのを、掴んでの割り込みようであった。もうすこしなんとか口のききかたもありそうなものだが、おれはその厚かましさに反駁して、女の申し出を断ろうとした。

いまの自分がいちばん求めているのは心の平穏だ。おれの生活に他人が、とくに気心の分からない女が介入してくるのは好かない。塩の代価をこんなことで払わされてはかなわないと考えた。けれどもここでこの母子を突き放せば、二人を見殺しにすることにもなりかねない。彼女の求めるのは三日の川下りだけだと、思い返して折れることにした。

「どこまでいくんです」

「P町まで、兄がいったまま帰ってこないの」

彼女の行く先を知って、実のところおれは驚いた。本流のどこかに落ち着くとなると、どうしてもP町に係わりができるが、狭い河港の町でこんな女にからまれてはかなわないとも思った。

それは先のことにして、話が決まれば、いつまでも焼け野原にたってもおれないので、橋の下に誘うと彼女はついて川原におりてきた。白く光る川明かりが足元をた

すけてくれるほど、崖ぎわや橋柱の台には、一刻はやい暮れの闇がしのびよっていた。

おれ一人ならつづり皮でもかぶって一夜はすごせるが、子連れの客にはそんな扱いもできない、戸板二枚を屋根にくめば、夜風ぐらいは防げると思いつき、元の住居まで上っていった。

おおかたの瓦は落ち、荷物を運びだしたあとの家は、物すさまじいばかりに荒れ果てている。その家の中に何物かのいる気配がする。ひとり暮らしには時々確認しにくい他者の存在という恐怖に襲われることがある。すると一匹の山羊が戸口から首をだした。

片方の角のみじかいのに見おぼえがある、一才の若い牝でこいつだけ助かったのだろうか、メエーと声を張って体をすりよせてきた。おれは放っておいて、重い二枚の戸板を背おって川原に下った。崖よりのところに戸を三角にくんで、母子が休めるぐらいの空間をつくった。床に干し皮をしき荷物をかさねて枕にすると、仮の寝床らしいものになった。

おれが出かけている間に、焚き火をもやし豆汁に火を入れてくれたのか、よい匂いがして腹がなった。彼女はただ無為に座っているような性分ではないらしく、気配りをしてくれるところは、物分かりのよい女らしい、おればなるべく好意に解しようとしたが、彼女はまだ多くの謎に包まれたままの女だった。

「晩めしにでもしますか」
と招いても、橋下の宿では豆汁に木芋の粉と干し肉の灸った品しかない、幼児には米を煮て粥でもやるように言った。

明日の出発の手はずは、一つの仕事をのこして全部すんでいる。突き棒を伐れなかったのは、彼女との出会いに時間を取られたからで、それは明日に延ばして、腹のふくれた今は寝るだけになった。彼女が幼児をつれて戸板の中にはいると、あの山羊がよってきて、鼻をならし頭をすりよせてきた。餌の催促なのは分かっていたが、三人の旅となると食料の節約は考えなくてはならない。玉蔔黍の荒挽きは持っていたが、知らぬ顔でいた。

「ねむったわよ」
暗い所からでてきた彼女は、火のそばに座って粗朶をさしくべた。
「冷えないかい、風邪でも引かすとことだぜ」
「うんと包んできたから、それほど寒くないもの」
そう言えば、暮れてきてから暖気はましたようで、風は収まったようだ。
「あらー、またお客さんですか」
彼女は山羊のほうに手をさしだした。獣は餌でも貰えるかと、メェーとなくと短い尻尾をいそがしくふった。腰をうかした彼女は、一まとめにしてある荷物のうち

の、黄麻袋の口を開けにかかった。
「それはやめてくれ」
そのつもりはなかったのに、しぜんと大声がでた。断りもなく他人の物に手をだす、けじめのなさにおれは黙っておれなかった。
「いけませんか」
「食料は命のもとと思ってくれ、予定どおり着くものなら心配もないが、雨にでも降りこまれると、五日とも七日とも分からんのだ」
「山羊さん、駄目だとよ」
彼女はおれの小言をなんと取ったのか、山羊の頭をなぜた手を喉にあてて引いた。一層殺して持っていくかと尋ねたのだろうが、いまさら山羊の一匹などどうでもよかった。もとは農場から貰ったのだから、仲間のところへ戻っていくだろう。
それにしても彼女は変わっている。餌をやらないのなら、殺せと言う。この度の川下りでも、―連れていって下さいーと頼むところを、―行こうーと強要するようなことを平気で言う。気性は走っていて、豆汁に火を入れてくれるほどであるが、断りもなしに袋の口をあけもする。
いくら野育ちの女といっても、すこしは慎みはあるだろうに、彼女は作法のなにかも知らない。赤茶けた服の長裾でよかったが、焚き火を前にして、恥じらいもなく

股を開くのには困った。奇妙な回りあわせから、この母子と旅をすることになったが、おれは女をもっと観察したい好奇心があった。彼女もおれのことを、なにかと考えているのは確からしい。レオの娘ほどの知的な推察力はないので、おれは神経を使わなくてもすんだ。けれども彼女なりの直感で、男の欲望に迎合しているような気がした。おれたちの間にある約束事が、暗黙の中に交わされたと、ひとりで合点しているようであった。

彼女の考えでは、自分ら二人は互角で、ある商談をした仲間ということになるのだろう。このように考察してはじめて、女の態度が理解できる気がした。―代価はいつでも払いますーであるのに、男がいっこうに求めようとしないので、なんとなく落ちつけない様子にみえた。

「あんた、なんと呼べばよいの」

顔をつき合わしていながら、おれは自分の考えにかまけて黙ったままなので、彼女から声をかけてきた。

「マリオで通っているんだ」

「そうー、わたし、エバ」

三日ばかりの舟旅で、その先は別れてしまう女にはマリオでよいだろう。彼女のは本名なのだろうが、おれには女の名前などどうでもよい、用があれば代名詞で呼べばよかったのだ。それでもおれたちは名前だけは知る仲になった。

「坊やはなんて言うんだ」

幼児が男の子なのは、女の口はしから分かっていた。

「まだないの」

おれば子供の名前など聞かなければよかったと気がついた。推察するまでもなく彼女の身の上には曖昧なところがある。とうてい堅気の女とはみえないくずれた姿態があって、複数の男たちとの関係があると、おれはにらんでいた。

偶然の出会いから母子を本流まで連れていく羽目になった。引きうけた上は自分の責だけは果たすつもりでいるが、恣意にまけた盲目の行為だけは避けるつもりだった。

「もう休んでくれ」

女に毛布一枚を渡すと、おれは焚き火のわきに座り、足を折ると両手でかかえた。寝ずの番をするつもりが、夜半のひと時、いつの間にか眠ってしまったらしい、アンナを夢にみていた。なんとも嵩にかかった物言いで、そのわがままと無知についておれも向っ腹を立てた。一ばん欝屈していた頃の夢だったので、ひどく目覚めが悪く後をひいた。

いつか焚き火は消えて、燃え残りの粗朶が白い灰を囲んで丸くのこっている。まるめた枯れ草を燃えのこりにのせマッチをすった。細い煙がたち赤いものが交わるとみる間に、パッと炎にかわった。

辺りが明るむと、戸のあいまからのぞいている、生白い女の足のうらが目についた。川原の霧は深かったが、もう朝の気配はあった。

おれは流れまでいって、放尿し顔をあらい缶に水をくんで戻ると火にかけた。たぶん女は気疲れのゆえか何も知らずに眠っているらしい。朝食は彼女に任せて、その間に竿にする木を伐りに林へいこう。雑嚢から山刀をとりだしていると、女は起きてきた。

「おはよう」

挨拶する口もとに、ある意味を持つと思える笑みが浮いていた。

「うん」

くぐもったおれの返事は彼女に聞こえただろうか、それから朝食の支度をたのんだ。

「ちょっと待ってね」

そそくさと彼女は霧の中にはいっていった。戻ってきた女は活き活きとして小娘らしくさえあった。顔には紅がさし、水でなせつけた髪はニスをはいたように艶やかで、額にたれたいく本かの後れ毛に、水滴が白く光った。

「あらー、もうお湯がふいてきた。熱いのを飲んでからにして」

山刀を手にしておれは、浅瀬をわたり対岸の湿地にはいった。ここまでは火の手もおよんでいず、滑らかな褐

色の木肌に白い模様のういた、猿すべりが群生している。なるべく、竿に頃あいのをと、探しながら奥にはいっていった。霧があるので迷路をたどるような気分になる。地面には苔の類がもり上がって繁茂していて、一足ごとに身体が沈む。

すぎた盛夏の季節、耐えがたいほどの炎暑の午後、この岸まできて水浴びのあと、木陰での憩いを思いだした。必要な竿は手にいれたので、すぐ引き返してもよかったが、身体が芯から燃えて、胸まで苦しくなったのは、なにも熱いコーヒー二杯やっただけではない。生きていく上にあまりにも煩瑣なものが、つきまとってくるのは何故なのだろうか。

おれは水苔の上に自分を投げだした。植物の冷気がほてった体に爽やかであった。この一刻の間に、何十年かが過ぎ、戻ってみれば女をはじめ橋までが、消えうせている場面を思い描いた。

「遅かったのね」

彼女は出発に先だって食事にかかるつもりらしいが、鍋いっぱい盛り上がるほどに炊いた米の飯をみて、おれはむやみと腹がたった。白米は幼児にはかけがえのない食料だし、おれたちだって腹でもこわした折は要るものなのだ。

「あんた、怒ったの」

「うん、大食らいのように米を使っては困るのだ、子

供の分までおれたちが食ってはならん。どんな不慮の事件が起きるとも分からんからな」
朝から苛立った神経はおさまりかねた。けれども、おれが不機嫌で食わないと、彼女も手をださないにちがいないから、はげた琺瑯びきの皿に盛ったのをうけた。
「マリオ、誰か馬でくるようよ」
彼女ははじめておれの名を口にした。言われた言葉にも気を悪くしないのは、女の良い性質の一面らしい、遠くからの微かな響きを、はやくも捕らえて知らしてくれたのは、おれが困る立場になるのを、なんとなく感じ取っていたのだろうか。
「やっぱり、そうよ」
そう言われると、遠くで木をたたくような音がする。彼女は不審がったが、おれにはよく分かった。昨夜農場に顔を出さなかったので、レオの娘が様子をさぐりに牧夫をよこしたのか、農場の者と会えばとても迷惑な場面が予想された。この女と一夜を共にしたとなると、人々の想像するところは、似たようなものだからだ。
おれは先方の好意ある申し出に添えなくて逃げだすのだから、その上相手に話の種をおいていくのは嫌であった。
「急いでくれ、訳はあとで話す」
おれは女をうながして、一気にカヌーの処まで走った。母子は舟に乗せておいて、荷物を運びおわった時に

は、馬蹄の響きはごく近くまできていた。おれはともに立って竿に力をこめて、川葦の茂みに舟をおしこんだ。濃い川霧がすっぽりとおれたちを包み隠してくれた。人馬は境の上を通っていったが、べつに意気ごんでいる様子でもない。

おれたちが息をつめてひそんでいたのは、ほんの十幾分のことだろうか、すぐに人と馬の気配はまったく消えてしまった。

なにも大騒ぎするほどの事ではない、たかが豚飼いの夜逃げだ。たぶん嫌々ながらきた牧夫たちは、それ見たことかとの思いで帰っていったことだろう。

おれは竿を立て力をこめてカヌーを突きだした。川の中にでると舟は流れにのって向きを変えた。霧にぼやけた両岸は、多くの思い出と共に後へ後へとさっていく、今日あることを予期していなかっただけに、別れの感慨はまたひとしおであった。

カヌーはすぐに、前にジイアス家の二人の少年が流された早瀬にかかった。あの日は大雨ののちで川は増水し、急流は白い波頭をたて、泡だち沸き返っていたけれども、今は嘘のように水は枯れ、カヌーの平らな底さえも川床にすれて、ややもすると止まりそうになる、おれは舟からおりてともに手をかけて押した。

舟が深みにかかると、おれたちは緩慢ながらも流れに

のって、左側にみるギイドの小屋もすぎた。もうジイアス農場から離れた水の上にあった。出発から彼女はひどく無口になった。おれが信用できない男にみえ、何となくこの旅に不安を感じているようであった。

「なぜ、逃げたりしたんです」

女は訳を知りたいようすで話しかけてきた。おれは農場にかかわる経緯だけ説明した。

「それでは、あんた農場にいけばよかったのに、その娘あんたに惚れていたのかもね」

大地主の一族の娘が、流れ者の変人を好いたとでも、彼女は思ったのだろう。

「おれは気の向かないことは、指一本うごかしたくない性分なのだ」

なにを感違いしたのか、彼女はとっぜん笑いだした。

「マリオ、あんたは変な人ね」

彼女がなにをさして笑ったかは、およその見当はついている。

「あんた、わたしが旅の連れに頼んだのを、好かないのでしょう」

「本当をいえば迷惑だった」

「ではー、どうして嫌なことをしたんです」

「人が危ない目に会うと知れば、好き嫌いは言っておれんからな」

「恩になったわけね」

「なあにー、塩代とおもってくれ」

前の川下りの時とは、比べようもないほどに舟の進行は鈍い。この分だと本流にでるまで、あと何日かかるとも予測のたてようもない、日輪は望めるような空模様でないので、また時間ぼけの状態になった。カヌーは流れにまかせて昼食にした。

空はしだいに怪しくなり、おれが懸念していた雨模様になってきた。こぼれるほどに水気をふくんだ雲はいくえにも重なり、乱れ渦になって川面に低く垂れ下がってきた。

おれは急いで擢と竿をたて、綱をわたして山羊皮でおおい、にわか作りの幌にした。カヌーはまるで川に落ちた蓑虫の巣になった。沛然とおそってきた雨が通りすぎると、川面は卸し金の歯のように荒らだった。幌にもぐるともとより狭い覆いのなかなので、おれたちは体を触れ合わすばかりになった。これで濡れずにすむが、幌の中は胸の悪くなる生皮の臭いがこもってきた。雨足に視界はとられ両岸を見失っていたか、川葦の茎にすれるカヌーを見て、舟はもう流れている状態ではなく、いつの間にか川についた沼に入っているようであった。

おれはここで一泊するつもりで、竿を泥沼に立てカヌーをもやいた。こんな作業の間にも女は何となくもじもじと、落ち着かないのをおれは横目でみていた。

「マリオ、ちょっと岸によってくれない」

「なんの用だ」
「ちょっとね」
なんとなく言いよどんで、はっきりとしない。
「岸はどちらか分からないし、もう泊まるつもりでいるんだ」
彼女がなぜ舟から降りたいのか、たいたいの推定はついたというのは、おれは朝から舟を漕ぐようにして、竿につたわして二回もすましていた。カヌーは狭くて自由に身うごきできる広さはない。その席で彼女は腰を浮かしたり下ろしたりしている、差し迫った焦慮が女を苛んでいるようであった。彼女は柄にもなくはにかんでいた。
おれは笑いだしたい気分とともに、もうすこし女を苛めてやりたい妙な気持ちになった。彼女は船底に毛布をかさね幼児をそこにおくと、こちらに這ってきた。
「もうー、待てない」
声はひくかったが、切羽つまっていた。席をかえるときおれたちはちょっと抱き合う形になった。彼女はーふふぅーと笑って顔を赤らめたが、一刻ももてない排泄が女をせきたてていた。
「これをー」
アルミの平鍋を彼女にわたした。多くもない炊事道具だが仕方がない。
幼児が泣きだした。目をさますと空腹とひとりなの

で、泣き声をあげたのだろう。おれは蝋燭をさぐりだしてマッチをすった。

「すみません」

と言う声を背中できいて、おれは子供を抱きあげ身体を回して母親にわたした。幼児は乳房に吸いつくとすぐ泣きやんだ。おれたちは夕食にかかった。貧しい食事ではあっても腹をみたすと、何となく和やかな気分になった。

「あんた、なぜジイアス農場に三年もいたんです、ちょっと怪しいー、また、どうして逃げだしたの、話してくれない」

「話してもよいが、こういうことは客のほうからだろう」

「そうねえー、わたしの祖父は、未開の山に人にさきがけて入るのが好きだったらしいの、小屋かけで住んでいたP町の草分けの一人で・・・」

「ちょっと待ってくれ」

いくら小舟の中の退屈しのぎでも、いくさ前の昔がたりに、それも見ず知らずの他人の来歴に耳をかたむけるほど、おれは物好きではない。

「きいた事柄だけ、話してくれればよい、あんた、家の者と言ったが、誰かね」

「兄よ、わたしとはだいぶ歳は遵うんだけど」

「火がきたときは、いなかったのかい」

「前の日に、P町へでかけたの、先方からは町に入るなと言われていたらしいけど」
「あんたの家は、野火ぐらいでは燃えないだろうがな」
「誰も庭の手入れはしないし、枯れ草に埋まっていた倉庫から、火は風車の塔にうつって家の屋根に倒れてきたんです」
「うん。分かった。それであんたは兄さんに会いにいくんかね」
「他の人よ、その人に聞けばみんな知っているんだから」
「誰だね」
「雑貨の店やっている人で、まだ他に何かやっているらしいけど、わたしは知らない」
「万作か」
「あらー、知っているの」
そんなところだろうと推定はしていたが、彼女の驚きはおれの考えよりは大きかった。
「品物はあそこで買っていたからな、ジイアス農場を世話してくれたのも万作だ、彼はその筋の手入れを事前に知って、ずらかったという話だが」
「それは何時のことです」
「まだ十日にならん、用件があってある人に寄ってもらったら、店の戸は下ろしてあったそうだ」
おれには彼女の溜め息がきこえるようであった。ロウ

ソクの灯は丸い暈をもち、幌にくるまれたカヌーの中は、なんとなくこの世のものとは思えない気分に誘われて、おれはしだいに女の身の上に興味をもった。

「その子は万作の胤かい」

おれは思い切って突っこんで尋ねてみた。

「それが承知せんのよ、おれの知らんところで何しとるか分かるかいと言ってね」

万作の逃げ口上だろうが、案外そうとも言えないものもあると思った。

エバの父の死が一家の崩壊、人間としての不倫の因になったのは否めないが、十五歳になったばかりのエバの兄が、父に死なれたのはなんといっても悲運であった。

この辺りで死人がでると、ムトッカ（虻）という集落の共同墓地に葬る。以前その村は牛追い道の要路にあって、百軒からの住民がいたが、十年前の大洪水に、南方に通じる道が湿原にかわり、牛追いがよらなくなったのと、近くに出現した沼がよんだ悪疫のため村民は離散して、いまは十軒ばかりが残った寒村になった。

村人を証人にたて、喪主も手伝って穴をほり、エバの兄は父を埋葬した。

父が生前に、―困ったことがあれば相談せいーと言った男が万作であった。彼は子供にしてはませているエバに目をつけ、ゆくゆくは情婦にしてやろうと先を楽しみにしたのだろうか。

その頃からエバの兄のかかった風土病で、俗に言うフエリダブラボの病状が目だってきた。砂バエの伝播するレイシュマニア病原菌に犯されていたのてある。初期の症状は鼻腔の粘膜が赤くただれ、いくらか赤鼻にみえても、目に灼けた顔にはまだ目立つほどでもなかった。彼は好きな牧夫の娘がいて通っていたが、病気が進行してくると、鼻腔の隔壁も腐ってとけ、鼻梁が陥落すると顔の中に黒い穴があき、妹のエバでさえ気味悪いほどの容貌になった。それより前に、かなりのことには物怖じしない荒くれ男たちも、彼を魔性の者として恐れた。娘からはとっくに交際は断られていた。

これまでに、彼女は万作の子をひとり生んでいたが、生後まもなく死んだのは、奴の女房がマクンバに頼んで殺したのだ。と信じている口ぶりであった。

おれもその女には一面識はあった。北ブラジル産らしい混血女でどっしりとした自信たっぷりな、いけずうずうしい態度は、ひとつは太っているからでもあろう。この手の女はすこし暮らしが楽になれば、いくらでも脂がのってくる。猪首に黒、白、赤色の木の実や石を糸に通した、首飾りを幾重にもかけ、卑しい顔の眼寓の黒ずんだ奥の目は血ばしってにごり、疑いぶかく人をみる。石女なので、他の女に宿った万作の子に憎しみをかけるのは、当然と思えた。

身辺に差し迫った事情で万作はエバから離れたのだろ

うが、供給をうけている耕作者、小牧畜者はパトロンがこないとなると、いくら自給の生活でもやっていけないのは、おれも体験で知っている。農具のほかに塩、砂糖、コ！ヒー生豆、火酒、石油、批素化合物、苛性ソーダ、石炭酸、布、靴、薬品その他ちょっとした物もいる。いくら文明からはなれた荒野でも、人は動物と同じにはいかない。

そんな訳で、エバの兄は万作に会いにいったのだろうが、もう町にでられる容貌ではなくなっていた。そんなことで万作は嫌ったのか、病気の進行した昨今では、妹の彼女でさえ正視できないほどに顔は崩れた。昼間は気にまざれていても、夜になり身体がほてってくると、患部はうずきはじめる。

「痛いよう。痛いよう」

と泣きながら、土間をころげ回り、看護をしようとする妹に抱きついてくる。こうなればもう兄妹の家は畜生の世界でしかない。彼女は隠し事をする女ではなかった。おれは同情はしたが、他人の身の上にすこし係わりすぎた思いも一方にはあった。

「兄さんね、もう生きていないかも知れない」

ぽつんと、彼女はそんなことを口にだした。

「こんどは、あんたの話すばんよ」

と女は言う、彼女は洗いざらい言わでものことまで話したが、おれは良いとか悪いとかは別にして、事実その

ままを口にしたくはない。といって嘘でごまかす気持ちもない、名を聞かれてマリオと告げたようなものだ。この辺りではそれで通っているが、本名ではない。けれどもここで暮らしていれば、マリオは間違いなくおれ以外の誰でもない。

おれは自分の過去の大概は話した。事実でも不要のところは抜いたけれとも、真実性は曲げなかった。

雨はひっきりなしに降っている。幌にはった干皮のつづりは水気にふやけて縫い目がのび、そこから垂れる雨滴が背中にしみた。

「あんたの奥さんて人、情の強い女ですね」

「おれが逆上して殺そうとしたからな、妻でなくても怖れるだろう」

「あんたは一本気の男なのよ、わたしなんか誰も殺してもくれない」

おれはこの女と話していると、なんとも妙な気分になる。なんとなく考えさせられるのだ。

「それで奥さん帰ったんですね」

「怒ったのは里方だ。連れていってしまった。訴えないのを条件にして、財産はすべて妻の名義にして、おれは精神病院に送られた。母は町にでて縫い物などしながら、おれの退院をまっていたのだが」

「あたし、あんたのお母さんに会いたかった。あたしの母は先住民の娘でなにも知らなかった。教えてくれた

のは洗濯とクスクス（とうもろこし料理）の作り方と、オウムを飼いならすぐらい。父からも馬鹿にされて、日本に引き上げがあれば、こいつはおいて行こうとまで言われていたんです」

おれの語った母の姿が、女の心にそれほどの印象を与えたのには、おれの驚きは大きかった。楽しかったこと、苦しかったこと、哀しみの追憶は母の思いでが一ばん深い。そのような感慨が彼女に伝わったのだろうか。身の上話とは、いつもある慙愧の念をよぶものか。

女はなんとも言ってこないし、おれも話しかける気分ではなかった。

おれたちは蝋燭の灯を中にして、有り合わせの物で晩めしにした。話題のつきたいまは灯を消して寝ることにした。

雨は九十日の日照りを返すように降りつづいた。いつの間にかおれは眠ったらしい、カヌーの近くで水の音がしたので目がさめた。かなり大きな魚でも水中で寝がえった模様である。

舟がすこし持ち上げられた感じで、舟底をこすって通ったものがある。カヌーにかなりの横揺れがきた。おれのすぐ前で寝ていた女は、

「わぁつー」

と寝ぼけ声を上げて、おれにしがみついてきた。とっ

さに女の肩に手をやったので良かったが、こんな場合むやみに立ち上がられては、舟は転覆することさえある。おれはマッチをすった。必要なら灯をつけてもよかったが、つづいては何も起こらない、細い木片の炎は燃えつきて消えた。

「鰐のいたずらだ」

二人はほとんど抱き合わんばかりに、身体をよせていたが、おれは彼女の肩をおしてもどの席にすわらせた。闇の中でおれたちはだんまりのまま向かい合っていた。雨はあいかわらず降りつづけ、沼の水をたたいていた。

カヌーを焼く

「マリオ。起きてよ」

うつつで誰かに呼ばれている気がして、はっと目をさますと、女がおれの肩に手をおいていた。声をかけても起きそうもないので触れたのだろう。よほど気疲れがでたものか、なにも覚えずにぐっすり熟睡したものだ。背をのばすと狭い場所での無理がたたったのか首と肩に筋がつって痛みがはしった。

おれはカヌーから身をのりだし、浮き草をかき分け掌

に水をうけて顔はしめしたが、よどみ水では口はすすげないほど強い泥の臭いがあった。

沼はふかい朝霧の中で眠っている。クイクイと近くで水鳥のなく声がする。いつの間にか雨はやんでいた。夏の朝の霧はその日の好天の前兆なのは知っている。けれども今は冬の終わりだし、三カ月もの日照りのあとなので、天候の予想はなんとも云えないないが、夜の雨があっただけで、なにか柔らかい感触が満ちているようであった。

女はおれを起こすまえから朝の支度にかかっていたのか、フライ鍋の中で小枝を燃やしていた。幌の支え木の先に吊った深鍋からは湯気がもつれ立っている。彼女の取り柄はなんでも手早いことだ。目ざめの熱いコーヒ一杯は気がきいていると思い、アルミのコップにうけて一口つけてみた。胸の悪くなるような味が舌にのったので、思わず水の上に吐いた。

「あんた、もう口をつけたのか」

「まだよ」

「そうだろう。ここのは腐れ水だぜ、これは捨ててまた別に頼むよ」

「ええー、沸かせばよいと思ったんだけど」

「障るとは言っていない、味のことだ。まあー、いいよ。雨はあがったようだ。行くとするか」

「マリオ、一度岸によってよ」

彼女は昨日のことを思いだしたのか、言葉尻をフゥフーと笑い声できった。おれも女の切羽つまった変な身のこなしを回想すると楽しくなり、妙な味のコーヒーを飲まされた不機嫌は消えていった。それに好天になるらしい霧の動きが気持ちを明るくしてくれた。

昨日、この川についた瘤のような沼にいりこんだ折、カヌーの腹をすれていった葦の細い葉が、疎らにしか目につかないのは、一夜の雨で川の水嵩がふえたのだろうか、それは舟足を早くしてくれるし、浅瀬で舟底が川床にふれないだけでも助かることになる。

霧はしだいにうすれているが、まだ視界は限られていて、カヌーの前方に暗いかげりが、とけそうもない隈取りをもって動かない。濯木の茂みのように思えたので、その方に漕いていくと、そこは予想したとおり立ち木のある岸であった。

おれは舟を陸につけると、雨にふやけて重くたるんだ幌をへさきにつみ上げ権と竿はたおして船べりにおいた。たぶん彼女は気をきかしたつもりなのだろう。舟にのこったおれと幼児に、熱い一杯のコーヒーと哺乳ビンをもってきた。このたびの一杯は旨かった。母親にかわって幼い者にゴムの乳首をあてがってやると、そこはかどなく他人の子にも、旅は道づれというのか、慈しみの心がわいてくる。

見上げると、流れる灰色の雲に切れ目ができ、光の縞

がばっと明るく差すかとみる間に、すぐにつづく雲に隠されてしまう。雲の去来は目まいするほとにも速い。女は食事を整えると舟にのった。時刻は朝食にはまだ早い九時頃であった。

おれはすぐにカヌーを流れに突きだした。思いのほか舟足はすべる、このぶんだと夕暮れまでには、予定の送電塔のある岡の下までは着けるだろう。そこは片側が侵蝕された崖になっていて、川岸は小石まじりの砂州で野宿には格好の場所である。そこで　一泊すればもう舟旅は終わりといってよい。

それにしても道づれになった女は、行く先のことは考えているのだろうか、なんとも頼りなさそうな母子の身の上を思うと、自分の身の振り方よりも気になった。一舟の中で一夜明かした縁で、おれの心境にある変化が生まれて、出あいの時の突き放すような気持ちは無くなっていた。

目当てはP町にしても、そこに彼女の親身になってくれる者はいるのだろうか、万作はその筋の手から逃亡していて、尋ねるすべもないだろうし、兄という人にもたぶん会えないものと、なんとなくおれは推察した。女を約束の地まで送りとどければ、引き受けたおれの役目はすむ、ただ行き会ったというだけの縁でしかない母子ではあったが、なんとなく気懸かりになる。

彼女は当座の生活費ぐらいは持っているのだろうか。

S村の泊まりについて、困っているようならすこしは援助してやってもよい。しかし、おれも他人どころではないのだ。別れた後はさっぱり女のことなど忘れようと思った。

ジイアス農場を退去する時から、おれにはある目的があった。一二年ほど前P町まで行っての帰途、手違いが生じて本流で夜になった。どこか舟をよせる岸はないかと探していると、何処までも続くとみえた原始林の一ところに、ぽっかりと空いた開拓地があって、灯火のまたたきがあった。

そこで一夜の宿の世話になったたか、主はギオマール・アルベス・デ・ソウザ・サントスと言った。この辺りではサントでとおっていると言う、女房は死に、他家で育った娘が一人いて、父の世話はするからこいと呼ばれているが、現在はひとり暮らしで、釣った魚は塩物にして、廻ってくる商人に売ってたつきにしていると言う。

おれが贈った火酒で上機嫌になり、天井から吊った石油ランプの下で、主の話はいつ果てるともなくつづいた。サントは広大なM州の原野を掌に指すようにくわしかった。

おれがジイアス農場の豚飼いと知ると、

「ジョンの土地だろう。あそこは川に突き出た糸瓜のような土地で、先があると思って入りこんで、後から追

いかけられてみろ、間違いなく地獄行きだ」
おれの借地の地形までよく知っているには驚いた。若い頃は牛追いだと言ったが、主の語り口では家畜泥棒のそれであった。
「おい、若いの、わしも色々な仕事をやってきたが、漁師が一番だ、悪いことは言わん。実は娘が呼んでいるのでな、気にいった後継ぎをさがしていたところだ。誰でも良いのじゃやない、お前が気にいった。一切まとめて権利はゆずる、日雇い三年分払ってくれ、この河では名の通ったピンタード揚げのサントだ。お前は馬鹿ではないらしいから、仕事もすぐ覚えるだろう。二・三年地道にやってみい、一財産できるぜ、嘘は言わん」
すぐにでも手を打ちたい主の様子であったが、おれもまさか今日の状況を予想していたわけではなかったので、話はその場かぎりのものと聞きながした。

朝になって、おれが出立するにさいして、別れの挨拶には答えてはくれたが、昨夜あれほど勧めた用件のことは、おくびにも出さないのも変わっていた。
サントは達者でいるだろうか、この度はおれの方から頼むことになるが、一度蹴っている相談なので老人はどう出てくるか、その時になってみなければ分からない事ではあるが。
ついサントとの出会いの一夜に思いをはせていると、

女が声をかけてきて、かれこれ昼時だと言う、物思いにふけっているうちにおれたちはすっかり変わった土地の流れにあった。昼食といっても食欲のそそられる食い物ではない、砂をかむような木芋の粉だ。咀嚼に時間をかけてなんとか呑みこめる代物で、空腹はみたされても便秘がちになる。

幼児は重湯をもらったのち、母親の乳房に吸いついている。彼女はあまり食わない、遠慮するような質でもないから、おれは何も言わずにみておいた。幼児はまだ飲みたらないのか母の胸から離れようともしない、肥えた子と痩せた親が、おれには腹の袋にたくさんの仔をかかえて夜歩きする、鶏の生き血をすうガンバ！　そんな野性の小動物を思っただけで、いくらか酢っぱい臭気が臭ってくるようであったｃ

うす織りの白いレースのような雲をすかして、弱い日輪は空にあった。一群の雲が通ると墨一色ではいた焼け野原は暗くかげった。そしてしばらくすると、ぱ―と明るい陽光がさし、水面にも反射して波はきらめく、それもわずかの間に淡くなると消えていった。

昼食をおえたころから、カヌーは揺れはしめ流れは荒れてきた。おれたちは丘陵地帯の狭間にかかっていた。増水の折りの下り舟には危険な場所の一つであった。今日の状況ではそれほど気をつかうことも無いが、それでもカヌーが流れに押されて、岸に接触するのを避ける

必要はある。おれはへさきに立ったが竿を使うほどもなく、舟は狭間をぬけると前方のアンジツコの森に向かった。前の時はその茂みを横にみて過ぎたが、三カ月の旱の後の減水では今のが流れの本なのだろう。川は古木が水の上に根をひろげ、深い陰をなしている中に消えている。

おれは女に伏せるように伝えると、自分もそれにならった。挟間から急流におされたカヌーは、枝々の交錯した森の底に滑りこんでいったり　するとおれたちの頭上で奇声がわいた。舟底に身をかがめていた女は、なにか分からぬままに大声をあげたほどだった。こちらも面くらったけれども、先方でも突然流れこんできた舟に仰天したに違いない。すばしこい獣の群れは枝から枝へ騒がしく散っていった。

木の下闇をぬけて明るみにてると、荷物や舟底に点々と妙な塊がついているのに気がついた。竿の先ではらうと脚許にころがってくる。猿の巣の下をくぐったおれたちに、落ちてきたのは彼らの糞であった。

カヌーは平坦な果て知れないような土地にかかった。野火のあとまた草の芽ぶきの見えない原野に、銀色に光る流れはどこまでも続く、その先に青くかすんで望まれるのは他州の遠い山脈である。これから暮れるまでの川下りは、退屈を持てあますほどの旅になるだろう。おれは竿を舟べりに投げると、腰かけ板に背中をつけ足をの

ばしてくつろいだ。　女はなんとなく落ちつかない様子にみえた。彼女は何かおれに相談でも持ちかけたいのだろうと、おれは推察した。

「マリオ、わたしね、お金といってはなにも持っていないの」

思い切ったというふうに、彼女は話しかけてきた。

「うんー」

なるべく不愛想な返事をした。やはり持ちかけてきたな、という気持ちであった。

「貰った物を持っているんだけど、お金にしたいんです」

換金できるような品物を持っていて、おれに値ぶみしてほしいとは意外であった。彼女が身体からはなさず、枕がわりにもしている赤茶けた袋から取り出したのは、家畜の膀胱をなめした巾着であった。口はしっかりと結ばれてあるのか、皮の細紐をとくのにひどく手間がかかっている。

女はなにを取りだそうとするのか、おれは事のなりゆきに好奇心がわいた。指に力を入れているのか彼女の手は震えている。やがて紐をほどくと小袋を片手にのせ、無造作に突きだした。おれは受け取ってみて、その重さに驚いた。とっさに砂金ではないかと考えた。

この州では今でも時に砂金の噂の流れることがある。ここからは遠い川上では、過去に猫ながし（ママ）や碗か

けがいたというのは聞いている。そんな連想をしなから、受け取った巾着の皺でちぢんだ口をひろげた。目に入ったのは金の鎖、メダルに腕輪の類である。

大きな財産と思われる装身具と、持ち主である外見には貧しい女を、おれは相互に見くらべた。この均衡のとれない現象に、いくらかはおれの気持ちもうわずっていたのに違いない。いま手にしている貴金属はすぐには評価のしようもなく、まして今の通貨に見積っての見当はつけようもない。それとは別に、女が自分の宝をおれに見せるには、よほど思い切った行為であろうことは理解した。

おれはただ行き暮れの母子の世話をしたにすぎない。いくらか節度を守ってきたのは、その場かぎりの女とつまらぬ関係になりたくなかっただけで、彼女の信頼を得るような事はなに一つしてはいない、彼女が自分の持ち物を金にするにしても、もっと安全な方法があるように思った。つまり、この女はひどく危険な状況を自分で作りだしているのだった。

場所柄からみても、もしおれが女の所有物を強奪しようと思えば、赤子の手をねじるよりも易しいし、証拠も完全に隠滅できるはずである。何となくおれと女を結んだ糸はピンと張り切った感じであった。

おれは小袋の中に指をいれて、鎖の一本をつまみあけた。互いにからんでいるのがするすると離れてきた。垂

れ下がったのを掌にうけて、おやっと思った。一本の鎖にしては意外と軽いのである。

おれは過去にも宝石や貴金属の装身具を蒐集する趣味はなかった。けれども別れた妻は身につける装飾品には目の色をかえて興味を示す女であった。ひとつには妻の傾向を増長させるように仕向けたのは、おれであったかも知れない。夫婦の仲がささくれたち険悪になればなったで、胸止めや首飾りなど買って妻の機嫌をとっていた。ここ何年かはそんな浮いた生活とは、緑のない暮らしをしてきたが、過去の経験がもとになって、おれは直感で異質のものを感じとっていた。

金細工の装身具はあっさりと仕上げた小さな品でも、それなりの優美さと重さかある。

それが手に持っているのはかなり太い平打ちの鎖なのに、ずっしりと掌に迫る重量感に乏しい。不審にかられて細工晶の肌に目をこらした。ちょっと調べただけで、これは粗悪なメッキ物とふむより仕方のない品であった。メッキでも本物に見まがうほどの物もある。

持ち主がそれと知っていればなにも問題はないが、偽物を本物と思っていれば、そこに大きな誤算が生じる。いまおれが手にしているのは、聖人祭の日などに、お寺の広場で大道商人が売る二束三文の品である。まさか全部がこんなまがい物ばかりでもあるまいと、つぎつぎに引っぼりだしてみた。どれもこれも類似品ばかりか、な

かには緑青のふいたやくざな腕輪も袋の底にあった。
真偽もしらず貰うほうも無知だが、値打ちをつけて贈り、女の歓心を買い女心を思いのままに扱った。男の笑う顔が見えるようであった。
おれの様子から彼女はようやく疑いを抱いたようであった。
「せんぶ偽物だな、売れる品物は一つもない」
「えっー」
「かぶせ物で一文にもならないぜ」
酷であったが、おれはそう言うより仕方はなかった。
「そうー」
女の落胆ぶりは、風船のしぼむのを見るようであった。必死に耐えているようであったが、顔色は蒼くなり、目は吊りあがった。
女はおれの返した品を、一まとめにすると巾着におしこんた。そのまがい物を彼女がどう処置するかについて、おれは好奇心をわかしていた。すると巾着はあっさりぽいと舟の外に投げられた。
「あっー」
おれの方が不意をつかれて軽い叫び声を上げた。波というほどのうねりもない水面に、ポトンと音がして飛沫が上がった。広がる波紋は舟べりを打ったが、すぐに流れのうちに消えてしまった。
「あっー、はっはー」

女はさもおかしそうに白い歯並みをみせて笑った。
「ねえー、マリオ、万作の糞爺が本物よこすはずはないのに、なぜ今まで気がつかなかったんだろうね。これであんたにお礼もできなくなった」
そう言われると、おれは謝礼など期待していなかったけれども、いままで抜女の一面だけをみて誤解していたのが分かり、なんと返事をしてよいのか言葉につまった。指摘するまでもなく彼女は世に立ってゆけない、多くの欠点を持っている。しかし、当てにしていた金目の品が無価値と分かったとたんに、ポイと川の流れに捨てられる未練のなさ、諦めのよさには、おれは目から鱗のはがれ落ちる思いがした。
父の不慮の死や、おれの発狂にも、冷静に事件を処理してきた、あれほど出来ていた母でも、財産には執着を持っていて、おれが無産者になったのを、いちばん気にしながら死んだとは人づてに聞いた。
おれは裸の人間として、彼女に対比して内省をしてみると、まだまだ多くの物を捨てなければ一対一にならないと考えた。ジイアス農場での三年間の仕事の結果は、野火に焼かれて灰になり損害は大きかったが、アウグスト先生の勧めてくれた、不安定な心の治療には目的は達っしたことになる。
クヤバ者の言う、--ちょっとそこまで--は遠きにすぎたけれど、そこで生きる自信をつけたのは、なによりの

収穫と考えて、仕事の失敗はあまり苦にしなかった。けれども、生活に困らないだけの金銭はいつも身につけていた。いま神西農場はどんな状態になっているかは知らないが、おれの貰い分はＰ町の銀行に入っているはずである。頼めば駈けつけてくれる小林の家族や、いく人かの友人もいる。生まれて人に頭を下げなくてもよい環境に育ったので、他人に頼むのは嫌だとか、その日によって気持ちが変わるとか、何か目的を持って近づく奴は虫が好かないとかは、すくなくとも利害に関わりたくはないと考えるのも、支えてくれる物を充分に持っている者の保身と自尊いがいの何ものでもない。それだからこそ自分の所有物を失うのを何よりも怖れるのだ。

過去におれは財産と名のつくものを失ったが、いまだになお執着する心は払拭されずにあった。出会いの折からおれは彼女を見下ろしていたが、自分はとても対等に立てるどころではないと自覚した。

おればそんな心境で女を見た。彼女はすんだことは仕方がないという様子で、幼児を抱いてあやすと子供は母の胸で声をあげて笑った。

「あー、笑った。声をだして笑ったのは今日がはじめてだ」

と屈託のなさで母子はたわむれている。おれはがんらい感傷には縁のない性格とおもっているか、その時は不意を突かれてむっくりと熱いものが胸に湧いてきて、自

分でもおかしいほどに慌てた。

おれは自己の経歴から、余生は独身がふさわしいと考えている。それは一つの諦めからであって、とてもおれの立場を理解してくれる女性はいないものと決めていた。ところがなんとかして達したいと望んでいた心境を、一連の出来事を通じて彼女に見たのであった。育ちからして彼女は人の中では暮らせない、環境がそんな女にしていた。その点ではおれと似た者どうしのように思った。俗にいう手鍋さげてもというところか、おれは女の気持ちを訊いてみようとした。

一方ではのぼせるなと言う思いもあって、―お前が女の美点とするところは、すべて投げやりの無知から由来したものとか、ただ袖ふれあっただけのかかわりで、素姓も知れない母子を抱きこんで、生活を繁忙にし、先々で後悔しないのかーなどの声もきいた。

別れた妻アンナはあれだけの美貌でありながら、煮ても焼いても食えない性根には、ほとほと手をやき遂には発狂までしたのだから、このような杞憂は当然ながら、彼女の無教育からくる欠点は直せるもので、おれはこのような資質の女性を心底でひそかに求めていたのを知った。

「エバさん」

はじめて彼女の名前をおれは口にした。

「なんですね、マリオ」
「話がある、聞いてくれ、マリオは通り名で本名はツゲシ・シンサイと言うんだ」
「へえー」
「エバ、おれと所帯を持ってみる気はないか」
彼女には突然のことで、おれがなにを考えなにを望んでいるのか、理解できない様子にみえた。今頃になってなにを言いだすのかと思い惑ったのだろう。あの出会いの夜、橋の下の宿でおれが女の体を求めていった方が、彼女にとってはより納得できた行為にちがいない。不幸にもエバは生きてゆく条件の中で、自分のささやかな望みとは別に、万作のような男にも身を任さねばならない事情が、常について回っていたようであった。
彼女はまだほんの子供上がりの頃から、世の荒砥石でこすられたためか、人を見る目が一方に片寄ったのだろう。おれを不能者か、よほどの変人に思っているようであった。
「そうー、わたし始めからあんたはそこらの牛追いや日雇いじゃないのは分かっていた。なんとなく旦那の型よ、それでも変じゃない、マリオ、あっ、マリオしなかった。あんた、わたしを嫌っているんでしょう。拾ってやろうというのならお断りよ」
「うん、そりゃあー、出会いの折は喜んで迎えたわけではなかったよ、けれども見直したということだ、頼り

ない者どうしたから、助けあっていけると思うのだ」
「そうー、でもわたしは父なし子を抱えているんですよ」
「そんなことは分かっている。お互いに過去の事は忘れよう。子供はおれの子にすればよい」
「ツグシ、それは、あんたの本心なの」
「そうだ」
エバの大きく見ひらかれた両眼は涙でうるむと、輪にあふれて膝の上にこぼれた。おれは生涯の伴侶を約した女の手の上におのれのを重ねた。
いつの間にか平坦な流れはすぎて、カヌーは昼前に遠く望んでいた山並みの裾にかかっていた。水路は丘と丘の谷間に進路を求め、複雑な図を描いて本流に合しょうとしている。
この下流には広い砂州があるはずだが、そこで一泊するのは出発時の予定と変わりはない。けれども、まさかおれたちの新婚の夜になるとは思いもしなかったことである。
カヌーは流れの渦に巻かれて、横ざまになりそのまま岸に乗りあげそうになった。すぐにでも竿を取って流れをともに受けるように操作すべきを、櫂に手をだすような失敗をやった。おればエバとの突飛ともいえる結びつきに、なんとなく心は取られていて、舟の操りに必要な気配りに欠けたのだろう。すぐに竿に取り替えたが一瞬

の動作に間隙ができた。
カヌーは横からの強い圧力におされて、横すべりのまま岸によってゆく。このままでは転覆の恐れもあるので、水中にさした芋に力を入れた。へさきが方向を変えたとたんに、舟底にきつい衝撃をうけた。その反動でへさきは立ち上がり、ともは水をかぶるほどにも沈んだ。カヌーは水中の障害物は乗りこえたようであったが、その時グキーと舟底で鈍い音がした。エバは子供を抱いてかがんでいるので、まずは危機は脱したと安堵していると、
「わぁー、水が」
エバは大声を上げた。見るとおれの座席の下から、扇子を広げたように水が吹き上げている。おれは浸水の量を計った。裂け目に布でも詰めれば目的地までは行けるとみた。
「心配ない、沈みやしない」
おれは一応舟の安全性は確かめて安心はしたものの、意外に思ったのは、カヌーに触れた物体はたぶん水中に沈んでいた倒木だろうが、あれぐらいの接触で舟底に亀裂ができたことであった。
おれたちはようやく丘陵地帯を後にして湿原にかかった。視界に入ってきた送電塔は、いつまでも遠景のままでいるのに、岸の木の枝に寂然ととまっているかわせみ

は、しだいに後に移ってゆくのは、かなりの速さでカヌーは流れに押されているのが分かる。おれは絶えず浸水をかき出しつづけた。

前向きに座っていたエバは砂州が見えると知らせた。今朝、出立の折はSの泊まりまで送る時刻の予定なども考えていたが、もうその必要はなくなった。明日は槻爺に冷やかされるのは承知の上で、サントの小屋を訪ねてみよう。もしそこで彼の仕事を継げるなら、将来の計画もたてられるだろう。

舟が砂の広場についた時刻は、陽の傾きから推して夕べに間もない四時頃であった。岸に引き上げた舟の中でも一夜はすごせるが、カヌーの点検は欠かせないので、前方の崖にそって小屋掛けすることにした。両側を草壁にして屋根にはつづれ皮を張った。

おれば舟から荷物を小屋に運び入れると、近くの木立ちにゆき枯れ木をあつめてきて、エバに湯をたてるように頼んだ。

今夜はおれたちの初夜になる。灰と煙にまぶれて三日、水浴びさえしていないので、契る前の身体は清めたかった。はじめに幼児に湯をつかわした。温まるにつれて赤くなり、気持ち良さそうにしているチビを見ていると、黄色いソーセージのような物が浮いた。エバはなんでもないように、掌でうけると砂原になげた。

「この子、下したことはなく、お腹はとても丈夫なんです」

「育てやすい子なのだろう。しっかりした面構えだ」

幼少の頃のおれは、胃腸が弱くて母は苦労したと聞かされていた。父は旧家のとどこった血に活をいれるつもりで、この新天地に渡ってきたようであった。けれども神西家はあまりにも脆弱で取ったか見たかの荒々しい土地では、二代の半ばで早くも傾いてしまった。おれは養子にしたこの子の野性の血に将来を託すつもりになった。資性がすぐれていれば、いつか世にでる折もあるだろうと考えた。

「こんどはお前だ、流してやろう」

エバは幼い者を掛け小屋に寝かしてくると、大鍋に湯をつぎたし、砂場で裸になるとおれに背中をむけて座った。肉体の貧弱なのは意外であった。肌もかなり黒い、おれと同じ民族の血は半分あるにしても、なんとなく先住民の女じみている、寒いのか彼女はこまかく震えている。おれは湯加減をみてから、上から流し石鹸をこすりつけ背中をすますと、前向きに立たせた。鎖骨はくぼみ、肋骨は半開きの傘の骨のように出ばり、胸のふくらみはどうにか乳房らしいが、その下から胃にかけて張れがみえる、エキスモーゼによる肝臓の肥大は明らかであった。

見たところ、成熟した女体などとはかけはなれた、

骨っぽい少年のようであり、毛をむしり取られた鶏の印象をうけたが、女の下腹から腰にかけて子を生んできた生命がみられた。エバはおれに裸を見られたことで含み笑いをして、反応を窺っているようであったが、おれは笑いかえすどころではなく、彼女の慢性の疾患はかなり厄介な性質のものとの思いに気をとられていた。肩から胸、下腹から足まで洗ってやると、エバは袋からだしたウストップ印のインジゴのズボンをはき、メリヤス織りのシャツを着た。これで髪でも刈れば少年にみまがうほどだ。

「こんどはあんたよ、どうぞ」

改まって使う言葉もすこしは知っているらしい。けれども彼女は多分ふざけて言ったものだろう。おれは服をぬぐと砂州に膝をおってかがんだ。背中に石鹸をぬられ湯を流されると、目のさめるような爽やかな気分になった。立って身体をまわして対になった。

おれとエバとは三十糎も差がある、彼女はおれの下腹部に目をやった。

「わあー」

エバは予想外の物を眼にしたように、声をあげると手をだした。

おれたちはもう互いに異性は知っている、それも暗い汚い面をいやというほど知らされてきた二人だ。彼女が見えすいたポーズをせずに触れてきたのは、卒直な愛情

のあらわれと解した。

「おい、流してくれ」

そうエバにうながして片膝をおった。

陽は沈みかけていた。突起した石塊の上に建てられた鉄塔から、川を越して渡された送電線のいく条かの両端は碍子に吊られていても、半ばでは自体の重みでしわみたるんで、朱から紫に移ってゆく冬の夕景にかかっている。

おれたちはまだ暮れない内にと心ばかりの祝宴をはった。無いものづくしは常のことで宴というほどのものではないが、取っておきの牛缶に鰯の油漬け、オリーブ実の梅干し、ゴヤバ羊羹、貝殻マカロニの即席スープは沸いてきた小鍋に、酒瓶の栓はおれが抜いてコップに注いだ。おれは一口飲み、エバにも口をつけてもらった。

おれたちは誰からも祝福をうけない結合ではあるか、それだけに親子三人ひっそりと暮らしていくのは許されると思った。

「よろしく」

おれはエバに頭を下げた。

「わたしこそ」

エバは固い表情になって、えらく神妙になった。おれはすこし酔った。彼女はあまり食わず、スープを子供にあたえていた。

その夜、おれたちは夫婦になった。おれは初めて女心

をしっかりと握ったのを知った。
エバの反応もおれの未知のもので、彼女も新しい生活に望みをかけ、おれに身も心も任してくれたのはよく分かった。

翌朝、エバは頭痛がすると言うので、コ！ヒーはおれがいれた。背おい袋からアスピリン錠をとりだし飲まして寝かしておいた。
三日の野宿と環境の変化で体調をこわしたようであった。もう急がなくてよい旅になっていたので、昼すぎから出発してもよいし、エバの様子でもう一日ここに止まってもよかった。その間にカヌーを点検して舟底の裂け目にほろ布でも詰めて、ひとまずサントのところまで下るつもりでいた。
カヌーを裏返しにして応急処置の作業にかかった。するとそれは堅い木質にはいった罅ではなくて、詰め物をするほどに縁も広がるといった腐れかたで、とても川下りのできる状態ではない。腐食がどれほどのものか山刀云背でたたくと、ばそうーつと鋸くずの・塊のようなものが抜け落ちて、金だらいほどの穴になった。さいわい腐れはそれだけで、外縁は堅いようなので、皮を重ねて釘で止め、外は腰かけの板ででも補強すれば、残りすくない半日の旅はできると考えた。おれは作業に必要な山羊皮と釘をとりに掛け小屋に戻った。

エバと子供はよく眠っていた。

袋をかきまわしてから、初めておれは釘の箱を橋の下に忘れてきたのに気がついた。あまりにも慌てた出発だったので、道具箱はおいてきたのだった。カヌーが使い物にならないでは厄介なことになったと困惑した。おれ一人でなら山野の抜渉もさほど苦にならないが、女子供を連れてとなると、一刻も早く人里に着きたかった。舟が使えないとなると、早々にここを発つべきであった。おれはエバを起こした。歩く旅となるといくら行程の終りにちかいといっても、手ぶらという訳にはいかない、余分に見積った食料と衣服、重くても銃はかかせない。天候の変化にそなえでの山羊皮のつづり、その他、当座の役に立ちそうもない物はすべて投げて行くことにした。おれはすぐにでも出発するつもりで、一足さきに川原にくだってエバを待った。

子供づれの支度にしても、あまりにも手間どっていた。おれは待ちきれずに様子を見に戻った。するとエバは崖を背にずれたように倒れでいた。おれは荷物を投げてエバを抱きおこした。起き上がると目まいがしてと彼女は弁解した。病気なら仕方がない、もう一日ここで過ごせば治るだろう。

エバは風邪をひいたようであった。熱さましは余分にあったが、定量をこす服薬は考えものと思い時間をおくことにした。それにしても熱は高すぎる。額など燃える

ようだ。用水にしたしたタオルを彼女の頭においた。その間にも幼児は眼ざめで泣く、子供には粉乳を湯にといて与え、病人には投薬すると、もう昼ちかくなっていた。おれは一人の昼食をすましたが、舌は荒れたようですこしも味はなかった。

おれは病人の横に座っていても、ほかに何もすることはない。時々タオルを冷やして替えるぐらいだ。一日は暮れていった。子供とエバに粥を作ってやったが、彼女は夕食もとらなかった。薬は与えてあるのに熱はいっこうに下りそうもない。この容体だと肺炎になるおそれがある。おれはようやく病人に危惧の念をいだいた。

雨にならないので助かったが、夜になるとかなり冷えてくる。草の壁などあっても無いにひとしく、忍んでくる寒気は防ぎようもない。焚き火をしたが集めた木の枝もつき、夜半にカヌーを壊して薪にした。

二日目、病人はお湯をすこし飲んだ。熱は下ったが、エバは黄色くなり縮んでしまった。

どうも風邪だけではなく、寄生虫による肝糠の機能障害が加わっているように思えた。

全く運がついてない。カヌーは浸水のままでも、なんとか川は下れたのであった。人はどんな悲運にあっても、望みを持って行動すれば、行為そのものが希望につながるが、今のおれは動きのとれない状態に落ちこん

だ。どうもエバの病状は悪化するように思えた。
お粥をすこしとったが、その後でどす黒い粘液をたくさん吐いた。
三日目、一時下がっていた熱はまたぶりかえしてきた。うすい胸は呼吸のたびに上下にうごき、それにつれて小鼻もうごいた。唇も紫色にかわって、病人はもう呼吸だけにあえぐ状態になった。風邪から肺炎になった兆候はもう明らかであった。
後日からみると、おれたちの出会いは、おおくの因子が集まり、相互に係わりあっての結果だろうが、そのような原因をつきとめて、好まざる事態を除こうとするのが、人間の知性であろうけれど、他方に人間にはどうにもならない大きな力のあるのを信じる人もある。人によっては苦しい立場になれば、そのような存在に頼ろうとするが、おれにはとてもそんな行為はできそうでない。おれはただエバが病気に抵抗して治ってくれるのを願うだけである。
「明日は起きられるわね」
一日目は笑顔で答えたのが、二日目には、
「苦しい」
としか言わなくなった。三日たって、
「子供をお顧いあなたに似た名前、マウロとしてね」
と言う。彼女がなにを考えているのか、おれはその言葉に容易ならぬ事態を読んだ。

事実、熱はなくなっていた。体力は消耗していつたのか、手などは冷えきっていた。おれはエバのただならぬ容体をみて、二日目あたりから、人の助力は得られないものかと思案はしていた。しかし、病人はたえずおれを求めてきたので、離れることはできなかった。

それがその日から仮眠の状態になった。おれは静かに小屋をでて、送電塔の立っている丘にのぼった。そこからは四方に広い湿原は望まれたが、目のとどく限り人家らしいものは一軒もなかった。

四日目。小康をえた。彼女は自分では起きられると思って、頭を上げようとしたが、もうその体力はなかった。また子供のことを口にした。おれはもう怒ることもできずに、ただ病人を安堵させればとしか考えなかった。

夕方になって、空はくもりひどく冷えこんできた。エバの容体が急変した。

「いやー、いやよ」

致死期の病人がなにを感じての身もだえであったか、エバの短い生涯の中で一ばん嫌悪したことの原体験が、うわ言になってでたものだろうか、それともなにかの幻影でも見ていたのだろうか、これといった手当てもしてやれず行き倒れにもひとしいエバの死は、ただ哀れの言葉につきた。

おれはその夜、ロウソクをつぎたしつぎたしてエバの

通夜をした。なにも知らぬ子供は母親の脇に寝かした。生と死に別れたこの夜を共にすごさせてやりたかった。

おれは後日のため彼女の持ち物を調べた。袋には粉乳缶、子供の着替え、彼女の服、ポケットからは鏡と櫛、中身のない財布がでてきた。どうしても必要な出生届、身分証明書はどこにもない。これではエバと言っても、姓もなく誰の子とも分からない。行き倒れの浮浪人と同じになる。こんなことなら前に父親の姓ぐらいは聞いておけばよかったと思った。

明日はエバを埋葬しなければならない。緊急事態で内縁の妻を仮埋葬したと、役所に申告するにしても、こんな事情ではひどく煩雑な手続きが予想され、そのような件はおれがエバを哀惜する情とは、別の次元で処理されるもので、いちおう居所の決まった時点で、その筋の人にでも相談してみようと思った。

翌日、他人の土地なので人目につく所は避けて、木立ちの中にエバを埋めた。また来る日のために丸木を盛り土に立てた。すべての作業を終えると昼すぎになった。痺れるような疲労があって休息したかったが、一別も早くこの土地を退去したかった。掛け小屋は壊し、余分の荷はカヌーと共に火を放った。

おれはエバと出会うまでは、いつも求めてはいたが、意義のある生活とはどんなものか分からないでいた。そんな意味はいくら頭で考えでも見つけることはできない

のかも知れない。エバは死に、遺児はおれの手許にのこった。独り者にとって子供の養育などひどく厄介なものだが、これは誰からも押しつけられたのではなくて、おれが進んで養子にした子である。エバとの約束もある。今のおれには生きがいのある生活とは、この子を育てること以外には無いと考えた。

「さあー行こうか、今日からは二人だけだぞ一

と子供を両手で上げて高い高いをしてやった。無心の者はケラケラと喜んで果てもなく笑った。母の死も知らぬ童子と、遺されたおれの不幸に重ねて、ひとりの人間の死を悼む悲しみがどっと胸につき上げてきた。

（うつろ舟　終わり）

赤　縄

（うつろ舟の続編）

流　亡

あの日の午後、おれはマウロを背におい、砂洲をあとにした。遅い時刻の出発ではあったが、川づたいに歩いて日暮れまでには、サントの舟繋ぎ場へつきたいものと思った。しばらく行くと牛馬の踏みかためた小径もきえて、おれの予想のほかにあった広い湿原につきあたった。丘陵の背が南方にのびているその鼻さきで、この支流が本流に合しているとおおよその推定はした。

おれはこの湿原地を渡渉するつもりで、柔らかな表土に網のようにおおっている、水草のうえを歩くうちに、足もとから水がしみだし、くるぶしまで踏みこむようになった。目測による目的地への近道をえらんだわけだが、ここは泥土に脚をとられるのを恐れて放牛も近づかない場所とわかり、やむなく戻り道をして台地にむかった。

ところがそこは一面に丈たかくのびたカミサリ草に、茨のからみあった荒野で、人畜の通った足跡もない。おれは一足ごとに剛い草の葉をふみしだき、行くさきをこばむ刺のつるを打ちはらいして進むうちに、まだ冬のなごりの短い北よりの太陽ははやくも傾きはじめた。

前方に青黒く茂った鬱林を望んでいたが、やっとそこにたどりついた。森の中は下草もまばらで、地面も乾いており、今夜はここで野宿することにして子供と荷物をおろした。

川からはかなり離れてしまったが、方角は分かっているし、どちらにしてもサントの小屋はそう遠くはないので不安はない。けれどもジイアス農場を去ってから、七日も野に伏してきた。その困難な旅のあいだにエバの死があった。いまはまだしびれたような感覚が脳裏にわだかまっていて、あの出来事が自分の生涯にどんな影響をもつかは、まだよくは考えてはないが、彼女と約した子供を育てるということは、一時の決意ぐらいですむはずはなく、男には無理ともいえる煩瑣な世話がいる。けれどもその世話を通じてなんとなく親と子の情がかよいはじめていた。

その日の野宿にしても、独りなら空腹はおぼえないので、晩飯など憶却で用意する気にもならないが、幼児はおれの都合の他だから、乳つくりに湯が必要となれば、おれもスープぐらいはすすってみたい食欲はわいてく

る。仔を胸にだいて行動する猿の親子が、猟人の銃口の先にたつような危険はなくても、互いにつながる生命であるのは、これまでふかくは知らなかった父母の心だった。

この季節はうるさい蚊はいず、蛇なども穴からでるのに、すこし早いので安心だが、ここは家を焼きだされて、橋の下ですごした一夜とは事情はちがう。未知のうえ他人の土地だし、すこしの油断もできない、しだいにふけて行く夜のしじまをさいて、闇の中でガァーーと鳴く夜鳥の声は、この森をいっそう恐ろしいものに変える。

大きなフイゲーラ樹〔いちじく科〕の根元にすわる場所をととのえ、前に半円の形に粗朶をつんで焚き火をした。マウロはおれの股のあいだでかるい寝息をかいている。

おれは自分の半生を回顧すると、なんとも理解のできない因縁がついて回っている気がしてならない。おれの自由意思でえらんだもの、他者からの動きによったもの、これらすべての契機の一つが欠けても、現在の自分は存在しないことになるが、これは予め歴史が決められないように、自分の人生はおれが選択したにしてら、時には予想もしない事態になるのを解けない謎に思った。父母の死や、おれの発作、アンナとの離別はおれの意志とは別の環境の力が作用しているが、それは十

年から四年もの過去のことになった。けれどもエバとの出会い、彼女の死はまだ強い印象となって思考を乱してくる。

しかしこれはもうすぎた事実として、おれの力の及ぶところではない。これも一つの運命だろうが、これからは自分で納得のいかない生き方はしたくないものと思った。

頭の上で小鳥たちが騒ぎはじめ、森の一方が明るんできた。一夜燃やしつづけた焚き火は白い灰の山になった。無事に一夜をすごしたという安堵からか、性根もなにもはてて睡魔に引きこまれてしまった。

夢を見ていた。--それでは行くからねーと心残りをみせて手を振ると、だんだんに小さくきえてゆく。--おおい、エバー、こんな児をおいていっては困るじゃないかー、とおれは彼女を引きとめようとして声をだした。ドサッと音がして目がさめた。夢の中で腕を上げたのだろうか、銃は肩からはずれて倒れていた。

日はとっくに昇っていて、陽光は木の葉もれに、地上にいく条もの光の縞を織りなしている。表土から立つらしい水蒸気が光帯の領域にはいると、渦をなして移りながれ、影にうつると消え、またつぎの光の帯にはいると、微風にゆれるサラサ織のように揺れ、縞模様を描きながらたゆとうて消えてしまう。

エバの去って行った闇はもうどこにもなく、おれたちはすっかり明けた朽ち葉の匂う森の中にいた。マウロはおれの下腹を枕にしてよく眠っている。その時、はじめてエバがおれたちをおいて、遠い旅立ちに去ったのを実感した。このような認識はある時間をおいて、突如として残された者を襲うものだろうか。

おれは身も世もないほどに悲しく辛く爪をはがされる思いで、耐えきれずに獣のように声を放った。マウロが驚いて目をさましてむずかった。お尻がぬれている、腹もすいているに違いない。

死者は残った者の思いでのなかに、または墓碑のようなものとして忘却にたえても、それは一つのそれなりの完成で、生者の条件から外されるが、生者は食ったり排泄したり、実にじっとしておれない生理の欲求がある。それ故にこそ生き身なのかも知れないが。

幼児のおむつをかえてやると、黄色い良い便をだしていた。温かい乳をあてがうと、チビはご機嫌で、頬は紅くそまってふくらんた。今日かぎりでもう野宿はやめにしたい、夕方までにほなんとしても、サントの小屋につきたいものと望んだ。

森をでて方位を南方に定めて出発した。

湿原をさけて迂回したので、この台地からすこしずつ西につめて行けば、もとの支流の下にでられると推測し

た。

下り坂をおりて川べりにでると、森もすけてきて、枯れ木の多いのが目につく、樹皮は剥落して木肌は雨風にさらされて白い。地下水が上昇すれば枯死する種類もあるとか、または野火にあぶられ芽立ちができずに枯れたものか、おれは森の墓場にはいりこんでいた。

倒れている幹の一つを蹴ると、乾いた音がして木肌の裂け目から、くろい蟻がふきこぼれるように湧いてでた。芯は虫に荒らされてスポンジーになっているらしい。ついその時まで、なにかで川を下る発想はなかったのに、こんな倒木の何本かを組めば、おれたちを楽に運んでくれるのではないかと思いついた。

足もとの一本を持ち上げると嘘のように軽い、近くの立ち木に手をかけて押すと、わけなく根元からゆるんで傾き三つほどに折れた。

昨日、この辺りの地形は分からなかったか、すぐそこまで沼がはいりこんでいる。おれは水ぎわまでそれらを運びだし、蔓で丸太をしっかりとゆわえて二段に組んだ。この奇妙な代物を青みどろの水面に押してやると、けっこう二人を乗せるほどの浮力はある。枯れ草を刈ってつみ、腰かけがわりにした。竿も一本切って用意はとととのえたものの、なんとも頼りない川下りになったが、これでも今日の旅立ちだから、やっーと声をかけて竿に突きを入れた。すると眠っていたとばかり思っていたチ

ビが声をあげて嬉しがった。

これは縁起のよい門出だと思いたかった。沼は予想どおり南にひらけて川に結ばれていた、流れにはいると筏は変な貝合に、浮くでもなく沈むでもない状態でおされて行く。

おれは事故に用心して、なるへく岸から離れないように気を配った。それにしても水の旅は楽なうえに速い、おれたちは思ったよりも早く、原生林をひらいて人の住んでいる土地にはいった。川岸に群れて餌あさりしていた豚どもは、奇態な者たちとのとつぜんの出会いに、狂ったように悲鳴をあげて暴走をはじめた。丘の農家では裸の子供が手を振っている。ジイアス農場をでてはじめての人との出会いであった。もうすぐにもこの支流が本流に合している地点につくだろう。

やがて視界のひらけた前方に、海とも見まがう水のひろがりが茫洋として、なんとも頼りないおれの筏を迎えようとしている。サントの住まいはこの大河を下れば右岸になるので、いまのうちに流れを横ぎって対岸に渡りたかった。支流といっても本流ちかくになると、水量も増し流れも荒い、おれば竿をおして川芯にでた。筏はともに波をうけて持ち上げられる。するとその反動でへさきが沈む、といった具合で筏はひどく揺れながら回りだした。材料はもとより寄せあつめの弱い代物だし、蔓の結束力もどれほどに抵抗できるか不明である。これはこ

のままにしておけないので、竿一杯流れにさしいれて、力のかぎりの制御をこころみると、筏はしだいに回転をゆるめながら対岸によって行った。

おれたちが鳥の巣のような浮遊物に乗って、サントの舟繋き場についたので、老人は驚いた様子だつたが、子供を背におっているのには目をむいた。けれども彼の顔はほころんでいるので、すくなくとも嫌われていないのはよめた。

「きたかー。どのみちくるとはにらんでいたか、ガキ連れとはなあー」

おれはどう説明したらよいものかと迷っていると、老人はつづけて訊いた。

「連れはどうした」

なぜ訪ねてきたかを問わずに、サントか身の上を尋ねてくれたのは嬉しかった。

「死んだー。三日になる」

自分でも驚くほどの突きはなした言葉かでた。

「そうか、事情もあるんだろうか、あとで聞こう」

「相談したい件もあるが、今晩は泊めてもらうよ」

「おおー、よいとも」

とサントはこころよく受けてくれた。これで今夜はなにはともあれ屋根の下で休めると思うと、苦しい旅もこれで終わったという安堵で、肩の荷をおろした気軽さをおぼえた。

マリオに湯をつかわして乳の瓶をあてがうと、温もり腹一杯になった児は柔らかな床ですぐ眠ってしまった。

おれば川へ水浴びにおりた。時刻はもう夕暮れどきで、岸によるさざ波は白く打ちかえしていても、対岸の森は暗く水際をくぎり、青く光る星が一つその上にあった。流れに身体をひたすと、用水の冷たさが凛冽として、どことなく痒くてほてった皮膚をひきしめ、やっと生き返った気分になった。

その夜、主から晩飯によばれた。一年前にも世話になったが、一夜の好意の宿をそれほど気にとめたわけではなかった。この度は再度でおれはこの漁場を引き受けてもよい腹できているから、主さえ合意すればこの住まいは自分の家ともなるので、観察の眼はただの好奇心ではない、これは草葺きの大きな掘っ立て小屋といってもよいだろうか。四方は吹き抜けで壁はない、ただ主の寝間は台所のすみに、土壁で囲ってあって戸もある。

台所の真ん中にでんと座っている、老サントが自ら鋸で原木を引きわったという食卓。牡牛一頭を姐上にしても、びくともしないほどの代物。その横に人の通れるほどの幅をのこして、煉瓦でくんだ頑丈な竈。いくつかの鋳鉄の鍋はみがかれて黒く艶がでている。

食器棚には容器がそれぞれにその処をえているといった秩序と、余分の物は一つもない簡素はこの家の主の気

質を語っていた。
饗された料理は、油いためのの米飯、豆汁、魚のスープ、これは旨い川魚料理だった。ドラード（鱗が金色をした魚）のぶつ切りに玉葱をいれた塩味だが、黄色い脂の玉のきらめき浮いた熱いのをすすると、一度に視力が冴えてくる思いがした。
食後、くつろぎのひと時、サントは太巻の煙草をまいて、おれにすすめてくれたが断ると、
「お前はやらんのか」
そうか、とうなづき、火打ち石をうって牛角につめた火口にうつし、一息すって濃い紫煙をはさだした。この煙草は裏の畑の一隅で穫れたもので、干して縄にあんで、ひとりでは喫いきれずに余分は売るという。米も不作しらずに穫れるし、買うものはあまりない。
世の中がどう変わろうと、わしにはなんの関心もないといった表情が、陽にやけ川風にさらされた老漁師の顔にでていた。
「かみさんは、エバとかいったな、よかったら話してみな」
おれはエバとの出会いから、彼女の死にあい仮埋葬したこと、子供は約束でもあるし、育てたいと語った。
すると老人はにやりと笑った。
「お前は迷ったのだぜ、自分の知識に負けたのだな。コンパドレ、ゼルバーノ・（サントの昔仲間、娘の名づけ

親）と同じだ。先生はあれだけの見識がありながら、女房運のない人だ。エバはなあー、もう長くはない命なのは分かっていたのだ、産卵すればすぐに死ぬ虫と同じだ。そこへ具合よくお前に会ったという筋書きだな」

老サントは一筋縄ではいかない、世間の表裏をわたってきた男とは推しはからってはいたが、おれの過去までは見抜けないと考えていた。

「爺さん。おれは自分の知恵に負けるほどの教育はない」

すると、サントはなにを考えていたのか、大口をあけて哄笑した。

「隠さんでも分かっとる。S泊まりの町長のように、煉瓦工あがりが急に恰幅よく見せたくて、かえって品を落とすのだ、お前のは隠そうとしても尻尾はでとる、他人の子を育てるのもよいが、あまり気負わんこったな。この子を大きくしてなどと夢をみていると、とんでもないことになりかねないぞ」

「エバの母親というのは先住民の出らしいのたが、両親とも墓はムツッカ（虻）村にある。エバをそこに改葬してやりたいんだが、どんなもんだろう」

「ここらでは聞かんなぁ。家で死ねん奴にたいていろくな者はおらん。埋めてもらうだけも運がよいのだ。これは他言はせんことだそ、それにしてもガキの出生届けには家族の名は要るもんだからな。いよいよ分からなければ後家の腹でも借りるか、まずムツッカに行ってみい」

「まあー、待ってくれ。その前に決めたい件があるんだ。一年前の話はどうなんだ。この漁場を任すという話だが」
「お前そのつもりで出てきたのと違うのか」
「そうして貰えたら有り難いのだ」
「それじゃ、それで良いじゃねえか。わしは面倒くさいことは昔から嫌いだが、これだけは決めとこうか」
一、仕事はすべて伝授する（一カ月ぐらい）。
一、権利金として二百コント払うこと。
一、設備はすべてそのままにして持ちださない。
「これだけだ」
おれはサントから、この漁場から上がる一年の金額をきいていたから、もっと求めてくるかと思っていたが、これなら安い買い物だ。
「じゃー、そういう約束にして貰おうか」
「ときに子供だが、S泊まりに信用してもよい後家がおる。石女だが、わしからだと言えば承知してくれるだろう。明日にでも行ってこい」
爺のすすめる託児というのは、老人の好意には違いなかろうが、やはり一抹の不安と、エバへの無責任を感じた。
「爺さん、子連れというのは駄目か」
「お前の気持ちは分かるがのう、大きいのでもかかってみい、上げるか引き込まれるか命がけの仕事になる。そ

んな丸木舟にガキを乗せておけるか」
サントの表情は険しく、おれを凝視した眼は光った。
―お前は遊び半分にこの仕事をしようとしているのかー、問うていた。
すくなくとも、おれが老人から仕事を教わる間は、自分の我が儘は通らないと思った。
「それじゃ、明日S泊まりまで出かけるよ」
「お前はもの分かりがよい。それが一番だ」

翌日、おれは子供を伴って、イネスという女をS泊まりに訪ねた。船着き場とは名ばかりで、流れに杭をうち四枚の板を五米ほど突き出してある。桟橋から丘のうえの黄色い教会に通じる道の両側に、居酒屋、雑貨店、製粉所、薬局これは公証役場と郵便局をかね、他に保安官もいる五十軒ばかりの集落で、後家の家は一本道の突きあたり、左側の一軒ときいていた。
「親分さんのお口ぞえで、どうも遠方から」
イネスの顔立ちから、先住民を先祖に持つ裔とみたが、四十前のようでもかなり老けていて、歳のほどはよくは分からない、束ね髪にしているので顔立ちはかたい。初めての印象では物堅い人柄のように思えた。彼女のなにか勘違いしたような挨拶に、おれはどう切りだしてよいものかと、まごついているとイネスはすぐにおれの用件を察したものか、子供を抱き上げて可愛い児だと

頬ずしてくれたので、おれも一応安堵した。
サントの指示もあったので、子供の養育料としての給金を持ちだすと、―旦那さんの思し召しで結構ですー、とうけてくれた。この一言でおれは彼女を信用した。
S泊まりへの日帰りは疲れた。けれども重荷になっていた児を預けたので、気分は軽くホット一息ついたのも、おれの本音だったかも知れない。

その晩、燻製の腸詰めをさかなに火酒の瓶をたて、爺とムツッカ行きについて相談した。
「良いとも。ムツッカへは馬で行け、老いぼれだが二日や三日の旅にはなんともない。それでお前ムツッカへの径は知っとるんか」
「おおよそ、この先のリオ・ダ・ベーリヤ（おばばの川）にそってのぼればよいのだろう。方角は北になるか」
「とんでもない、それではムツッカどころかサンゴン（女王蟻）にも着けないて」
「えーっ、サンゴンという村はこの先にあるんですかい」
「そんな集落はない、だから着く道理はないだろう。テモーゾ（強情者、馬の名）に乗って行け。奴なら道のりはよく知っとる。日暮れ前にコンパドレ・ゼルバーノの農場にはいるから、一夜世話になって翌日墓地にいけ、帰りはもう一度泊まって戻ればよい。お前とコンパドレは話が合うだろうて」

エバの家族の名を調べにムツッカに出かける朝、サントは早起きして口笛をふくと、つねには放し飼いになっているが、乱れた牧草から顔をだした。餌箱のとうもろこしの粒を食いおわった頃、主は鞍を持ちだし山の稜線のように骨のでた背にすえた。

とくに用意するほどの行程ではないと言って、爺はアルミの水筒とファロファ（木芋粉に肉をまぜ油で妙った旅行食）のはいった肩かけ袋を渡してくれた。彼の持ち物にはなににでも魚の臭気がついている。どのみちおれも魚臭い男になるのだろうが。

老人がこれだけの世話をしてくれるのは有り難かったけれども、道順など一つも教えようともしないで、こいつが日暮れまでにコンパドレの地所にはいるから、黙って乗っておればよいという頼りなさだ。

「、息子をなー、ゼルバーノの所に連れて行くのだぞ」

と爺が掌で馬の首をたたくと、奇妙にも主人の言葉が分かるように、上唇を巻き上げて頭をそらし、いななくのも変なものだった。

おれは馬の世話になった。手綱は鞍の前立てにかけて、馬の脚にまかせることにした。背でゆられながらも、やはりいくらかの不安はある。現代のおれたちはおのおのの理性による判断しか信用しないような教育をうけてきた。けれども自分の認識は信憑性に値するだろう

か、おれは過去を回顧するまでもなく、然りとはいいがたいが、さりとて自己を捨てる気にもなれない、世にいう外道の者たちは、親分子分義兄弟の契りをむすべば、上の者には心服して従うという。密猟者とか砂金掘りなどの荒くれ男たちの世界では彼らは粗暴なようでいて仲間の心の動きはわかってしまうらしいのだ。おれはサントの妙な笑い顔を思い浮かべると、鞍の上で目をとじた。

一年とすこし前のこと、手違いが生じて一夜の宿を乞うたのがサントとの出会いであった。晩飯にだされた食い物は、辺境になれたおれにも手のつけかねる代物であった。こんな鍋物ははじめてで魚の強い臭気があった。主人は客にもすすめるが自分でもさかんに食う。旅の者が宿をたのみ、快く許されて食事までふるまわれ、主人の相伴を断るわけにはいかない。おれは吐き気をおさえようと、コップの火酒をぐっとあおった。

「若いの、やってくれ、これは精がつくでのう」

といいながら、ズルズルとすすったところ、主の口の中で始末がつかず、長い紐ににたものを手でつまみだし皿のうえにおいた。それはナマズのひげとみたが、頭と臓物だけのごった煮の汁物だった。酒の上でのピアーダ（ジョーク）をやると、この老漁師は腹をかかえて笑い、すっかりおれが気にいったらしく、息子とよび、跡を引き受けんかとまではなした。

その頃はまだジイアス農場を引きあげるなど、考えてもいなかったので、おれはその話には乗らなかった。サントは酔ってはいたが思考に乱れはない、―わしは無学だが日頃から考えていることがある―というと、おれの解釈と評価を求めてきた。易しい子供のような質疑から、どう答えてよいか迷うような難題もあった。その中に、人はなんの為に生まれてきて、生きて死んでいくのかというのがあった。人生とは何ぞやとの問いたろうが、この問題はおれにも分からない。そんなわけで爺さんに反問すると、

「わしか、兄貴などと持ち上げられて、血気にまかせて気のむくままに遺りたいことをやってきたが、年にはかなわん。それに時代じゃ。この川岸にひっこんで十年になる。わしの半生など荒れ野の野鼠のようなものだが、仲間はくんだが人から顎使されたことはない。まあ―、こんなところじゃ」

「立派なものだ、爺さん。人生なんていくら頭で考えても分かるもんじゃない。実感だな。人としてこの世に生まれ、自由に生き、老いて自然の法則にしたがって死ぬ、この他になにが要るかね」

老人はひどく喜んで、お前ほどよく分かるように話した者ないと褒めてくれた。

馬はおれを乗せて川岸から離れると、しだいに高台へ

とむかった。地質は黄色っぽい砂地にかわってきた。このような痩せ地では耕作はおろか放牧にも適さないのか、視野のかぎり人家はみえない。一白っぽい肌の矯木のいじけ曲がったのが、葉をつけて地表を覆っているので、遠目には緑の野らしくても、下草は地苔の類か、刺のある草でしかない。はおなじ歩調で蹄をならしてゆく。日がしだいに昇ると日差しはつよくなり、額に汗がふいてきた。

すでに昼にちかい時刻になっていた。窪地にかかると澄んだ流れがあるので、ここで馬を休めて水を飲ませた。おれは昼食をとり一刻ののちまた馬に乗った。

いつから連れになったのか、地蜂のような虫がおれたちに纏いついて離れない。径といってはないのに、前方でちゃんと待っていて、おれたちが近づくとパッーと飛んで十米も先で止まり、また飛び立つが、おれたちの行き先を知ってかいつまでも先達をつとめる。

いくつの丘を越え、なんど疎林や水のない窪地をすぎてきたのか、うるさいように纏いついていた蜂もいつか消えて、しだいに日は西に沈みはじめた。昼すぎから前方に望んでいた、ひときわ高い丘陵にのぼりつめると、そこからはひろい盆地が展けていた。処により木立ちもあり、鈍く光っているのは沼のようであるが、人が住んで、つましくても炊煙の上がっている所はどこにもない。

この年月、たいがいの漂泊になれてきたおれも、この広漠とした眺めには、思わず馬の手綱をひいて立ちどまった。借地をしていたジイアス農場も僻地には遠いないが、牧草を食みながら移動する放牛の群れと、それを見張る牧夫はいつも何処かにはいたものだった。

おれは往昔のバンデランテ（奥地探検隊）の時代に迷いこんだ思いがした。野は夕ざれてはいたが、空はクリスタルのコップに注いた鉱泉水の透明度で、西に移るにつれて青色から紫のぼかし染めに変わっている。遥かな山並みの上に、落日をつつんだ横雲は、光源を覆ったすり硝子の火屋（ほや）に似て白く明かるみ、背後に朱の光彩をはなって動く気配もない。

たまたまこの空間と時間に出会った旅人が、この壮大で豪華な舞台を見たわけだが、悠久の巨人が四季それぞれ朝と夕べに、己の衣装がえに立ち会ったさかしい両足でたつ動物など、胡麻ほどにも見えなかっただろう。おれはムツッカ行きの目的が、小さく取るに足らぬものに思われてきた。

暗くなるのにいくらも間のない時利であった。おれは馬の手綱をゆるめた。まさか今から前方の荒れ野を渡るわけではないたろうと考えたが、案の条テモーゾは丘の腹をすすむと、別の径をとりやがて収穫のすんだトウモロコシの畑に入った。おれは丸一日の旅のすえ、今やっと人の気配のする場所にやってきた。馬はかるく鼻をな

らすと急ぎ足になった。ここに人が住んでいるのかと疑うほどに、壁は崩れおち、垂木は地面について、内くぼみの屋根はいびつに傾いた、すさまじくも荒れた屋敷に、テモーゾは案内しったふうにはいると、一声たかく鼻をならした。戸があいて顔をだしたのは、背の高い偉丈夫で、混血による容貌とはちがった。この州の田舎ではあまり見かけない白人であった。

初対面の挨拶をすますと、今夜は厄介になりたい旨を伝えた。サントからの伝言もあったので、まんざら通りすがりの旅の者ではないと自負はしていたのに、老ゼルバーノはおれをとくに喜んで迎えるふうもなかった。

「マルコ」

と老人は歳に似合わないあまい声をだした。呼び方から推すと孫のように思えた。一見して十五歳ぐらいのムラト（白人と黒人の混血児）の少年が姿をみせた。体つきはほそくて痩せている、牛追いのなめし皮の服を着ていたが、こんな僻地では珍しいほどの美少年だった。

「こんにちは、ようお出やした」

と言ったように聞いたが、かなりの訛りがあって、ためらいがちな声はかすれていた。ゼルバーノは彼に、馬の鞍をはずして水と餌を与えるように言いつけた。おればこの家の少年をわずらわすほどの客人ではない。鞍の前立ての小袋を外そうと手を出すと、偶然だったが少年の手におれの手が重なった。ひどく柔らかな感触であっ

たのには驚いた。マルコはひどくはにかんで顔を赤らめた。彼とは出会いからすぐに妙な具合になり、おれもなんとなく変な気持ちになった。

「主人の言いつけだで、おらがします」

と言われてみれば、客としてそのまま任すより仕方がない。

通されたところは、まだ崩れていない家の一部らしく、大きな食卓に椅子があるだけの広間だった。

「首（かしら）は達者かな」

ここの主はサントのことを首と呼んだ。前からのしきたりに従ったのだろうか。

「お変わりないようでした」

サントと自分はまだ知り合って日の浅いこと、昨年の出会いから、彼の仕事を引き受けた事情など話した。

「そうか、首は誰にでも任さんはずだ。君は二世か、まぁ信用されたわけだ。娘がいるとは聞いていたが、そこへゆくのか。首の人徳というわけだな、おれたちの仲間で床の上で死ねれば極楽じゃ。たいていの者は旅で死んだ。その場で埋められて木の十字架はたっても、あとは雨や風にさらされるばかり、そして誰からも忘れられるんじゃ、牛の暴走にまきこまれて、土と血でこねた肉団子のようになったアリンド、牡牛の角にかけられ三米も放り上げられ、腸を垂れ流して死んだジョゼ、酒の上で

口諭し決闘して二人とも死んだ奴らもいる、破傷風でひきつりもがいても手当の法もない、無法者ぞろいが肩ひじをはり、思いのままのことをしておったが、みんな消えていきよったわい」
「サントはあんたを先生と言っていたが、なにか訳がありますか」
「なあに、小牧場主のせがれというだけのことだ、それがグレてのう、獣医にはなりそこなう、農場は食いつぶすわで、乞食同然に落魄していたのを首に拾われたのだ、仲間の銭勘定をやったり、荒くれ男たちに牛馬なみの治療をやったので、こけ代わりにつけられたのだ」
「あなたはなにか思想上のことで、勉学をよしたのですか」
「いや、なんの、シガナ（ジプシー女）に迷ってのう、一口にいえば酒と女だ。この年になっても持って生まれた癖は直らん、妄想という奴はなかなか捨てられんて」
　彼の言う過去のことはともかく、この年になってもの云々は、おれには理解できなかった。
「ゼルバーノ、あんたの説を聞くと、どうもペシミスモですが、そこを抜け出してもう一段高い人生の意義を探求することはできませんか」
　と主人の心境をさぐってみた。
「そこじゃが、そう言ってはならんが、首は無学だ。けれども人間はできとる、おれなどはいくらかの本は読ん

ではきたが、足下にもおよばんわい。サントはあれほど丹精して育てた漁場でも、機をみて未練なく捨てて、娘の世話になるという。おれにはそれができんのだ。ここで芽をだしたジャトバ（まめ科の喬木）のようにどこへも動けんわい」

そこになにか事情があると感じたが、一夜の旅の者がそこまで訊くことはないと思った。

マルコが食事を運んできた。山羊の焼肉と木芋の煮たものに火酒がついている。少年は炊事もするらしい、客としておれを饗してくれたあと、主人の世話にかかるのを眺めるとふと妖（あやめ）くものがあった。ゼルバーノは酒につよい、勧められて二杯はうけたが、とても相伴はできないので勘弁してもらった。夜もかなり更けたので寝室に案内をたのんだ。

石油ランプを消すと酔っていたのですぐに眠った。おれは生来眠りが浅い、ジイアス農場で野火に囲まれるまで知らずにいたが、あれは風邪の熱にうかされていて仕方がなかった。常ならばあの事件は起こりようもないはずであった。一刻もたったであろうか、目がさめると、隣室で人の起きている様子が壁を通してうかがえる、老人と少年は一室で寝起きしているのだろうか。荒い息づかいの気配があった。闇につつまれた廃屋のなかで、おれはある想像をしていたが、昼間の疲労が襲ってきていつの間にか眠ってしまった。

翌日、ゼルバーノの農地からムツッカに向かった。おれの目ざす村には思ったよりも早く着いた。ほんの二十軒ばかりの集落で、白く漆喰で塗ったお堂のある丘の下、道をはさんで軒の低い人家が並んでいる。付近には樹木一本もない荒れ地で、村にはいると一種独特の臭気が鼻をさした。おれは聞いていたので、雑貨店をかねた居酒屋の前で馬をおりた。

代書人、インスペトール（保安官代理）などここの主がやっているという。清涼水などあるわけはないので、火酒をたのんだ。挨拶がわりなので飲まなくてもよい、この辺りでは一度もみかけたことのないおれを、店主はうさんな奴とばかりにじろりと見た。

「墓のことでちょっと尋ねたい件があってきたんだが、埋葬人の名簿はありますかい」

「そんなもの覗いてなんになる、死んだ者が生き返るわけじゃなし」

ここで親爺にすねられては、なにも聞きたせないと考え、別に委細はないのだが、子連れ女が行きだおれになった。両親はムツッカに埋まっているときいたので来たのだ。七、八年はたっていると思うが、名前だけでも分かると助かるんだと、一枚の札をにぎらした。

無精らしく腰を上げた主は奥にきえたが、一冊の台帳を持ってくると、表紙の埃をはらいページをめくった。

女は土人の出で、男は日系というので、ここの親爺も知っていたのだった。

埋葬控えには両人の名はあった。女はテレサ・ジュリバ・ドス・マットス。男はイヨスケ・イヤカバ。正しくはヤマカワ・ヨスケさんだろう。エバとはほんの短い縁でしかなかったが、この両人はおれの義父母といってよい係わりになるだろう。

出生届けはここでも扱うというので、調べてもらったがエバのはなかった。どこか他で届けたのか、彼女自身が身分証を身につけていなかったので、それは始めから無かったのか。

おれはいつの問にか、人相のよくないひげ面の男たちに囲まれていた。その中の一人が墓へ案内してもよいと申しでた。おれはテモーソの手綱をひいて、その男に案内させた。男は道で自分は墓掘り人だと言った。道理で酒手がでるらしいのに誰もが黙っていたのだ。

共同墓地は黄色い砂山にあり、柵はなく建物のようなものもない、板切れを十字にくんで、土饅頭に差してあるばかりの禿げた場所だった。番号板によってエバの母親の墓にぬかずき、次いでヨスケさんの墓にくると、案内人はどなるように大声をたした。

「おい、旅の人よ、お前さんはこの墓に縁のある人かい」

とむかっ腹をぶちまけた様子である。おれはこの墓掘りがなぜにわかに怒りだしのか理解できなかった。

「なにか、あったのかい」
「あの鼻ぬけの野郎、ここ二十日ほど前によう、ここで死によった。おまけに文なしでな、このおらに、ただ仕事をさせよったぜ」
「お前もかい、おれも子連れ女に倒れこまれて、ムツッカと言ったままだった。　それできたんだが何もわからん」
「それじゃ、旦那も災難の組ですかい」
「そうでもないぞ、死者につくすのは大きな善行だ」
　この男の口ぶりで、父の墓前で自殺したのは、エバの兄なのは確かなようだった。帰り道で案内の駄賃としてはすぎるほどの金をやった。男は機嫌をなおして言った。
「考えてみれば旦那、あの男もかわいそうな奴でさあー」
　おれたちが雑貨店に戻ってくると、村民たちが店の前で騒いでいる。墓の件で外来者が一人きたというだけで、この村の退屈な人たちには一つの事件になるようであった。帰るときになって、店の主に礼をのべ、野次馬の連中には、仏の供養に飲んでくれと、幾ばくかの金をおいてきた。

　三日の旅はつつがなくすまして帰ってきた。ゼルバーノの伝言もサントに伝えた。
「あの家で変わったことに気はつかなかったか」

「さあー、これといっては」
「女を見ただろう、またほんの小娘だが」
「むすめ？　少年でしたが」
「作らしているのだ、髪など短くさせてな」
「へぇー、日雇いの少年と思っていましたが、女ですか」
「先生は育ちは良いし教育はある、欲はなく正直な人だが、ただあれが強すぎるというか、あれから離れられない、仲間の後家を世話したのはよいが、娘に手をだすとは、母娘二代で罪なことだ」
客になった夕食の席で、おれが感じた少年の色っぽい所作は、まんざら拠り所のない印象ではなかったことになる。
「おい息子よ、お前はある女に恨まれている相がでとる、女はこわい、気をつけるだぞ」
サントは屈託もなく、大声をたして笑った。
ムツッカ行きははじめから、それほどの期待をかけていたわけではなかった。なかば気やすめのためだったが、やはり予想していた結果になった。エバの両親の姓名は分かったものの、肝心の彼女の出生の手かかりには場所ちがいで、意外だったのは、P町あたりでうろついているとばかり思っていたエバの兄の死を知らされたことである。彼は身よりのない変死者として、共同墓地の片隅に埋葬されていた。
これで山川家の血筋はマウロだけになった。エバの父

はなぜ邦人コロニアから離脱したのか、その間の事情はつまびらかではないが、そのような家族に年月が重なれば、土俗にまみれて家系も消失してしまうものか。

孤独といい、漂泊といい、よそ目には自由で気ままな生活も、ひとつ違えば人しれず野に骨をさらすことになりかねない。エバはおれがついていても、旅に病んで死に、川岸に葬られ一本の杭は残っても、それはおれの記憶の中にしか存在しないものになる。

サントはーわしに任しておけーと言ってくれたが、取りようではー忘れろーとの意味にもなる、彼は過去に幾人の仲間を道べりに、森の中に、荒れ野に葬ってきたことだろう。若い女の死も彼には例外でないのは当然のように思えた。

与助（エバの父）にどんな考えがあったのか、あまりに先走りして未開地に入りすぎている。つまり先物買いをするつもりだったらしい、けれどもそこで仕事をするには、相応の資本に度胸もいるだろうが、彼は山師の手先で動いただけのようであった。

はじめて山川の農地を訪ねた折の印象では、倉庫の造作や赤錆の汽罐の残骸からおして、火酒の密造をやっていた形跡がある。

金主は誰だったのか、エバの話から推して、万作が中にはいっていたのは確かであった。

何かの事情で彼が手を引けば、エバの父は先住民の女

を妻にしているので、広い世間にはでられず、自給の暮らしをよぎなくされた頃、与助は妻を失い、彼も七年後に亡くなっているのは、ムツッカに行って判明した。

万作は投資の関係から、たびたび山川の家に出入りしていたので、孤児になったエバをものにしたのだろう。

実父は誰であろうとも、エバは死にマウロはおれの手に残った。山川の家族の闇の部分はわからないが、与助一家の過去を一番知っているのは万作だろう。披はいま行方不明という、それはおれには好都合で、あの狸おやじとの接触は避けたい考えでいる。

ムツカから帰って、おれはサントにマウロの入籍について相談した。

「籍なしも結構いるがのう、本人を世にだしてやるには、やはり届けんことにはなぁ、それで、考えられるのはエバの私生児じゃが、それにしても母親の身分証はいる。死んだといえば、やはり紙切れだ。どうだー、捨て子にするか」

「捨て子」

「まあ、子供を預けたまま女が帰ってこないという筋書きだ。その子をお前が養子にする」

「そんなことが、通るのか」

「できるてか、現にお前がやっているのと違うのか、証人さえたてればタツー（よろい鼠）でさえ、高い樹のまたで昼寝しよるわい」

そう言うと、サントは大口をあけて笑った。
「それで、エバの名ははいるのか」
「当たり前だ。りつばな母親じゃないか、誰が文句を言えるかい」
「ひとつ頼むよ、爺さん」
「任しとけ、なんとかしてやろう」
おれはこれまでにも、あまり他人に頭を下げたことはない。けれどもこの時ほどサントが頼りになり、大きな人物に見えたことはない。それは彼が生命というものを、どんと据えてかかるからだろう。真といい、善といい命を助けるもの、悪は生命から否まれるもの美でさえ生ける者の感性に応えるもの、このようにもおれは爺の考えを理論にはめて帰納した。

三日の旅から帰ると、サントは明日から仕事にかかろうと言った。初日おれは彼にカヌーの漕ぎ方から教わった。自分もこの河の支流は何回となく上下しているので、小舟のやり方ぐらいと多寡をくくっていた。ところがサントはおれの腰の座りぐわいでは駄目だという、なるほどそう言われてみると、おれの漕ぎ方だと舟は左右にひどく揺れる。爺が替わると身体をふらずに、一本の櫂でたくみに操作すれば、カヌーは揺れずに舳先の水を切るのも目にみえて速い。その日はただ本流を上下しただけで暮れた。

「今日はすこし揚げてみるか」

サントは釣具を用意して舟にのった。おれは漕ぎ手になり川芯にでると、爺は釣針に餌をつけて流れに投げた。

その日は暖かくて風もなく、流れはすこしねばった感じで、重いうねりにさからって舟を漕いだ。サントはーきたぞーとおれに目で知らすと竿を上げる。川下の釣針の沈んだあたりで、ガバッーと飴色の流れが盛りあがると、銀砂の飛沫をとばしておおきなのがはねた。陽光に映えて金色にひかったが、すぐ潜っていった。サントの使っている竿は竹だが、それも太いもので先は切ってあるので、魚の引きによってたわむような代物ではない、便利な巻き取り器のあるのは知っているだろうが、彼の道具の中には見当たらない。それでも釣り糸は竿の先の輪にとおして、端は竿の根元に結んであるのは、かかった獲物は金輪際逃がさない、老漁師の根性とも見えた。

彼は魚のかかった折りから、相手の逃れようとする力に対抗して、舟ばたにかけた脚に力をこめ、左の腰を落として強く弱く調子をとる姿勢になる、右手で握った竿の元を腿のつけ根にあて、先方の緩急に応じながら、左手で糸をたぐり、しだいに身元に引きよせる。

魚が水中で暴れるようすが見えるようだった。魚が跳躍したのか、サントが竿を立てたのか、かなりの奴が水面から飛びだすなり、ドサッーと舟底にころげおちた。

はねると鮮やかな金色に鱗のひかるドラードだった。
「お前やってみろ」
とサントはおれに竿をよこした。見よう見まねで針に餌をつけ、糸を流すとすぐにぐっと手ごたえがきた。爺にかかったと知らすと、手繰れとの合図なので、夢中で糸を引きよせる、折々に師匠の助言があって、何度かは糸を弛ませたことはあったが、しだいに魚を近くに引きよせると、ほんの目の前で大きな奴が跳ねあがった。
おれは思わず大声をあげた。こんなところから釣り人は病みつきになるのだろうか、さて引き上げる段になって、サントは気を使ったつもりか、たもを手渡してくれた。
その後で爺に小言をくった。
「息子よ、どんな大物がかかっても、声など上げるものじゃない。あれは素人が喜ぶ分には別にかまわないが、おれたちは大きな奴を獲って当然なのだ。そうだろうが――、自慢するためや、写真を撮るためじゃねぇ。お前が安くもない権利金をわしに払ったのは、つまり金儲けのためだからのう。漁師なんて仕事はべつに面白いなんてものじゃない」
サントはおれにひとくさり説教を垂れてくれたが、おれの獲物のほうが、彼のより一まわり大きかったので、――こ奴なかなかやりよるわいーとの僻みも交じってではないかと、独りおかしくなったが、神妙にかまえて顔に

はださなかった。
サントの釣具はほんのわずかだ。合成の強い糸が出回っているというが、彼のは麻のような植物のより糸で、細いのから太い紐のようなものまで、輪にして舳先の道具箱に収めてある、蜜蝋を塗ってよく手入れはしてあっても、どれも久しく水をくぐった古物で、ところどころに結び目がある。糸たぐりには便利だが、これは強い奴のかかった折りに切れたあとかもしれない。

その日はピンタード（なまずの類）の穴場に連れていくと言う、おれもいくらか緊張した気分になる。爺は今日は予感がするという、これはたいてい当たるもので、大切なものらしい、おれには理解できない。サントの長年の経験からのものなので、そんなものかと考えてみた。またこの穴場は大事な秘密で、他人に知られてはならないと、折りにふれては聞かされていた。その場所はしぜんと魚のよる処だが、人が餌などをまいて育成するものだとも教えてくれた。
サントは良い釣り日和だと言った。このところ暑すぎるほどの日が続いている。対岸の森の暗い翳を背にして、芽吹きにさきだってイッペー（ブラジル産、紫蔵科の樹）の馥郁とした鮮黄の花が綻びていた。
おれたちは朝のコーヒーにフバ（とうもろこしの粉）の妙ったので、腹ごしらえをすると、二隻のカヌーの中

の重いほうをだした。これは底が広く安定はよいが船足は遅い、遡行するのに二人で漕いだ。やがておれたちが汗ばむころ、カヌーは本、支流の合流点にきた。そこは前に筏で下ったとき、川波の盛りあがりを恐れて避けた場所だった。どこまで漕ぎあがるのか、これはサントの胸の内にあることなので、おれは黙って櫂を動かしつづけた。やつと舟の揺れがおさまると、爺はおれに止めろと合図しておいて、自分の櫂だけで操作すると、今まで左側に見えていた森はぐっと眼前に迫ると、そのまま右に回っていく。カヌーは流れにのると急に舟足をはやめた。舟に乗りこんでから今日の爺は、一言もおれに話してこないで、指図はすべて手ぶりたけだ。サントの打ちこみが伝わってくるようで、おれも余分の口はさかずに命令に従った。

本流にのった下り舟はかなりの速さで、支流との合流点にかかった。双方の流れ噛み合い、沸きあがる渦巻きに、カヌーがはいると、波は舳先を打って飛沫をちらしおれたちを濡らした。舟は高波にのせられて、前方の赤土の崖に向かって突き進む。一刻一刻と崖はこちらに圧しかかってくるが、とくに恐ろしくもないのは、爺の予定の行動と考えたからだ。案の定、彼はすっくと触先に立つと、身体を斜めにかまえ櫂を前に突きだして土の壁をぐいと押した。カヌーは崖すれすれに回ると、渦の流れにのって対岸の樹の茂みの中に入っていった。そこは

川淀とでもいうのか、沼につながる入り江になっていた。

「見たか、ここが釣り場だ」

はじめてサントは笑顔になり、口をきいてきた

「おれの水揚げを聞いて、この辺りを探る奴もいるらしいが、ここへはどんなにしても入れんて」

ここでは不漁という日は一度もないが、この入り江を見つけたのは偶然のことだったという。始めの頃はなん回も舟を覆して命がけだったとも話した。

あの荒い流れをこえて、この静かな入り江が眠っているとは嘘のようだが、水の動きも緩慢なのか、水草の群生もおおい、岸の立ち木にカヌーをつなぐと、爺はきっそく仕事の準備にかかる。

道具箱から取りだしたのは、十五糎はあるにぶい鋼色をした釣針で、掌にあまるほどの餌を針にさすと、釣り糸の輪を岸にうつし自身も舟から上がった。つぎに糸の端を木の根元にゆわえた。サントはしはらく水面をにらんでいたが、錘をふり調子をつけて前方になげた。糸は宙をとぶと遠くで音をたて波紋をひろげた。釣り糸といっても細引きほどのものを、爺は手にして様子を探っているようだった。その間、虚無の状態の何分かがすぎると、糸は水滴をはねてピーンと張った。サントは足を水苔のはった土にふまえ、懸命に糸をたぐりよせるが、

すぐ後で力をぬくと、釣り糸はするすると伸びきり、立ち木がしわるほどに引く。

おれの師匠はこれまでにも、説明したり教えてくれたことは稀にしかない。よく見て習えということだろうが、永年の修練ののち身についたこつは、教えられる性のものではないのかもしれない、糸を引くかとみれば、無駄のようだが糸をゆるめる、けれどもその間に獲物は確実に引き寄せられている。

本流で揚げたドラードのような派手な動きはないが、よどんだ沼の底では、どれほどにも魚が抗っているらしいのは、サントの身構えからでも推定される。この度はおれも緊張して、爺の一挙一動に眼をつけていると、釣り糸を握っている彼の指に気がついた。今までに半月ちかくも一つ屋根の下に暮らしていながら、どうして意識しなかったのか、いま眼の前にある彼の指は、漁師としての彼そのものである。蟹の鋏のような指は糸をはさみ、右手で引く糸を、左手で後ろに投げていく。引かれる糸は疎らな水草をからませて、しだいに近くにくる。

まだ水中の獲物は見えないが、沸きあがる気泡と泥水のよどみで、魚はもう岸のきわにきている気配だった。釣り糸と鋼線の結び目が水面からでるとみる間に、爺は身体を後にそらすと、糸を強くしゃくった。瞬間のことだった。水面がグワッーと盛り上がると、怪物が上がってきた。一米半はあるピンタード（斑点のある意味、こ

こでは鯰の種類。タイガー・キャットフィッシュ）で、鱗のないぬめった暗灰色の皮膚には、地肌よりも濃いまるい斑点がちっている。腹にさがると肌は白くなり、ぶちはより鮮やかになる。頭は叩かれたように平らで、突きだした面には二つの小さな目、ならんだ二つの鼻孔、長い髭、横にはった歯のない大きな口、鯰の類で滑稽な面相だが、肉は無類で塩蔵にしても飛び切りだという。尾鰭で地面をたたき、髭をくねらしていたが、力つきたのか動かなくなった。

「お前、ここでもう一本あげろ。わしは奥にはいって、もうすこし仕事をしてくる」

と言うと、餌を投げてよこした。爺は決してこれはこうだと説明はしない。その癖おれがへまをやると、嬉しそうに笑った。おれも癪だから彼の遣り方をしっかりと、観察して覚える術を知った。

おれは自分の性質からおして、今日は運がよいと気負ってかかるような職は向かない。一年の働きが収穫となって報われる百姓が好きだ。この度も事情がゆるせば、小屋の裏にある土地で豚でも飼おうかとも考えている。渦巻く河にカヌーをだし、危ない崖の下をくぐってやる仕事は避けたかった。けれどもサントへの一時払いや、マウロの養育費など計算すると、好き勝手なことは言ってはおれない、それに子連れの男が行く所もなくて、頼んだ以上好き嫌いは許されないことだった。

サントがおれを突き放すようなやり方は、早く一人前になれという、一つの命令だと思ってよい。過去におれに向かってーこうしろーと言ってくれた者は誰もいなかった。場合によっては指針を与えられたほうが、はげみになることがあるだろう。

おれはサントの方法をまねて、釣針に餌をつけ、錘に調子をつけて投げると、かなり遠くで飛沫があがる。空を飛んだ糸はしばらく水草をたよりに浮いていたが、鐘が水底に沈むにつれて、微妙な感覚が手に伝わってくる。

サントの伝ですこし引いてみたが、手ごたえはない。うっかりして忘れるところであったが、釣り糸は立ち木にゆわえた。おれは引きを待ったが、一向に反応らしいものはこない、五分ぐらいか、あるいはもっと経ったかもしれないが、すこしずつ糸を手繰ると、何かに掛っているような手ごたえがある。

引けばよってくるが、かなりの体力がいる。けれどもサントのとは様子はちがった。先方ではかなり抵抗している感じであるが、引けば引かれてくる。ところがある処までくると、どうしても引けなくなった。手を弛めるとすこしは戻っても、それより逃げる気配はない。その時になって、おれは魚でなく水草の玉か、木の枝ではないかと考えた。何はともあれ引き上げなくてはと、場所をかえて斜めから試みた。とにかく力が要る、足が水苔

をふんでめり込むほどに引いた。やがて水中から出てきたのは、太い樹の枝でそのうえ水藻が重くからみついていた。おれは精魂もつきて水際に腰をすえ放心の態でいた。

どれほどの時がすぎたのか、沼の奥からサギが一羽飛んできて、対岸の水ぎわに止まった。

静寂のなかでかすかに櫂の水を打つ音がする。休む間もなくサギはまた飛びたった。羽根をゆっくりはばたき、白い薄織りの布が風に流されるように、茂った樹々のさきに消えていった。

サントはカヌーを滑らしてきた。

「揚げたか」

と尋ねたが、彼は目ざとくもおれの獲物はすでに知っていた。おれは渋い顔で返事もしないでいると、サントは上機嫌で笑った。

「たまには沼の掃除も悪くはないて」

爺の機嫌のよいのもそのはずで、ここで釣ったのより大きいのを二尾あげていた。

「息子よ、もう一度餌を投げてみい」

「今日は止めた」

「どうしてだ」

「今日はついてないようだ」

「そうか、お前も漁師の心意気ちゅうものが分かってきたか」

下りはなんの造作もなかった。沼をでてただ流れに乗るだけで本流にでた。カヌーはかなり沈んでいるのに、みる間にサントの住まいについた。

住まいの裏にある作業場での仕事は、その日がはじめてであった。分厚い板をつかった頑丈な調理台、左右に立てた太い柱に支えられた横木、吊ってある幾本もの鉄の鈎、大鍋に小鍋、この仕事場は住まいの整頓ぶりに比べて、なんとはなしにある投げやりがみられた。三尾が台に投げられると、爺は手斧を打ちおろして魚の頭をはなす。噴きだすほどの血でなくとも、どろりとした血糊が台を染める。サントは馴れた手つきで、大包丁を使って腹から尾のさきまで裂く、渋茶色の内臓に青い臓器がからんで受け鍋におちる。つぎに魚をひっくりかえすと、鱗のないぬめる皮に刃をあてスウッーとひくと、暗灰色の皮は外にめくれて、白い肉が内から盛りあがる。

爺の手さばきで獲物は台の上で二つに割られる。それをまた幾片かに切りわけると、荒塩を手づかみにしてふり、肉片を塩の上でころがしまた塩をふる。その作業がすむと、大桶の中に丁寧に重ねる。

「息子よ、あとはお前がやれ、見たようにやれ、指を切るなよ」

今日のサントは機嫌がよいのか、細かいことまで気を使ってくれる。

けれども、おれの胸の内は複雑だった。はじめから魚

を獲り、商品にして売るのは知っていたが、釣った奴を解体し干物にする過程までは考えていなかった。いまさら生臭い血をみる仕事は嫌という境遇でもない、サントを頼って世話になり、差し当たって行くところもないおれたちを拾ってくれている。恩人の与えるものを拒む理由はとこにもない。

爺のやるとおりに、肉片はせんぶ大樽につめて重しをかけた。一晩おいて汁をぬき、翌日針金につって干すと、一日で青みのある塩のふいた干物になる。

漁にでない日は暇である、譲られた地域はどれはどのものか、一応は知っておく必要もあるので、銃をたずさえて裏の畑にはいった。

サントは鍬の柄をにぎるのは性に合わないのか、彼の耕作しているのはわずかで、残りの土地はいつ手入れしたものやら、しぜんと、勢いのある草木が背たかく茂っている。三方を原始林の高い樹々に囲まれているので、かなり広いこの焼き畑も、井戸の底のように感じられる。草の根をふみわけて奥にはいると森の中で鳥とも獣ともしれない鳴き声があがる。まったく人の世から隔絶された訳ではないが、奥深いマット（森）の蔵する神秘が、なんとなくある恐怖感となって迫ってくる。

乱れた茂みの先で、何物かがこちらに来る気配がある。まさか人間に危害をくわえる野獣でもあるまいが、おれは切り株を盾にして、それに銃をのせ引き金に指を

かけた。連発するはずであるが、向かってこなければ撃つつもりはない。襲ってさてもできるかぎり引きつけておいて、至近弾で倒す必要がある。そのような緊張の経過ののち、乱れた高い丈の草からヌウッーと、面をだしたのはテモーゾであった。馬の奴ひとの気も知らないでフウーと鼻をならして寄ってきた。

その日、おれは畑を二回りしてきたが、漁の暇に百姓でもするとなると、S泊まりへの所用もふえる、マウロもいることだし、カヌーの艫につける発動機はほしいものの一つになった。サントとの約束の期限はもう終わりにちかい。一通りの仕事は習って、その間の事情が分かってくると、川漁師は商人に安く買われていることだった。その反対に買う品はひどく高い。つまりこの大河を上下している連中は、買っては儲け売っては儲けているわけであった。

おれがそのことをサントに話すと、

「お前やってみ、人助けになるぜ」

と賛成はしてくれたが、具体的なことになると、そこが爺の人柄だが苦手のようであった。おれも自問してみて、自分もその柄ではないと考えた。

約束の日は近づいていた。サントに支払う金のことで、一度はどうしてもP町まで下らなければならない。爺が娘の家にいってしまうと。おれは当分のあいだ旅な

どは望めなくなる。ついでに五日はど暇をもらって、両親の墓参と小林を訪ねてみたいと考えた。
「おお、行ってこい。その間ここは留守居してやろう」
と心よく許してくれたが、口で言うほど爺はおれに疑惑はもたなかったのか、ここは人心の微妙なところだが、
「爺さん。ほしい品があれば買ってくる」
おれの言えるのはこの言葉しかない。サントの長い人生で彼がこいつと見こんだ男で、信頼に価した者は多くあったに違いなかろうが、その反面、彼の見そこねた男もあったであろう。えてして裏切り者などは甘言を弄するものだから、土産物の話などはかえって、人を疑わす種になりかねない。
「そうじゃのぅ、この間、船で持ってきよったが、電池でしゃべるラジオがあっただろう。目玉の飛びでるほどの値を言いよったが、大きな都会ではそれほどでもなかろうて、あれ、を一つ頼む」
「あれはトランジスタというんだ。電気のほうが安いよ」
「いや、婿の処には電気はきとらん。初物食いのようだが、新式のラジオぐらい持つとらんと馬鹿にしよるでのう」
おれは爺の気概ぶりに、つい笑いだすと、サントも何を感じたのか、さもおかしそうに笑いつづけた。

その翌日、おれは集荷にきた発動機船に便乗してＳ泊まりに下った。一ヵ月ぶりにマウロに会った。子供は元気らしく育っており、イネスは相変わらずの人柄だったので安心した。イネスに客があると知ってジョンという男がはいってきた。同じ敷地の奥に住んでいる、イネスの実弟だという、これという定職はなくて、あちらこちらの日雇いに出ているときいた。Ｓ泊まりからは遅い船便はないので、旅宿にもどる時刻になった。女主人が一応引き止めてくれるのは分かるが、ジョンまでが口をだすのには我慢ならない。

おれはその男を嫌な奴だと思った。まだ当分はかまわないだろうが、マウロが物心つく年頃になれば、ジョンの子供たちの感化をうけるだろうから、なんらかの処置は要ると、宿へゆく道で考えた。イネスが漁場にきてくれるとよいのだが、それも子供の学齢期までで、これから先にも難しい事態が予想されるのであった。

あくる朝、Ｐ町行きの便船にのり、昼すぎに着いた。その町はこの大河の中ほどに位置する河港の一つで、南部から延長された鉄道の終点でもある。電話局から小林に連絡した。

今夜九時すぎにそちらに着く旨を知らすと、言葉も乱れるほどに喜んでくれた。三年間も会っていないのだから、おれもつい言糞がつまって話を切った。

遅い朝食をゆっくりとすましても、大事な用件は帰りになるので、午後六時発の列車には持てあますほどの時間がある。中心街から足のむくままに河の方向にでると渡船場にきた。八百米はあるという河幅の対岸から、いま船が着いたところで、貨物二台に乗用車数台と十人ばかりの人がみえる。渡船が木で組んだ渡しに接すると、船員はすばやく岸に飛びうつり、太い縄の輪を杭になげる。すると船首の揚げ板が前方にのびて岸への板敷きになる。船長室からカランカランと鐘がなると、人に車は一せいに動きだした。海から何百粁もはなれた奥地の一河港でも、操舵室の屋根に国旗のはためいているところは、海事法によって運営されているらしい。

そこからすこし下流に「万作」の店があったので寄ってみると、店の戸は下ろしたままになっていた。好奇心はあったが隣の店に尋ねるほどの事もないので引き返してきた。

もう市制は布いたという町でも、旅の途中によった者には、時間をまざらわす術は全くない、閑散な大通りには食料雑貨店、コーヒー店を兼ねたパン屋、靴屋、既成服店、黄色い看板をあげた反物店、文房具などおいた本屋にはいると、暇を持てあましていた店員がよってきた。「釣り人必携」のような本はあるかと聞くと、そんな本は見たこともないと答え、そのかわり釣り道具の店を教えてくれた。

足はその方向に向いたが、買い物は帰りになるので、通りを折れて駅にむかった。構内は思い切り広くとってあっても、荒れた幾棟かの倉庫、幾本もの引き込み線、枕木もかくれるほどの雑草の茂りなど、早くも見込みはずれの荒廃が充ちている。その奥にも広場はつづいて、巨大な原木が山と積まれて、そのまま腐るのに任せてある。

構内のいたる所に野犬がいる。捨て犬や自然繁殖した奴らの巣窟になっているらしい。面の険悪なのが材木の陰で、青い眼を光らしているので引き返してきた。駅をでて街角にくると、倉庫のひさしの下に乞食女がいる。別に気にもかけずに行きすぎると、

「ちょいと、兄んちゃん」

と呼びとめられた。気をつけてみると、まだ若いといってよい荒んだ女が腰をすえ、スカートの裾でかくしてはいても立て膝でいる。襟の白レースは垢でよごれ、もと赤色系の服は褪せて褐色にみえる、一目でシガーナ（ジプシー）女とわかった。その傍らにころがしてある袋からは、まだ生後いくらもたたない幼児の頭がのぞいている。行き過ぎるつもりが子連れなのに引っかかった。

「あー、兄んちゃんじゃない、落ちぶれなさった旦那」

おれは女の言葉の終わりのほうに驚いた。

「旦那、あんたの行く先を占わせませんか」

と誘った。おれは過去にも、こんな連中に関わりあったことはない、けれどもその時はなんとなく胸にこたえるものがあった。

列車の発車にはまだ退屈しすぎるほどに時間はある。ひとつおれの運命とやらを、観させるかと気持ちは浮いたが、すぐになにを馬鹿なという考えにかえった。このような女は先験的なある感覚を持っているらしい、こういう事は避けろとか、こういう事には気をつけろとか、たいていの人に当てはまる事は言うかも知れないが、人間の生き方については決して言わないだろう。おれがちょっと立ち止まったので、女は客がついたとおもったのか、座りなおす姿勢になった。

「いま暇はない、だが、すこし援助してあげる、受けとってくれるかい」

「上げるとおっしゃるなら、戴きますよ、助かりますからね」

女はにたっと笑ったようだったが、表情はすぐさえた。おれは隠しから一枚ぬいて、占い女に手渡してやった。

「旦那、お帰りにはどうぞ、お代はもう貰ってありますからね」

おれはなぜあの乞食女に、十日は宿ぐらしのできるはどの金を与えたのだろうか、やつれた面影が死んだエバに似ていたからか、それとも零落という名はついても、

旦那と呼ばれたことが嬉しかったのか、おれは恥ずかしくなり急いで駅に向かった。

発車までには一時間もあるが、駅の待合室の木のベンチに座っていると、ぼちぼちと人がはいってくる。たいていは百姓風だが、横にきて腰かけた老夫婦は、この町にいる娘に卵にケージョ（チーズ）など持ってきたと言った。―お前は日本人か、この度はまずかったなー、心配ない、すぐに元になる。戦争は悪いのにきまっとる。国に精力がたまりすぎて、主役になりたがるが、脇役のはうが楽だーとこのイタリヤ系の老人は話ずきらしくて時間つぶしには悪くない。

駅の建物をゆるがして、客車が蹴りこまれてきた。制動がきいて鉄のきしむ響き、鎖のからみ合う音、構内用の小型機関車は役目をすますと出ていった。何時の間にか切符売場の窓はあいていた。おれは並みの往復を求めた。乗客はまだらで二人分とって、寝そべるほどにも席は余っている。P町にきて買った安時計は、正確に時を刻んではいるが、なかなか発車する気配はない、旅の疲れかすこし頭がぼんやりして眠くなりかけた折り、どんと衝撃がきた。すると駅の構造物と支柱とその奥にある窓との位置がわずかづつずれ始める。すると支柱そのものが窓からしだいに移りうごいていく。

何本もの切り替え線をわたり、列車は構内を脱すると速力を上げはじめた。車両も古物だが、保線もなってい

ないのか、横揺れもひどいが、縦にもはね上がり、連結部に渡してある鉄板が騒ぎたてる。待合室で知りあった老夫婦がこちらにやってきた。―わしらは次の駅で降りるが、〇〇区にいるファルソニーという者だ。是非訪ねてこい―と言うのが、騒音の中でやっと聞きとれた。

列車が徐行しはじめると、おれの手を握って、―きっと訪ねてこいよーと念をおして降りていった。長くのびた屋根のないホームに、息子らしいのが軽二輪馬車をつけている。

旅で知りあった縁ぐらいで、その人たちの境遇などうかがい知れるわけではないが、もしおれの両親が生きておれば、あの老夫婦の年齢だと思われると、気持ちは離れずに後をひいた。

イタリヤ老移民と別れた刻から、日は広野の果てに沈みかかる。かなりの町やほんの寒駅のいくつかを過ぎて、列車がＡ市の郊外にかかると、灯火の数と広がりから、いままで通過してきたどの都会よりも大きい。乗客がざわめきだしたのは、この駅で乗り換えるからである。

駅をでると、タクシーに呼びとめられたが、車を拾うほどのことはない、一区画すぎれば中心街なのは熟知している。小林がそこの給油所の横で、コーヒー店をやっているのは手紙で知らされていた。場所はすぐに見つけ

た。オーロ・ベルデ（緑金亭）の蛍光灯は青く輝いていて、三年の荒野ぐらしの眼にはいたく染みる。客の立てこむ時間はすぎていて閑散であったが、店は品よく客すじも悪くないようだ。

Ｓ泊まりで念入りに整髪はさせてきたが、頬髭はのこしておいた。顔がこけているので剃らずにおいたが、ひとつは小林を驚かしてやろうとの下心もあった。けれども夜行の客車の窓に写る自分の顔は、陽にやけて黒くなんともむさ苦しかった。彼と別れた頃の肥えた白い丸顔はどこにいったのか、痩せてくぼんだ頬、とんがった顎はのこした髭でも隠しょうもない、そのうえどうも目付きが鋭くなった。これは釣り糸の動きから目を離さない気配りや、山奥での三年の暮らしが顔に出てきたのだろうか。

おれは客になって店にはいり、小卓につくとすぐ給仕がきた。冷やした麦酒に燻製の腸詰め一皿をたのんだ。旅でかわいた喉に、冷えたほろ苦い液体がとおると、ほっとした解放感がわいてくる。このような気分は何といっても都会のものだ。いまは過去のものになった追憶が、ぽっとくる酔いにまざれこんできた。

小林はカウンターから、時おり大通りに目をやっている様子にみえる。彼はとっくにおれを見ているはずなのにまだ気づかないでいる。Ｐ町発の列車はもうＡ市に着いているのは知っていて、おれの到着に気を使っている

ように見えた。
瓶一本をあけると、若者をよんで勘定をすますと、
「パトロンにジンザイがきたと伝えてくれ」
と頼んだ。給仕が台にいって耳うちをすると、小林は飛びあがったようである。彼は店の奥まできたが、客は婦人連れの禿げ頭。他に三人の青年だけなので、おれの卓にやってきて。
「給仕に言われたのは・・・・」
と話しかけたが、言葉はなかばでつまった。
「継志さん」
と彼は喉の奥で叫んだようであった。
「やっと出てこられたよ、達者でなによりだ」
小林は身も心も浮いているようで、先にたって階段を上がると、おれを客間に招じてくれて、婆さんをよんた。
清さんはおれの訪問は前もって知っていながら、感情の整理がつかすに泣きだした。
「清さん。立派な店が持てて結構だ」
小林がつまらぬ店で、やっと食うだけのようなら、おれは辛い思いがしただろうが、これほどの店なら大したものだと、心から嬉しくなった。
「継志さん。逆さごとですよ」
「なあに——、清さん、おれもやるつもりでいるんだ。こんと〇〇河に出てきたから、漁業会社でも興すつもりでい

るんだ」
「そうでございますか。坊ちゃんなら社長さんぐらいにはなれるお人柄ですもんね」
おれは清さん相手では、このぐらいの法螺をふいたほうが、相手も気楽だろうと考えた。
小林のーなにか用意したらーの言葉に清さんは台所にきえた。彼と二人になったので、立派な店が手にはいったのを祝うと、小林はつぎのような経緯を話した。
彼は三十年から、この店の前の主人ミーゲルとは友人であったこと、ミーゲルには息子一人に娘二人あるが、彼は息子に婿たちはてんで信用しておらず、寄る年波にこの仕事がしだいに辛くなっていた折りから、小林が神西農場を辞めたのを知り、話を持ってきたという。小林は退職金にいくらかの貯金はあったものの、とても大通りのコーヒー店など引きうける資本はないと断ると、ミーゲルは前金は有るだけ貰い、残りは月々の利益で払えばよい契約にした．はじめはそんな利益があるかと心配したが、幸いに店ははやって、ここ二年ほどで負債はきれいにしたという。
「継志さん。わしも末の子が学業を卒えるまではやりますよ」
そこへ長男のリカルドが帰宅した。まだこの市の大学の医学部の学生だが、会っても誰だか分からなかった。もちろん先方はなおさらなので、

「継志さんだよ」
と小林が紹介してくれた。
「どうですか、久しぶりで」
と一応の社交としての挨拶はしたものの、彼は父の旧主人への敬愛としての表情は顔にはださなかった。世代も違うし社会上の地位も変わっているので、互いにこれでよいのだ。
おれは決して親の恩を売りに訪ねてきている訳ではない、小林の人柄に引かれているのと、もうひとつは謝罪の気持ちからであるが、何となく辛い気持ちになり、サントとの仲のようにはいかない。

夜もふけて、清さんには引きとってもらったが、小林とは夜中の一時すぎまで、つもる話題はつきない、話はしぜんとアンナのうえに移った。アンナの父作造の死は初めて知らされた。小林によると作造は食えない男で、あの事件はなくても夫婦の離婚は目論んでいたようで、蟷螂の残忍と滑稽さが身上で一生を終わったといった。アンナは神西農場を集団住宅地に変えたが、会社は金森一家に食い荒らされて破産状態という。
小林がおれの貰い分にふれたので、もう一年ほどはP町の銀行には送られていないと言うと、彼はひどくアンナ側を非難した。しかし、おれば小林に同調する心境にはなれなかった。送金はどうでもよかったし、事件は過

去のものになった。いまだにそれにこだわるのは利口ではないと考察した。

今日の墓参には是非お伴したいという小林には断って、おれは独りにしてもらった。共同基地の付近は三年の月日にも変化はない。門をくぐるとすぐ目につくのは、地に這う龍が女人を襲わんとする彫刻をすえた墓碑で、A市当初からの、米、コーヒー精選工場の持ち主の日本人某家のものであるが、手入れの荒廃が気にかかった。遺族はもうこの市に住んでいないのだろうか。

おれは父母の墓前に立った。折々は小林が詣ってくれているのだろう。墓碑はすこしも荒れてはいない、壷の水をかえ白菊を供えて瞑目した。心をしずめて過ぎた日々の両親の慈愛をしのんだ。といってもおれは女々しい感傷は好まない。父母の霊に語りかけるとか彼らの霊がおれを見守ってくれているなどの信仰はない。墓参は一つの習慣と、故人たちへの思い出には適った所だからだ。何時どんな事になるか計り知れない身の上では、たとえ荒れ果てたとしても、父母の墓が目立たないひっそりとしたものなので、おれは心休まる思いがした。

翌日、サントへの土産物を買い、引きとめてくれる小林夫妻に再会を約して別れた。P町に着くと、そこで用件のすべてを済ましてS泊まり行きの便船にのった。

何日と家をあける長い旅などは、思いのままにならない僻地で、三年はまたたく間に過ぎたが、この度は父母

の墓に詣で、小林にも会ってきたので、気がかりになっていた一件は一応果たし、やっと気持ちに落ち着きができた。

旅から戻ると、サントはかねての約束どおりに、Ｐ町の娘の許へ立っていった。

洪水

ジイアス農場に入ったのも、この河岸に住むようになったのも、その時その折りの口すごし世すぎであったが、偶然の出会いから、宿縁めいた具合に話がきまり、漁場を引き受け仕事の指導をうけた漁夫ではあったが、ただそれだけの関わりでなかったのは、彼の出発の後、何でもないような彼の行為、言葉などが日がたつにつれて、生きて深い意味を持っているのに気がついた。

多分にサントの半生には他人には窺えないところがある。彼自身もやくざな商売をやってきたと言っていた。牛の大群を移動させる話はよくしたが、ただそれだけではない陰に含みがよめた。おれはとくに爺の過去を詮索するよりも、その人柄に興味をもった。老漁夫がひとり河ぐらしをしながら、身につけた生活の知恵は、誰からも教わった訳でもなかろうに、実に理にかなっている方法は、彼の置き土産の一つだった。

サントと別れて以来、彼への追憶は日を追って深くなった。父の不慮の死に会い、わかくして農場の経営を任された折り、何日もの時間が自分の記憶をすりぬけているのを知った時のような経験をした。

「のうー、息子よ、河漁師は一人前だと威張ってみても、この流れに浮いた水草のようなものだ。おまえ、河岸の匂いが分かるか、青臭いようで甘い泥のにおいは、お袋さまの乳のものだぜ、慈しみの顔は一日として同じではない、聖母さまのおかんばせ、躾をするきびしいときの母の顔、また情人の思わせぶりな眼差し、折りにはヒステリーを病んでのう・子供もなにも放り出すこともあるのじゃ。べつに子供が邪魔になったとか、憎いのじゃない、これは女の持病のようなもんじゃろう」

おれはこの枯れ木にも似た漁夫が、河を母親に見立て、自分を幼児にしての譬えを面白くきいた。

「爺さん、そのヒステリーとは何のことだ」

「知らんか、洪水のことよ、おらは二度ばかり見たが、おふくろ様の物狂いだ。かなり暴れるが心配はない、子供まで食いはしない」

サントの言うには、出水が始まれば一ケ月ぐらいは仕事にならないという。その間、他の仕事はできるが、それもおふくろの病状しだいともと話した。

おおらかで豊満、包容力のあるこの大河は、かなりの降雨量ぐらいでは、流水は濁ってさても、水位に目立つ

ほどの変化はないのに、出水とか氾濫とはどんなものか、その時はただ爺の言葉を読んで想像するより術はなかったが、後日、おれはその洪水に会い自分の運命にまで係わってくるとは、思いもかけぬことであった。

サントは去り、また前のような一人暮らしに戻った。旅の帰途P町の銀行によって、サントに支払う権利金を引き出したついでに、注文しておいたカヌーのともに付ける推進機が便船で届いた。

これでS泊まりまで楽に、日帰りができるようになった。集荷船は決めた日にはくる。今のところはサントの指示どおりにやっていて、水揚げはおれ一人では手にあまる。ようやく生活のめどもついて、単調ながら平穏な日々が過ぎていった。

ところが、ムツッカ村へエバの戸籍しらべに行った折り、サントの紹介で一夜の宿の世話になったゼルバーノの農場で、主人からマルコと呼ばれていた少年（実は女であることを後日サントから知らされた）が突然に訪ねてきた。主人の留守をぬすんで、径もない原野を徒歩で逃げてきたという。

半年前、まさかこの家僕のような少年が、家出の下心をもっているとは知らなかったので、訊かれるままに、若い心の他郷への憧れぐらいに思って、南方にかすんで見える遥かな丘を指さし、その先の川のない盆地、一望

すすき野の台地、ここからは見えない送電鉄塔まで行くと、足もとに広がる湿原と大河、その河岸の鬱林のなかに、ぽっかりと空いた焼き畑と、豆粒ほどのサントの小屋が見えるはずだと教えた。

おれが乗ってきたテモーゾの鞍をはずし、飼い葉に水をあてがってくれる少年と、風化して年輪の浮きでた木の柵をはさんでの、わずかの間の会話であった。

すると、家の内から主人の苛立った声がした。少年は顔色を変えると、馬の世話もそこそこにして家の中に消えていった。マルコはその場かぎりの道しるべを頼りに、小径についた馬の蹄のあとでも探って尋ねてきたのか、小屋に着くなり転倒してしまった。

とっさの出来事におれはあわてた。それはマルコの失神もあるが、サントから知らされていた真相による困惑でもあった。しかし、事情はどうあれ倒れた者をそのままにはしておけないので、ひとまず小屋に運んで寝台にねかした。きつい目に締めているズボンのバンドをゆるめ、上着のボタンを外して胸をはだけた。

憔悴したマルコの顔立ちは、陽にやけてくろく荒れていても、、薄明かりの小屋の中で広げた胸の白さ、形よく盛り上がった乳房のさきに、桃色の乳首が息づいていた。おれに下心があってこんな状況になったなら、明日はどうでもなれという気持ちになったかも知れないが、落ちてきた果物は珍しくても持ち主があった。それに本

人は気を失っているのでその手当が要る、おれは口に火酒をふくむと、女の顔につよく吹きつけた。
　ようやく口がさけるようになって、彼女が明かした真相は、サントから聞いていたのと同じであった。
「わたし、マルタというの、助けて」
　と泣いて訴え、老人とは余儀ない関わりから、情人にはなったが、ゼルバーノの性癖は寒気がするほどに嫌だと言う、おれは若いマルタに同情はしたが、彼女から頼られるのは意外でもあり困惑した。どんな処置をとれば良いのかも選びかねた。
　しかし、現実にはもう受け入れたことになるだろう。事情はどうあれ男と女がこうなれば、両人が同罪にみられるのは、過去にも数おおくの物語がある。
　彼女は怯えて、ゼルバーノは遅くても明日の昼頃には、ここに来るだろうと言った。老人はおれの帰ったあと、おれとの仲を疑って、ナイフの焼いたのを掌に押し当てたとも話した。俄かには信じがたい行為だが、老人の嫉妬とはそれほどにも凄ましいものかとも思いめぐらした。ここはまずマルタを逃がすことに決めた。けれども訳をいって匿ってもらう所となると、まずイネスの家より他はない、そう思い立つと今をおいて機会は逃がされない、訳を話すと彼女は承諾した。老人の探索の手から離れた処に身をおけるなら、何処でもよいらしかった。

マルタの恐れていたように、翌日、ゼルバーノは引き馬をつれて、漁師小屋の前に立った、情婦はてっきりここに隠れているとの確信で、老人はおれに挨拶もあらばこそ、

「小僧がきとるじゃろう」

息巻いての質問は、雇い人の少年がいなくなったにしては騒ぎすぎる。それにゼルバーノはまだおれがマルコの素姓を知らない、とみての訊きかたに思えた。

かって一夜の宿をしてくれた沈重な悔恨の思索家ゼルバーノはどこへやら、白髪を乱し急ぎの旅に上気した赤ら顔は、愛欲に狂った一匹の獣にみえた。ほんの行きずりの緑で、マルタはおれを頼って逃げてきたが、老人の狂乱の様子では、女は渡されないと決心した。

「知らんな、だいたい此処にくる道も分からんのに、どうして来れるのだ」

「お前は頼られる筋はないかもしれんが、あれは此処にしか来るところはないはずだが」

「他所は探したのか」

「まだだ、ムツッカ村にでも、隠れよったか」

老人はおれの言葉を信用したらしく、手綱をひくと戻り道に馬首をまわした。

奥地では生活が単調なだけに、変わった話題に飢えているのか、一地主の私事でもすぐに、おかしく面白く尾ひれがついて、口こみで広まるのであった。ムツッカで

マルタを尋ねてうろつくうちに、ゼルバーノは村民の慢罵の的にされ、したたかに飲まされたあげく、落馬して腰をいため、寝たきりの病人になったのを、世話する人があって、故郷のミナス州に帰ったということであった。

それと前後して、便船にたくしてイネスからマルタについて苦情がきた。S泊まりでマルタは男か女かで噂になっているという。

おれはゼルバーノの女を、すげなく退っぱらうのも情のない通り方と、ほとぼりのさめるまでS泊まりに預けたのであるが、彼女は自分で知ってか知らずにか、さかりのついた牝犬のようにふるまって、泊まりの男たちの目がついてまわるのも、困った事態だし、イネスにも気の毒であった。

おれは日をーおかずにマルタを引き取りに河を下った。すると思いがけなくも、イネスまでマウロを伴って、おれの漁師小屋にうつるという、妙な具合になって女二人が一度に来ることになった。おれも落ち着けない気持ちだった。

「マウロを手許におけて、旦那さんも良いでしょうか」

とイネスは、おれの本音を探るような口をきいたが、彼女はなにか心底に一物あっての申し出のように思えた。いままでのひとり暮らしの日々に女二人に子供がはいり、急に賑やかになるだろうが、それは長く続くとは

思えなかった。
この河の上流でダムの工事をやるとかの噂がある。それを裏づけるように、このところ船の行き来が増している。日によっては大きな船艇が遡行してきた。
おれひとりなら川漁師で一生終えても悔いはないが、マウロがいるのでこの暮らしも、彼の入学できる年頃までと目論んでいるが、政府が工事を始めるとなると完成までは早くても、五・六年はかかるだろうから、子供の将来を考えてやる時期と重なってくるだろうか、悪くすると工事の影響で漁のできなくなる環境になるかも知れないが、その時はその時の事にして、今はあまり深く考察しないほうが賢明だろう。人の明日などはどう変わるか誰が予想できるだろうか。
マルタにゼルバーノは国に帰った由、知らしてやると手放しで喜ぶところなど、まだ稚いようであっても、イネスの眼に会うと小鼻に殻をよせてぷいと横をむく態度などは、一すじ縄でいかない面もあって、マルタは客人気取りで、イネスを下女のように見下しているのは言葉づかいでも分かった。当然だが、イネスも内心穏やかであるはずはない。
けれども、二人の女の排斥しあう雰囲気が、おれの気持ちの片寄るのをふせいでくれた。もしイネスがＳ泊まりからついてこず、マルタと二人だけの生活になれば、どんな関わりになるか、これはもう理性では処理できな

い問題になる。マウロの乳母としてイネスが一人で移ってきたとしても、かなり誘惑の火種ともいえる。

それが女ふたりになると事態はかわって、ドベネックの桶（植物の発育に必要な各要素の一部を人工的に欠かして、成長への影響を調べる装置）ではないが、罪な情念のわくのをおさえてくれた。

それにしても、狭い小屋がなんとなく女臭くなった。これはおれの嘆覚だけでなく、週に一回巡ってくる船の男にも分かってしまうものらしい、別に秘密もないので隠すわけではないが、あらぬ他人の口が嫌なので、船のくる日のその時刻には、マルタに言いつけて裏の山へ薪をとりにやったり、他の仕事で小屋の外にだしていたが、船員たちはおれが同じ屋根の下で、女二人と暮らし子供が一人いるのまで知っていた。

「親方、若いのと年増の二人じゃー、身が持ちますかい」

と揶揄して笑う者もあった。どうせ自分の立場を説明したところで、彼らは信用する訳はないので、おれは親指を立ててみせ、悪くない身分だと誇示したのも、愛嬌として自分を道化者にすれば、自己の卑下にはなるが、野卑な彼らからも見下げられて、はじめて漁師仲間に入れると思った。

集荷船はこの漁場を終点にして、ここよりは遡ってはゆかないので、仕事がすむと帰航の舵をとり船首を河芯にむける。おれたちが見送る目の前で、二十頓ばかりの

舷のひくい河船は、ちじむ蛭のようにしだいに胴太りになり、流水を船腹の一方にうけて傾く、触先を下流にまわすと、操舵室、マスト、積み荷などの位置はすこしづつ変わって、船の影が水の上に長くのびると、ボォーツと汽笛をあげ、にわかに沸き上がる水の泡をあとに、船は速力を増すと視界から去っていく。

河岸に放り出したままの空箱、塩の袋、ちょっとした買い物など、軽い物はマルタに頼み、重い袋などは一度小屋に運び、おれがまた戻ってさても彼女は放心の態で、すでに視界から消えた船の後を見送っていた。

早晩、マルタの身の振り方は考えてやるべきだが、具体的なことになると、おれも思い迷うのだった。ゼルバーノが故郷に帰ったまま立てないから、平穏なようなものの、彼が動けるようになり、マルタの出奔後の真相を知ったなら、おれと彼の関係は女をめぐって無事ではすまないだろう。事態の成りゆきからマルタを妻にしてもよいようだが、自分の心もうごかないのに、一時の感情で女を家に入れれば、行く先は目に見えるようであった。

おれは過去の経験から、状況を解決するためには、積極的に動くよりも静観して、時期を待った方が良い事を知った。

はじめの妻アンナの強情に業を煮やし、突然の狂気の発作によって、傷害未遂事件をおこし、一身を破ったの

も誰の所為でもないが、今から思えばもっと冷静に処置して、妻とは別居という法の解決もあったはずである。どうもおれには配偶者に縁がない、アンナはあれだけの美貌で心の汚さはどうだったか、宿もない流浪のなかでたまたま知りあった、子持ちの若い女エバとは心の通いあうものがあって、この女となら苦楽も共にできると、結ばれたのもわずかの日だけで、エバは旅に病んで死んだ。

遺児マウロの養育はあり、おれは精神を病んだ過去などもあって、本能のまま女に心をよせてはならないと、きつく自ら戒めていても、それは苦しい戒律でもあった。

もともとこの漁師小屋はサントが、ひとり暮らしのために建てたほんの雨風を防ぐだけのもので、四人が住める広さはない、おれは間に合わせに女たちと子供に自分の部屋を提供し、壁のない屋根の下にハンモックを吊った。ところが夜の一時蚊の群れに悩まされるので、毛布を頭からかぶるが眠れるどころではない、ようやくまどろむと夢に女ふたりが現れるのであった。

マルタは小屋に着くなり、おれを見て失神した。（否応なしに自分を受入れさすための擬態かもしれないが）突然の出来事に、応急の折りではあり必要な手当のため、かなり際どい接触はしている。そういえば、偶然ながらおれはイネスの裸身もみた。こちらに来てまだ間も

ない、ある夕方、何かの用事でイネスを呼んだが返事はない、寝間をのぞくとマウロはよく眠っていた。その時の用事はなんであったか忘れたが、暗くなるまでに片付けたいカヌーの仕事があって、おれは岸におりていった。

河面には一面の霧がわいていた。大気と流水の温度の差で、このような現象をみる暮れ時がときどきはあって、ほんに五米さきが幻の世界にかわる、おれがカヌーの引き上げ場ちかくにゆくと、ほんの目の前でイネスがこちらに背を向けて水浴びをしていた。

ハッとしたおれは足音をけして、草むらに身をひそめた。すべてに控えめな彼女を驚かしてはいけない配慮ではあったが、年増女の裸を知りたい欲望も押さえることはできない。イネスは全身に石鹸をぬり、布で肌をこすると、アルミの洗面器で水をすくい、何度となく浴びては白い泡をながした。浅い流れにたって褐炭色のぬめる肌をした浴み女が、霧の中にあって身をそらすと、両手を乳房の下にあて押しあげる動作をした。

その時、ウウーーとうめき声をあげたようにきいた。イネスは見たところ年よりは老けてみえても、石女だけあって胸の張りよう、引き締まった下腹、太い股、尻の筋をわった肉おきなどから、どうして男なしには辛いおりもあろうかと、要らぬことを考えたりした。

ついさきの流れの淀みで、カワウソらしいものが水に

もぐる音をたてた。イネスはあわてて岸に上がると衣服をまとって帰っていった。

この出来事はおれにはかなりの刺激だったのか、朝めざめると夢精しているのを知った。けれども、どちらの女に手を出さなかったのは、自制よりも環境がおれをたすけてくれた。

ひとりはマウロの養育を頼んだ乳母だし、他は我慢ならない男から逃れるために、おれを足場にしただけの女で、行きがかりでただ便宜をはかってやっただけと、突き放して考えることにした。マルタは自由にどこへでも飛んでいけるし、また行かなければならない。イネスにも子供を連れてＳ泊まりに帰ってもらう方が良いだろう。

おれば自分の苦い経験から、物事は日のたつにつれて、その本質を現すのを知って、傍観して無理なく収まるのをまっていたが、半年ばかりの後、マルタは船員の一人と好い仲になって、彼女から望んで去っていった。イネスはいままでの行きがかりから、マルタと同じに考える訳にはゆかないが、マルタのいない後、何か言いだすはずと、おれは興味をもって待っていた。すると案の定イネスは家に帰りたいと言う。

マウロはもう歩けるようになって、おれにも親しんで手放したくはないが、子育てとなると仕事との両立はとても無理で、乳母の頼みは許してやった。

これでイネスが何を考えて漁場にきたかは読めたことになる、彼女にしてみれば、おれとマルタのくっつくのは構わないとしても、あの女しだいでは子供は引き取られるかもしれない、そうなると今まで受けていた養育費はこなくなる。そうなれば以前のように、多くもない商家の洗濯物をもらって歩かなければならない。誰でも一度旨い味をしつたあと不味いものを食うのはいかにも辛い、ここはどうしても、おれとマルタの問に水を差そうと、考えたのに違いないと、すこし酷だが、おれはこのようにイネスの思考を解釈した。

イネスはサントが仲にたってくれただけに、田舎女らしい実直さがある。それだからこそマウロを託したのだが、彼女をＳ泊まりに送っての帰途、イネスは自分の用はすんだと満足して帰宅したのかと思うと、そこに深い疑問が残ったがー。

マルタは去り、イネスはマウロを連れてＳ泊まりに帰ったので、おれの望みとはいえ身辺はにわかに寂しくなった。

季節は冬期に入ろうとしていた。雨はしだいに少なくなり、晴朗な空に渡り鳥の一群が動いてゆく日もあった。

日に日に、季節の深くなる、ある日のこと。この辺りでは見かけたことのない舟艇が、おれの漁場の岸にへさ

きを着けた。三人の男たちが降りてきた。その内の一人は三脚のついた器械を肩にかついでいる、この上流でダム建設の噂があるので、測量隊の人たちかともみていると、こちらにくる男たちの一人は白人で、他の二人はおれと同じ容貌をした日本人である。けれどもこの国で育った二世でないのはすぐに分かった。二人とも軽装ではあったが、おれのようにパンツ一枚の裸ではない、赤ら顔の髭のこい白人は腹のでた大男で、どっしりはしているが動作はにぶい、二人のうち一人は大男についてきたが、他の一人は歩きながらも、身体をゆすり手をふっているのは、新参者にはよけいまといつくアブをはらっているようすだった。赤ら顔はおれに話しかけられるほどの近くまできた。脇についてきた男はおれたちの耳なれない言葉で話すと、

「イエス」

と髭がこたえたので、これはダムの測量ではないと判断した。それにしても何のために器械など担いできたのか、この三人（赤ら顔は船主で案内役らしい）は学術調査か、または珍しいこの地方の風物を紹介するための撮影隊でもあろうか。

「日本人のマリオというのは君か」

と髭は金色の毛の生えた太い腕を差し出してきた。彼はここにくる途中で、おれに関わる情報を集めてきたようであった。昨夜から前歯が痛むゆえもあってか、何と

なく不快な気分が抜けないでいた。
「そうだ」
「君はピンタード釣りの名手だそうだが」
「漁夫だから、魚は獲るだが」
「実はこの二人は日本から、この地方の自然と人と動物の生態を、写真に収めようとしてきているのだ。僕の言うことは分かるかね」
「まあー、何とかはなあー」
「それでは話ができる、ところでそういう記録の一部として、この河の漁師の生活をも紹介する意味で、君が実地に大きな奴を引き上げるところを撮りたいのだが、協力してくれるかね」
赤ら顔の説得を聞いている間に、後からきた撮影係は漁師小屋から、岸につづく原始林を撮ると、レンズをおれに回してきた、紫色にしずんだガラス玉は、黒塗りの円筒の奥で怪しく光った。彼のおしつけがましく厚かましい態度に腹がたってきた。まだ協力するとも言っていないのに、風景はともかく、おれの顔を勝手に大写しにとる法はないと思った。
はじめからこの人たちの訪問を、おれの暮らしには無縁のものとしていたが、腹がたつとよけいに歯が痛んだ。
「すまねえが、それは出来ねえだよ」
相手はおれの拒否に驚いたようであった。

「どうしてだね」
「写真に写されるのは、おっかねえー、器械に命を吸われるというではねえか」
おれは男たちを追っ払う口実に、この辺りの土着人の迷信を使った。
赤ら顔は横にいる隊員に英語で伝えた。
「交渉ハムツカシイ、嫌ダトイッテイル」
「理由ハナンダ」
「写真ヲトラレルト、死ヌトイッテイル」
「バカナー」
髭の説明を聞いて、一人は笑った。彼はおれが幾らか欲しいのだと解したらしい。
「報酬ハダストイッテクレ、充分ナ日当ハダストナ」
案内役はおれの要求額をきいた。
「金はほしいが、死んだら何にもならんもんだ」
髭はおれの返事を通訳した。それを耳にしたカメラマンは気短な男らしく。
「訳の分からん、山猿めが、退化して面まで似ていやがる」
これは、はっきりした日本語で同僚にしゃべった。二人は始めからおれを馬鹿にしてかかっていた。挨拶もなしにレンズを突きつけてきのでも、腹の底は見えるようであった。
「どうしても嫌かい、考えなおさないか、もっと出さす

から、どうだ」
　しっこく食い下がる案内役に、
「すまねえが、帰ってもらいたい」
　と断り、三人には背をむけた。おれは小屋に入ると、流し台の柱に吊ってある鏡に、自分の顔を近づけてみた、つよい湿気に水銀はくもり、褐色の染みがくまどっていても、何とか物の影ぐらいはうつる。おれは自分の顔をみて驚いた。真っ黒に陽にやけているうえに、前唇があかく腫れあがり、剃らずにおいた髭がもみ上げから、顎にかけてのびているので、これではまったく山猿にちがいない。
　撮影隊の一人は断られた腹いせに。捨てせりふを残して帰っていったが、あんな奴に漁場を見せずによかったと考えたとき、あっーとおれは思わず叫び声を上げるところであった。あれほどきつくサントから戒められていた、（漁場に他人は入れるな）をすっかり度忘れしていたが、別の信条（釣るのは仕事で、見せるためのものではねえ）が頭にあったからで、サントの言葉はどれをとっても、生活人としての真髄に繋がるものがあるのを悟らされた。
　一時噂にあがったダム建設も、いつか立ち消えになった。些細な出来事は身辺に起き消えたが、それらは別に記憶に残るほどのものではなくて、三年は過ぎた。マウ

ロはＳ泊まりで育っていた。くりくりした活発な児で、いくらか色のついているのは、祖母の先住民の血がまじっているからだろう。イネスはマウロはとても賢いと自慢であったが、あながち身内のひいきだけではないようでもあった。

ある年の雨期に入った頃から、西から東に流れる雲塊は、雲の上に雲が重なり、晴れ間などみせずに、よくもこれほどの水量が空に浮遊していると思えるほどに、来る日も来る日も降りつづけた。

漁師小屋はまるでシャワーの下で雨傘をひらいている有様になった。サントの葺いた茅の屋根も、雨水をはかしきれずに漏りはじめた。おれはずっと仕事は休んでいた。集荷船も欠航した。降りはじめてからなん日めかに、二隻のカヌーを水際から、より高みの樹の幹に鎖でゆわえつけた。

何日も陽に当たらず小屋にいて、怠惰な毎日をすることもなくハンモックにころんでいると、半裸の女たちが幻となって現れる。父の農場でも無礼講であったあのカルニバルのある年の歌がしぜんにでた。

カルニバルのうた

オージャルジネイロ

ボルケ　タント

エスタ　トリステ

ケアケ　アコンテセウ
オヤ　カルメイラ
カイウ　ドス　ガーリョス
ドイス　ススピロス
デポイス　モレウ

（意訳）

おー庭つくりよ
なぜそんなに
悲しむのか
なにか事故でもあったのか
カルメイラをみてやってよ
たかい枝から落ちて
ふたつ息をすったまま
おっ死んじやったんだよ

出水のとどろきと雨だれの音が伴奏になったが、過去の良き時代の祭りの歌ぐらいでは、なにか起きるという不安はまざらわしょうもない。おれはハンモックから下りると、雨の中を外にでた。水の量は予想のほかに増していて、かなりの余裕をもって樹の根元に結んでおいたカヌーは、一夜のうちに張りきった鎖に引かれて、水をかぶらんばかりに傾いている、おれば流れにはいり結びをとき、カヌーをもっと高みに引き上げた。小屋からこ

こまでは百米はあるが、高低の差といえば一米そこそこだから、住まいが浸水するのはもう時間の問題に思えた。うねりながら流れる濁水をはさんで、雨にかすむ対岸の森はひどくちじんで視界のさきにあった。

州境を劃するこの河は、乾期になってながく降雨がなくても、さほどに流れの水位は下がらない、また上流の一地方の豪雨ぐらいでは、河は濁っても水量はそれほどに増さないのは、経験で知っている。

ところがこの度の出水では、異常ともいえる降雨量が、奥ふかい広地域に降りそそぎ、はるかな高原から平地へ、平地から湿原へと、収まりきれなくなったのが、大小の支流にそれから本流へと・・・。

黒い雨雲が切れ間もなく移動していく下は、一面の濁流の世界で、満々と流れる水は高く低くうねりながら、波頭の上に波頭がのしかかって飛沫をあげる。処により水中に大きな渦ができるらしく、太い樹の根こそぎになったのが、ゆっくりと回りながら水中に呑まれていく。小動物の死体が芥にまじって流れてくる、図体の大きな牛馬の死骸が浮き沈みしながら流されてくる。半壊れの草葺きの小屋までが、波にのって目の前をすぎていく。それらの光景をただ茫然と眺めていると、幻惑と共におれの身体もふわっと浮上して、流れとは反対の方向に押されていくような錯覚をおぼえる。

この度の洪水はおれたち河漁師の一時の休業どころで

はなく、流域にひろがる農場に大きな災厄をもたらすだろう。サントが女の物狂いにたとえた洪水も、彼の体験では小屋までは浸水していない。爺ほどの生活者の予見も甘く、―骨やすみじゃーと言ったほどなのに、増水から五日たって不意に裏のトウモロコシ畑からの出水であった。

それは緩慢に水が絡みだし溜りになるようなものではなく、足の脛が浸かるほどの高さで、どす黒い水が白い泡をたてて、おびただしい落ち葉に、木の枝、蛇などを巻き込んでの来襲であった。この現象はここよりはもっと上流のある箇所がやぶれて、溢水の一部が原始林の下闇をくぐって出現したもののようであった。

本流の水位だけに気を配っていたおれほ、その時、はじめて背筋に寒気がはしった。これは事によっては自分も遭難するのではないかとの恐れであった。

裏山からの出水には一刻をあらそう処置が要るようだった。はじめの一波でこれほどの水量では二浪三波はどれほどのものか予想もつかない、事態がここまでくればカヌーは手放しておけない。まず大型を小屋に引いてきた。他のは捨てることにした、小屋の柱では心もとないので森に入ることにした。もうその時にはカヌーが浮くほどに水位は上がってきた。予見できない危機に備えて、モータ、油、銃、食料など舟にうつした。竹竿で骨組みをくんで防水布を張ると、雨漏りはなく炊事寝起き

はこれでできる。何とか身のまわりの処置がすむと、Ｓ泊まりの子供のことが気になったが、イネスの家は教会のうらの高みだから、一応の安心はできた。そういえばテモーゾの奴、ここ二三日姿をみせないが、あいつのことだ。早くも出水を知って高台に逃げたのだろう。

小屋の浸水が始まって二日目に、おれはカヌーを森の奥にいれた。これはと思った太い樹の幹に鎖の輪をまき舟をもやいだ、今のところ、これから先なん日避難の暮らしが続くか皆目分からない、食料の心配はないものの、何時ごろから減水するのか、予想に反して洪水は日に日に上昇しながら止まるところはない、舟に繋いだ鎖の輪は日に二十糎から、樹の幹をはい上がった。おれは視界のせまい鬱林の中にいるのに、しだいに辺りが見えてくる。漁師小屋はわずかに水の上に屋根だけをのぞかせ、対岸の森も高い樹の梢だけが、流れから抜き出ているだけになった。

この度の洪水では、どれが本流か、どの方角がＳ泊まりになるのか見定められない。渺茫として狂い流れ、天にも届くかと見るほどの、めくるめく水の世界であった。余儀なく強いられての森の中への避難も、万全ではなくなってきた。流水の方向が時によって変わるのか、カヌーの位置がいつの間にか移動している。はじめは裏山から押してきた水も、今では本流の水位が昇ったのか、逆に押し返される状態になった。ときには高波が

どっと樹々の幹にぶつかかってくると、カヌーもそれにつれて上下に揺れた。おれが命の綱とたのむ太い樹は、腋臭のある大女のように、つよい大蒜の臭気をだす軟木なので、柄ばかりは大きくても根は弱いのか、いくらかは傾いてきた。

しかし、おれの危惧もそれまでであった。ようやくに増水が止まったからである。始めはなかなか引く気配はなかったが、引きはじめると日にかなり減水してゆく。やっと我が身の危険がさったと思うと、まだ何日かは本流に出るどころではないが、無闇とS泊まりの子供に会いたくなった。

ようやく漁師小屋は屋根をみせはしめたが、幾日も水に浸かった草葺きの屋根などは哀れなもので、押し流されなかっただけでも儲け物だが、土壁は崩れ落ち柚木で組んだ骨組みだけになった。地面に据えた調理台、圧搾桶、挺子棒など、すべての道具類は泥土をかぶり、それらは再び使い物になるかと思うほどであった。

何をおいてもS泊まりのイネスとマウロの安否を知りたかった。思い立つと矢も盾もたまらず、川渡のうねりはまだ高いが、泊まりまでつづく岸の森も見さだめられるので、河下りをすることにした。ジョンソン（発動機のマーク）は力持ちなので、高波、渦巻も乗り切れるだろう。

S泊まりも惨憺とした有様であった。後日に聞いたと

ころによると、三十年来この河岸に住む老漁師も、この度のような出水は知らないという。上がり下りの船が客だから、商店はどうしても桟橋ちかくにおおくなる。ルイスの店（薬局、公証役場、郵便局などかねた）も軒まで水が上がったときいた。

高台に建てられた教会は難をまぬがれていた。イネスの家はなんの損害も受けなかったが、一時、村民の騒ぎは大変なもので、貧寒なこの地でも、周囲の住民が高台めざして避難してくると、かなりの人数になり教会では間にあわず、イネスの家にも二家族がはいっていた。

おれはまず二人の無事を喜んだが、ゆっくりと話をしているひまもなく、村の役員がれの動力つきのカヌーに目をつけて、P町までの便船にと頼みにきた。緊急を要する薬品食糧などの供給が求められていた。

おれはこの仕事で二十日ほども滞留して、難民に奉仕したので、薬店主ルイスの知遇はえたし、S泊まりではちょっと顔を知られるようになった。

洪水の後にはつきものの、疫病が泊まりにでだした。感染を恐れておれは乳母とマウロを連れて漁場に帰った。ほんの流行病の治まるまでと考えていたのが、イネスがいてくれればなにかと便利なので、ちょっとしたある出来事の起きるまで、五年もの歳月を共に暮らしたのであった。

S泊まりで話のできるのは薬剤師ルイスぐらいのもの

であったが、彼との関わりあいから、郡の政争に巻き込まれて、おれの運命はおおきく変わっていくが、すべてはこの洪水によっているように思えるのであった。

イネスの死

洪水の引いたあと、Ｓ泊まりは惨憺たる状態で現れた。人の目につくどの家々の壁も浸水でふくれあがり、白く塗った漆喰ははがれ落ち、流水の圧力にたえきれずに、屋根の崩れおちた家、土壁の住宅などは、押しつぶされ泥土にうもれて、壁の芯とおもえる組んだ割り竹には、なんとも知れない浮流物がからみついている。土台を奔流にえぐられ、ぐらつき傾いている木造の家、隣家によりかかって、やっと倒壊をまぬがれている平屋もある。

人々は水が引くと早速、自分の住居、店の被害のぐあいを調べにいったが、戻ってそのまま住めるような家は一軒もなく、出水ののこしていった泥土だけでも、とうてい半日や一日の清掃ではすみそうではない。丘の教会から下ってくる大通りも、一時は溢れ水の通り道になり、荒れに荒れたあとなので、とうぶんは車どころではなく、それも河岸ちかくになると、路のまん中に陥没し

た穴があき、まだ鼻息のあらい川波が、ときおりどっと暴れ込む、そんな水を石油缶にくんで頭にのせてゆく女がある。

人影はまばらに動いても、S泊まりは廃墟のように寂莫として、まだ下流から遡行してくる舟艇もない。岸に植えられていた樹木は根こそぎにされ、桟橋とは名ばかり古いガタのきていた踏み板などは、一枚のこらず、嵐のまえの鳥の群れのように飛びちっていた。

過去の何回もの出水にも安全であった煉瓦工場の設備一切が壊滅した。それと並んであっった製材所も、据え付けの蒸気機関を動かす術もなく水をかぶった。持ち主には大きな損害だが、洪水は彼らだけに当たったのではなく、河岸ぞいの農場、漁業者、低地の貧しい住人たちにも、むごく当たったことになる。

出水が引いて、安堵する間もなく、泊まりに疫病が発生した。蔓延する気配をみせてきたので、おれは養子とイネスを伴って、一時漁小屋に避難したが、ここも無残というほかはない。しっかりと脚を土中に埋めこんだ厚板の調理台、塩ものにして一夜漬けで汁をぬく桶などは残ったが、小カヌーは流失していた。漁師小屋は新しく建でなければならないし、井戸も汚水の溜りになり、べつに掘る必要があった。

どこも同じような災いであっても、おれのように簡素というより、必要な物以外は何もおかない暮らしの条件

を整えるだけでも、一カ月ぐらいはかかるだろう。
　これまでに橋の下、崖の蔭、森の中でなん日もの野宿をしてきた。それも他人の土地であった。この度は三人であるが、なんといっても自分の土地だし、幌つきの大型カヌーで寝起きできるので、これはもう富者の生活といってよい。それに話し相手がある。
　夕食の後、小さな者が眠ると、石油ランプの下で、船員とできて出ていったマルタの噂から、イネスの身の上話まで聞いた。
「そうですね、なにから話してよいやら、わたしどもは貧しいながら農場をもっていましたが、いつの間にか借金がふえて、隣の地主に取り上げられたんです。一家は近くの田舎町に引っ越しました。わたしには好きな人があって、その人と一緒になったのです。
　ジューノと言いましたが、もっとよい金儲けをしたいと他国に出かけたのです。腕のよい牧夫でしたが、どんな仕事をしていたかは知りません。半年。一年も戻ってこないこともあったのです。けれども、わたしの食べ料ぐらいは送ってきたものです。ジューノは他人にはどうだったのか、暴れ者のように噂されましたが、わたしには優しかったもんです」
「お惚気かね、イネス」
「そのように取られましたか、もう昔のことですものね、ある時、帰ってきて言いますには、ーこんどうまい儲け

仕事がある。それがうまく運べば、もうどこへもゆかないーと申したのですが、それから一カ月ほどたって、ジューノはいかにも牛追いといった男に連れられて帰ってきたのです。夫はもう馬に乗っているのも、やっとらしい状態で家にはいるなり、寝台に倒れ込みました。上衣を脱がせますと腹にしっかりと巻いた布に、黒く変色した血が背中にまで染んでいました。それにあの死んでゆく者がだす臭いが鼻につきました。連れの男は私をよこによんで、―イネスさん、ジューノがどうでも、お前さんに一目会いたいというので、危ない橋をわたって連れてきたが、今日か明日の命だから、念のためにー、と告げてその男は帰っていきました。その人がサント親方でした。夫は息をひきとる前に、S泊まりの高台に二区劃の土地を買ってあるからと、わたし名義の地権証といくぱくかのお金をおいていったのです。その頃、私は家畜市のたつほどに、賑わったムツッカ村にいました」

「ちょっと待ってくれ。イネスはずっとS泊まりではなかったのか」

「そうではございません。ジューノが亡くなってから、あちらに移ったので、前はムツッカにいました」

「へえー。これは驚いたな」

「なにか、訳でも」

「あんた。おれのような顔つきの男は知らんかね、日本人の噂きいたことはないか」

「さあー、わたしは村はずれでしたし、そんな話は知りませんね」
「そうか、年代がすこしずれているようだ、何でもないんだ」
「ムツッカは泥棒村という人もあるほどで、盗られた家畜は、あそこにいけば見つかるそうで、そんなわけで時には、持ち主と馬喰とは喧嘩になるそうです。人の話では、持ち主が目印にする焼き鍵の跡は、うまく変えてあっても、主人が見覚えのある獣の名をよべば、馬でも牛でも、いななくとかほえ声を上げるといったふうで、元の主人と馬喰のあいだで揉めても、もともと命知らずの無法者どもです。すでに二人も三人もの手をわたった売り物のこと、ただでは手放すわけはなく、やはり盗られ損になるそうです。無宿者の行き倒れ、どこかの山の中で死人があるとか、ウルブ（禿鷹）が空に舞いだすとか、喧嘩で死人のでるのは常のことで、ジューノの死んだときも、恐ろしい傷はだれも詮索する者もなく、証人たちは拇印をおして、黄色い砂の丘の墓地に埋めたのです。国から弟をよんで、いまの所に住まわしたのですが、あれも怠け者でしてね」
「サントとの関わりはそれからかね」
「ああ、親方ですか、あれから仲間は解散したとかで、この河の上で漁師をやるのだと、挨拶にみえたのはもう何年前になりますやら。親方は達者でしょうかね」

「さあー、音信なしだが、サントはそういう人だからな」
「そうです、あの人らしいやりかたですね」
イネスはしんみりと相づちをうつと、彼女の過去に想いをはせているようであった。

おれはまず住居としての漁小屋を建てるのを急いだ。イネスがいてくれて助かったのは言うまでもないが、彼女がいついてしまった理由は、一時入居させた家族が出ていこうとしないからであった。行く先のない先方に同情したイネスは、自分さえここにおいてもらえればと、おれの同意をもとめた。

彼女が幼い者の世話をみながら、漁師小屋で寝起きしてくれれば、こちらは助かるどころではない、その後、入居者は転居していったが、なんとはなしにイネスは五年もの年月ちょっとした事故が起きるまで勤めてくれたのであった。

この度の洪水について、おれは目にみえる損害、つまり休業、住まい、器具の流失や修復についやした費用しか計算していなかった。仲間から集荷船がちかく復業するとの知らせがあった。一おう身辺の仕事もすみ、体ならしのつもりで、漁の下調べにカヌーを出した。

あれだけの出水の後なので、たぶん従前からとはいくらかの変化はあるはずとの心構えはしていた。ところが舟を操っていって、本支流の合流点と思える所に着くと、

前に心おぼえのあった細く岬のように、流れに突きでた陸地と、被さるほどに茂った叢林は忽然と消えていて、双方からの流れが噛みあい盛りあがり、大きな渦をまいている広い濁った河面におれは当惑した。はじめは場所ちがいとも考えたが、やはり土地勘のようなものがはたらいて、ここは穴場の入口だと確信した。

うごかぬ証拠として右側に対岸の原始林が望まれた。もうすこしカヌーをやって左転させれば、舟はしぜんと流れにのって、棒突きの崖に向かうはずであるが、なんとしたことか。あの赤土あらわな崖まで消滅していた。ひと抱えもある大木を苦もなく倒し、押し流していったこの度の洪水だから、激流がもろに当たればあれほどの土塊など訳もないことのようにも考えてはみたが。

おれはもと穴場と思えるところに舟をやった。それにしても魚の巣を懐ふかくだいて、鯰どもを群居させていた。あの昼でも暗いほどに枝に枝をくみ、葉に葉を重ねていた欝林はどこにいったのか。ここも陽光をキラキラと反射させ、細かく波頭をさわがせている場所に、おれはカヌーに立って戸惑うばかりであった。

その日、自分の見込みちがいを知らずに帰ってきた。というのは、まだそこで漁はできると決めていたからであった。ようやく集荷船も就業するという知らせをうけ、整備しておいた釣具をもって仕事にかかった。ところがサントがあれほど大切にし、おれに譲るときにも、

秘伝のように教えた穴場は、過去の幻影になった。陽の照りはえる昼間ではと考え、夜釣りに変えたが結果は同じであったので、その漁場は放棄せざるをえないことになった。これは一つの禍事の予告のようにも思えるのであった。おそらくは奔流が穴場の澱みをかくらんし、深い泥土を押し出すと、鈍重なピンタードどもは行動の自由を失い、黄色い腹をかえして流されてゆく様がみえるようであった。

おれはとくに分のよい収入は望まないが、回航してくる船とは出荷する最少量の契約がある。仕事のための仕事は好まないので、解約を考えたが、もうすこし事態をみるつもりで、河を上下して流し釣りにかえた。日に三回、四回とカヌーを走らせて、かかる魚はなんでも揚げたが、本流の奴らはどれも暴れるので、こちらも疲れる、どちらにしても労おおく収入はへった。おれは決してイネスに愚痴ったことはない。けれども彼女にもしぜんと分かるものらしく、聞かれるままに隠さずに言うと、

「それじゃ、わたしの方が分はよいようで」

と人の好いイネスは気の毒がる。

「イネス、あんたが思うより、おれは儲けているんだで」

と笑うと、

「そりゃー、旦那さんは前には農場まで持っていなさったんだから」

「あー、あれか。妻の一族から裸で追放されたのだ。監禁されなかったのが、もうけものぐらいだが、すんだ事件だし忘れることにしている。今では他人の事ぐらいにしか思えないのだよ」
「それにしても、ひどいですね」
「いやー。身からでた錆だよ」
ここでイネスは黙った。彼女はこれ以上、深入りするのは自分のわきまえを越えると考えたのだろう。
育て子のマウロはいちにち裸でいるのに、風邪ひとつひかずに成長していった。野育ちで教えた訳でもないのに、水泳、木登りなど器用なものだった。おれは養子としての愛情のほかに、日本人と先住民の混血児の彼を観察する興味もあった。
おれは自分の幼時や、学校に通っていた頃の友人たちを思い出してみると、すべて大人の世界に組みいれられ、一つの出来あがった構造物に適応するように育てられていた。おれはその一つの柱を壊そうとして意のままにならず、かえって罰をうけたが、古い家系というものは、先祖の慣例を守っていても、改革しようとしても、年をえた古屋のようなもので、しょせん倒壊は免れないものらしい。父は自由を求めてこの国にきたが、おれの代になってまったくの自由、裸になってしまった。
マウロはその屋敷跡にはえた木のようなものか、おれとは違った遺伝は持っているし、辺境という環境もある

が、原始の性質は色こく身につけているようであった。
ある日、彼は毒蛇の太い奴を、木の又にはさんで帰ってきた。イネスは悲鳴をあげたがおれもびっくりした。首を絞められた長虫はぐったりしていたが、マウロの背にくらべて獲物は大きすぎた。喫まれたら死ぬと教えてあるのに、彼には蛇食いイタチのような本能があるらしい、どちらにしてもそれは彼の手柄になるので、皮はいで塩をまぶしかげ干しにした。
マウロは物心のつくにつれて、おれのことはどう思ったか知らないが、イネスが実母でないのは感じてきてそのように聞いたという、彼の目的への行為は認められたが、観念的なものには関心がうすいように見えたのに、そこに目ざめてきたのは、しだいに心の成長してきた証だろう。サントが手に入れてくれたマウロの出生証には彼はエバの私生児で母親は死亡届けもされてないので、どこかにいることになる。
この事情については、マウロがもっと成長して、複雑な人間の関係が理解できる年頃になって知らすつもりであった。これは辺境の仕来たりを知り、処世の術にも長けたサント老の忠告に従ったわけではあるが、自分とは意気投合した爺ではあったけれども、やはり微妙なところでおれの生き方とは違うところがある。おれたち親子の将来に問題を持ちこすところなどがそれだが、それは思いすごしかもしれないし、子はおれによく懐いている

し、とくにいま問題にすることもないと思った。
この事はすべてエバの急死からきている、おれと彼女とはほんの短い同棲にすぎなかったけれども、彼女はおれの妻と思っている。実母の家系、エバの立派な生き方、持病が悪化して旅での死、マウロが年頃になれば真相を知らすつもりでいる。もちろんエバの墓へも同伴しよう。このように先に持ちこす危惧はあっても、漁夫の日々は事もなしにすぎていった。

ところが、ちょっとした事故がおきた。
イネスが井戸の巻き揚げを回していて、つい手をすべらし、反転する把手にはねられ、地面に転倒した。マウロの知らせで駆けつけたおれは、彼女をかかえ上げようとすると、イネスは悲鳴をあげた。なにごとにも辛抱つよい女が泣くほどだから、よほど痛むところがあるのだろう。ことによったら骨折かもしれないが、ともかくそのままにはしておけないので、身体の下にむしろをしいて、引くようにしてやっと屋根の下に持ってきた。
動かせば泣くし、人手はなく寝台に上げるなど無理なので、黄麻の袋をかさねてその上に休ませた。じっと寝ているぶんには痛まないので、大方はぎっくり腰だろうと判断した。
はじめてイネスの肌に手をふれて、ここと思う箇所をおしてみた。痛むのは把手に打たれて青くはれた二の腕

と腰であった。
「情けない身体になりました」
と辛そうに訴えるので、
「心配はいらん、あんたのは牛に負けんほとの骨だ」
わざと笑って、荒っぽく突き放しておいた。
ずっと前の事になるが、父の農園でもこんな例はあった。初老の農夫が重い倒木をかたづけようとして、そのままへたりこんで動けなくなった。イネスのもそれで十日も寝ておれば、しぜんと治るギックリ腰とみた。用心のため一晩ランプはつけておいた。なんとなく寝つかれない夜であった。すこしはうとうととしたようだが目がさめると、朝はもうそこにきていた。灯はほそく黄色くなって黒い油煙をあげている、おれは吊り床からおりると、まずイネスに声をかけた。なんとマウロは乳母のかたわらにころんでいる。上からのぞむ姿勢になったが、どうもイネスの様子が変わっている。顔はもともとうすい褐色だが、今朝は青みがくわわり、めくれ気味の厚い唇は黒くなり、手もふるえているようで、思いなしかロもきけないように見えた。
これは一夜のうちに、容易ならぬ病状になったと判断した。すぐにでもカヌーを用意して、S泊までゆくか、場合によってはP市まで下ろう。
「どうしたイネス、苦しいのか、気分は」
「別にどうということもありませんが」

差しせまった容体らしいのに、おれが聞くと、貰って間もない猫の子のように、与える餌からも身をひく仕草に似た返事だった。
「イネス、痛むとか、気分が書ければ正直にいってくれ、すぐ手をうつからな」
「わかっております。ちょっと我慢しかねておりますんで」
「なんだー、その辛抱しかねとるのは」
「はいー、小用でして」
なんだー、そんなことかと、おれは緊張していただけに、笑いだしたくなったのを、やっと自制できたのも、彼女の思いつめた表情があったからである、まず思いつくのはお丸だろうが、そんな用具はここらでは笑い草の種になるぐらいだ。もつと必要な薬品でもこと欠いていて、たやすく人命の失われる辺境であった。
「イネス、そのまま用をたせ、濡れたら取りかえてやる、動けないから当然だ。恥ずかしがることはないぜ」
「とんでもないことです」
と彼女は首を横にふった。外に連れだしてくれと言う、その内マウロは目をさまして、
「イネス、どうしたまだ起きられないの」
といったぐあいで大騒ぎになった。
「まあー、仕方がない」
おれは乳母の望むようにしてやろうと、ゴヤァバ樹

（バンジロウ）の蔭に連れていったが、なお彼女は強情をはって、寝たままではとても用は足せないと言う、それではひとつ彼女の望むようにしてやろうと、すこしは意地悪の感情もまじって、横にはった手のとどくほどの枝から綱をたらした．イネスがそれにすがって自分で起きる方法である。もっと北の奥地では、先住民はこのような形で出産するとも聞いている。おれはマウロを促して小屋にもどった。すると間もなく、

「アイ、アイイ」

と辛そうなイネスの泣き声が耳についた。これまでに子供は乳母のこんな悲しい声は知らないので、心配顔で駆けだそうとするのを、手を引いて止めさせた。

マウロはおれが笑っているのを、どのように理解したかは分からない、けれどもにっこりと笑いかえしたのは、子供心にも心配のないのを納得したからだろう。しばらくして、イネスは甘えた声でマウロをよんだ。子供をやらすと用はもうすんだから、おれにきてくれという。

日に二度、三度とにかく大騒ぎであったが、イネスの腰も日に日に痛みはきえて、自分で用は足せるまでになった。腰の筋をちがえただけであったので、治りだすと嘘のようであった。しかし後遺症として彼女の腰はすこし曲がったままになった。

この出来事をさかいにして、おれたちの日常に微妙な変化がおきた。イネスにしてみればおれに醜態をみせたのを恥じてのことかもしれないが、それはもっと深い意識からきているようにも推察されるのであった。

おれと彼女とはエバの子をはさんで、この年月一家のように暮らしてきた。その間にマルタが入った半年と、洪水後の伝染病を避けての一時の転居が、いつの間にか歳月を重ねていた。サントにしても、マウロの乳母としてイネスを紹介してくれたのは、先ざき頼りない身の後家を、おれにくっつける考えがあったのか、たとえ女にそのような気持ちがあったにしても、昔気質の人だから情のほしいような仕草はつつしんだだろう。それが主人と雇い人の垣をこえなかったのは、おれたちはあまりにも年齢に差があったのと、異性としてのイネスはおれに思わずハッとさせにもの、なにか未知への誘いに反抗しがたいものに欠けていた。それにおれに自制を強いたのは、二人の女に失敗した苦汁である。そのうえいまだに逃げられない軛をおっているからであった。

けれどもおれたちは何か歯と歯の間に、物の挟まったような気持ちで日々を送っていたのではない、おれば重い気性ではなかったし、どちらかといえば冗談ずきで、いつもイネスを笑わしたものだった。しかし、これは男女の仲にとうぜんあってよいものを、韜晦するひとつの術とされても仕方のないものであった。というのもイネ

スは腰をいため、動けないのにおれの看護をかたくなに拒否したのも、日ごろからの恨みへの裏がえしのようにもとれるのであった。

重い仕事は無理にしても、イネスは一カ月ばかりですっかり元の身体になった。ところが、ー使ってもらっても、それほどの仕事はないし、子供の世話だけなら、このさいＳ泊まりの家も長く空き家になっているので戻りたいーと言う。もともとおれたちは洪水後に発生したチフスをさけて。この漁場に逃げてきたので、疫病が治まれば彼女は自家に帰ってよかったのだ。それが何とはなしに五年もの歳月が、あっという間に経ってしまったのも、このような辺境では月日の過ぎるのは実に早いという証になる。

それはマウロの成長をみても頷けるはずで、子供はもう手のかかるどころではない、おれのちょっとした助手にもなるが、彼はおれと違って世の中に出てゆく人間になってもらいたい。子供を手放すのは辛かったが、意を決してマウロをイネスにつけて帰すことにした。もう就学してもよい年令になるからだった。

洪水はＳ泊まりに災害ばかりをもたらしたのではない。州政府からは復興資金がでて、老朽していた桟橋は新しくなったし、大通りも修復された。個人にも仕事をだす者が多く仕事めあてに人が移ってくるなど、にわか作りの住居が空地にたち、借家をさがす者もあるときい

た。Ｓ泊まりは鄙びた河ぞいの村落にすぎないけれども、位置する場所はそうわるくはなく、はずみさえつけば一つの河港に発展する可能性はある。それについておれにはなんの利害もないが、イネスには亡夫の残した土地があるのだから、長屋でも建てて家賃が入るようにすればと考えてみた。一日その話を持ちだすと。

「そう願えれば有難いことです。腰が曲がってから、乞食をせんですみますでな」

「そんなことはさせるものか、でも家賃が入れば楽だからな」

「そうですとも、でも旦那さん、お足のほうはどうですか、先だつものはあれですが」

イネスはＰ市の銀行に、長屋を建てるほどの預金はもっていた。はじめての給金をわたした時、彼女はおれに預かってくれと言った。生身ひとつ明日はどうなるか分からない身で、他人の金など預かれるものではない、銀行など彼女に用はなかったし、無信仰なユダヤ人のやる仕事で、預けた金は返ってこないものとして、口座をあけるについて尻ごみしたのを、おれはやっと安心させ、イネス・デ・シルバ・オリベイラの署名を教えた。はじめは口をゆがめ、手と共に身体まで動かして、手本をなぞっていたものが、一カ月たつとなんとか書けるようになった。そのうえマウロと共に習う晩めし後のひとときの学習で、初級読本の読み書きはできるようになっ

た。
イネスはＳ泊まりに戻ってきて、こころやすい友だちのマリア、ジュリア、リンダなどみな文盲なので鼻はたかい、そのうえ銀行の小切手をだせるのでなおさらであった。
イネスはおれの提案を実弟のジョンに話したようである。便利屋の弟は姉の仕事なら飛びっきり安くやるから、任してほしいと頼んだという、ジョンは素人ながら煉瓦をつんで平屋ぐらいなら手がけられるほどの器用さはあった。
おれはイネスの承諾をえて、一つ棟四軒長屋の設計をした。資材と経費を金物屋のベント親爺にたずねた。
勿論おれはジョンの請負に異存はない。ただ契約高と支払いの方法について話合いがのこった。イネスはすべておれに任すというので責任はある。
「じゃー、こうしましょうや、材料から手間賃をまとめて、前払いにしてもらいましょうかい、姉の仕事でもあり安くしておきますで」
と複雑な計算はとても無理な頭をかたむけていたが、思い切ったというふうに、
「旦那。五千で手を打ちましょうや」
このての男どもは日ごろ、零細な賃金で雇われながら、口さきだけは自分でも評価できないような金額を話題にする。居酒屋カスクード亭（鎧なまず。食えないという

主人の仇名）の爺からでも聞き出したのか、でたらめな額のうえに自分の・欲の皮をのせた、人をペテンにかけようとする申し出である。捕れてもとれなくてもよい、まず網を投げてみょうという、まったく狡猾な恥しらずなやり方である。それならこちらにも考えはある。いくらかは好意のある旨味はのこしての予算を立てていたが、ぎりぎり一杯の金額を言ってやった。

「それじゃ、粥もすすれませんや、半値とは殺生ですて」

ジョンのような男は、相手が弱いとみればいくらでも押してくる、その反面強者にはもう哀願一手という生活の知恵を、身につけて生きてきていた。

「やれんのか、それじゃ、キンカか、シコにでも建てさせるか」

「それは話がちがいますせ、仕事をだすのは、イネス姉ですからな」

「手を引けと言うわけか、頼まれたからで、押しつけがましくやっているのではない、それではお前がイネスと交渉すればよい」

「旦那。それは勘弁してくだせい。姉ときたらお前さんはもう守護天使のような信用ですて」

「もっと考えてものを言え、自分の掘った穴に落ちよってからに、もう三百だけ出してやろう。さんざんお前らが世話になったイネスからでる金だ。しっかりやってもらわんとなあー」

「へえ、女房や娘のためなら、カペック（悪性者）とても手を結びますわい、米も油も切れていますんで」
おれは本気で相手にする気にはなれなかった。けれども、この仕事は他人に渡されない事情もあった。これはよほど締めつけてやらないと、イネスの家は建たないと心ぐみした。
「お前がみんなカスクードで飲んでしまうからだ」
ジョンは白けた顔になって横をむいたが、この仕事で儲けがあるのか、ないのかさえ理解できないような、呆けた表情で口を開けていた。嫌がるジョンを引っぽって、ルイスの店にいき契約書をとり拇印をおさせた。のちのちこれがものを言い、紆余曲折はあったが、なんとか四軒長屋は建った。おれは口ではきつく言っても、ジョンにはかなりの恩恵を与えていたと思っていたのに、事は反対で彼から深い恨みをかっていたのは、後日になるまですこしも知らずにいた。
この手記について、年を経て回想すると、ほんの短いなん日かが記憶のおおくを占めていたり、四、五年もの長い歳月がすっぽりと抜けていたりして、思い出せないことかある。かなり重要な自分の生涯の曲がり角になった事件も、茫然と遠くにかすんでいることもあれば、日常とるに足らない些細な出来事が、折りにふれ鮮明な印象となってよみがえることもある。

あの大洪水から、イネスが腰をいためて、自分の家に帰るまでの年月が記憶にうすいのは、それだけ平穏な日々であった証になるのだろう。

イネスは四軒長屋の大家におさまり、ささやかな家賃ながら収入のはいる身分になった，マウロもその年にはS泊まりの小学校を卒えるはずになった。　背たけはあり、いくらか早熟で大人も対等に見るような態度は、乳母が甘やかして育てた故かもしれない。

ところが、その頃からイネスは身体の不調を訴えるようになった。顔色はわるくうす茶の蝋色になり、体もむくんでいた。一度P市にいって良い医者にかかろうと勧めても、一向に応じようとはしない。薬局のルイスに相談すると、腎臓がわるいのだろうと彼はみていた。

イネスは病が治るか、治らないかは神さまのおぼしめしで、医者は哀れな病人をだまして、丸裸にする追剥のような者だと、片意地に信じておれのすすめも聞こうとはしなかった。それでも、この病に効くという民間薬、ミーリョ（玉蜀黍）の毛、アバカテ（アボカド）の葉など煎じて服用していたのは哀れであったが、それほどの効き目もみえず、病状はしだいに思わしくない方にすすんでいた。

マウロに言いつけて、乳母のこまごまとした用事はさせてはいたが、おれは仕事があるので十日に一度の見舞いがやっとである。頑固な病人もルイスの注射はうけ

ていたので、見舞いのたびに薬局によった。病人は一度昏倒して彼がよばれたという、尿毒症がではじめたので、本人の言い遺したい件があれば、もう日はおけないと、公証人らしい気配りをしてくれた。

おれはルイスの提言を考えながら、病人の家への坂道を上がっていった。イネスの財産についてはあまり関心はない、どうせ無益だがイネスは遺産を実弟のジョンにやるだろう。

それよりは遺言の件をどう切り出してよいのかに困惑した。それにしても死にゆくイネスにたいして、物心ともに淡々とした心境で接することのできるのは有難かった。――そうかイネスはもう死出の経帽子をきるのか、まだそれほどの歳ではない、もうすこし生かしておきたいー。と生きのこる者の執心にとらわれると、思わず喉がつまった。

遺言のことはまだ迷いながら、イネスの家の敷居をまたいだ。病人はおれの来訪を喜んでくれ、寝台の背板に身体をよせて座った。見たところ急にどうのこうのという病人のようではない、ところがイネスはおれに話したいことがあるらしい。

「旦那さん。ながくお世話になりましたが、この度は神さまのお召しもちかいようで」

と弱気な口をきくので、

「なにを弱気な、顔色も良いし、注射もうっているから、

そのうちよくなる」
　とおれは力づけたが、うわべだけの慰めなので言葉はしめる。
「分かっておりますで、自分のことは誰よりもよく分かります。さて旦那さん。わたしの土地と建物はみんなマウロにやります。そのような書類をルイスさんに頼んでくだせい、いまの内なら頭もしっかりしていますで」
　言いだしにくい件はイネスが先取りしたのですんだが、それにしても彼女の遺言状の内容には、さすがにおれも意表をつかれた。すべての不動産はジョンに、いくら乳母がマウロを慈しんでいても、せいぜい形見わけぐらいに考えていた。そこはイネスもおれの驚きを察したものか。
「弟にやればカスクードの店で飲んで、騙しとられるのは目にみえています。マウロはまだ一人前でないので、後見人は旦那さんになってもらいます。あれには連れ合いも娘もあるので、いままでどおり住まわせて、世話人にしてやってください」
　と言うとわっと泣きふした。
　イネスは涙ながらに今のうちにと急ぐので、ルイス立会いの上で遺言状は作成された。
　それから三日のち、イネス、デ、シルバ、オリベイラは死んだ。五十三歳であった。

姉の死に目にもあわず、通夜に姉の遺言を知ったジョンは、弔い酒に酔って大声をあげて暴れた。
「姉の財産はあの餓鬼のものになるとな、何故なんだ、姉とはなんの血のつながりもないんだぜ、このおれをはね退けてよう、姉は騙されたのだ。毒が回ってなにも分からんのに署名させられたんだ。こんな紙切れは無効だぜ」
とわめきちらしたあげく、器物を投げたしたので、隣人らによって連れ出される始末になった。

イネスの埋葬もすみ、ひとまず漁場に引きあげてからという日、ジョンの女房のクラウジァにつかまり泣き言をきかされた。--夫の働きは当てにならないのに、六人もの子を生み、四人は死に、残った二人の娘と、どうやって暮らしをたててきたやら、イネスにはずいぶん助けてもらったが、他家の洗濯物をもらうやら、日雇いにでたりしてなんとかやってきたが、義姉はなくなりこれからは誰に相談してよいやら、夫はあんな暴言をはいたが、いまでは後悔している、こうやって住む家があるだけでも有難いのでー。
と長々と愚痴るのは、いったい何をしてほしいのかと推察していると、マウロの世話をさせてくれと言う、彼女は下宿代に目をつけたのだろう。おれはイネスのいない家族にマウロをおくのは、好まなかったが、他に子供

を預けてよいほどの知人はいなかった。学校もあとわずか半年ほどだし、なんといってもマウロはジョンの娘らとは幼友達であったので、おれはアラウジアの申し出を承諾した。

宿縁

Ｓ泊まりの初級学校を卒えたマウロは、おれの漁場に帰ってきた。彼なりの考えがあるのか、進学は望まず、おれの助手になりたいと言う、河漁師などつまらない生業と卑下するつもりはないが、さりとてとくに望むほどの職業ではない。過去に神経を病んだことのあるおれは、この辺境の自然な生活は、自分の余生に適していると満足している。けれども、息子までこの暮らしに引きこむ考えはない、才能があればのばしてやりたいし、広い世の中に出ていってよい、しかし、力をかしてくれる若者がおれば、助かる事も大きい、そうなればおれは前から計画していた仕事にかかろうと思った。

洪水で失われた穴場の再生を、ほんの一足さきの入り江につくることにした。出水の後で小さな奴だがピンタードを揚げている。上流から水を引く溝をはり、餌をまいて気ながなに増殖をはかれば、良い穴場になる可能

性はあると見ていた。ところが、マウロは自分で望みながら、もう一つ仕事に打ちこむ熱意がない、心が作業から離れてうわの空なのは一目で分かった。その頃から彼がなんとなく男くさくなった。まさか十四歳ぐらいでと首をひねったのだが。

熱帯の特性のひとつとして、植物でも動物でも成長ははやい、人間もその例にもれず、十歳ぐらいの女子でも子を産むという、そして老衰はあっという間にやってくる。マウロについてそのような連想は、まったく根拠のないことは思えないふしがあった。

心身ともにまだ未熟な者が、早くして異性をしれば、天まで昇華しょうとする夢も、一歩一歩理詰めに真理を求める知識の喜びも、情念の粘液にからめとられて、精気を消耗し俗な日常の習慣でしか生きられない人間になる。彼の行為を見ていると、大人が隠しているものをすでに知った少年の態度がみえた。

過去にそんな友人があった。周囲からは畏敬されていたが、あまり早く知れば失うのもまた多いのではあるまいか。マウロについてまさかとの疑念はわいたが、それはイネスを冒流しかねないことになる、しかし、マウロは普通の子供より遅くまで母親（乳母）の匂いをかいで育っている。二人は一つの部屋で寝起きしたし、冬期の夜冷えのおりは、うすい毛布ではたよりなく、二人はからみあって眠ったのではないだろうか。

あれはまだイネスが腰をいためる前であった。おれは何かの用で彼女に呼ばれたことがあった。漁小屋の開けた窓からは、原始林の葉ごしにもれる朝の光がいく条もさしこみ、土間に濃淡の唐草の模様をちらしていた。土壁の家具もない粗末な部屋だが、どこかの古い聖堂を思わせる趣があった。ところがイネスの表情にいつもとは違うところが見える。

「どうした。朝からひどくうれしそうだが」

「旦那さん、見てやってくださいよ」

イネスはおれを誘うように視線をうつした。目をやると子供は藁床の上で、かぶせた布は蹴ってよく眠っているのに、男の印はぴんと突っ立っていた。

「いつもこれなんですよ、この子は大人になれば、何人の女を泣かすんですかね」

「子供の癖に生意気じゃないか」

おれは大笑いしたいのを、強いて鼻息にまざらわして部屋をでたが、一日の仕事をおえて、晩めしの卓でイネスとで大笑いになった。

S泊まりに帰ってから、乳母は発病し、世話をするマウロを呼んで床を同じにしても、別にあり得ないことでもない、イネスが死んだときも、マウロの取り乱しすぎた行為は、乳母との別れというよりも、愛人のそれを思わすものを感じたが、それはあまりにも詮索しすぎた見方であったか。

その年、S泊まりでも来る年の郡長の選挙戦が始まりかけていた。S泊まりはS・C郡の管轄の下にある。この地方が郡になる頃、泊まりはほんの十軒ばかりの土着人の部落にすぎなかったので、古くからの牛追い道にそった集落S・C町に役所をおいた。S泊まりからは三人の評議員をだしている。その内の一人煉瓦工場主のアメリコは、S・C町のボス、オクビオの息がかかっている。ところが近年にわかに人家がふえて、郡役所のある牧夫の町を越すほどになった。すると予算の配分などで不満な連中が、薬局の主ルイスを郡長にと担ぎだした。アメリコはルイスの敵に回るだろうが、S泊まりではルイスはかなりの評判である。洪水の時には彼はかなりよく動いたからだが、一方おなじ評議員でありながら、アメリコは自分の工場が水浸しなった故もあって、ルイスに黒星をとった。

そのうえ、粗製の瓦がたたった。というのもアメリコの工場からでた瓦は、どれも何日かの冠水で灰のように溶けてしまったからであった。

あの大洪水だ。奔流の力で持ち上げられ流されてしまったとの説もあったが、一部の人たちは感情的にアメリコを嫌い、高価についたが南方の銘柄の瓦をつかった。その瓦もめくられて落ちてはいたが、再使用にはけっこう役に立ったのである。

出水が引くと、すぐに店をだしたのはカスクードの居酒屋であった。人夫の仕事はどこにでもあったし、にわかに金回りの良くなった連中の寄り場になった。この度の大出水について、有ること無いこと抱腹の話で、酒の肴にはこと欠かない様子であった。

そこへアメリコの窯場で火入れをやっている、老ギイドが顔をだした。すると一杯機嫌の車屋のルカがからんでいった。

「おい、ギイドよ、お前は灰をこねたような瓦をよくも焼いたもんだ。この度の雨でお前が溶けなかったのは儲けもんだぜ」

「灰をこねたと、馬鹿も休みやすみ言え」

「そいじゃあー、泥をこねてしっかりと焼いたとでも言うんか」

「わしはなあー、こう見えても餓鬼の頃から、南部の瓦どころで腕をみがいた職人だ、お前のような何でも屋じゃねぇ、この両手をみてくれ、火口の仕事を長らくやると、このようにちぢみ曲がるのよ、それでなー、おれの仕上げた瓦は自慢じゃないが、大の男でも踏み抜けなんだもんだ」

「それじゃ、どうして水を頂戴したぐらいで消えたんじゃ」

「それはなー、親方の言いつけじゃから仕方がねぇ、ここの粘土はそう悪くはない、じゃがもう一荷の薪がほし

いところを、親方がよこさんのだから仕様がねぇ」
「すると、お前やアメリコは生焼けを承知で売ったわけだ」
「まぁー、そういう事になるかな、わしは若い頃は気に人らぬ親方の下では、一日も働くもんじゃなかったが、こう年をとるともう、からっきしだらしがなくなる。アメリコを出てどこが雇ってくれるかい」
「老いぼれ、自分勝手なことを言いくさる」
「まぁ、そうむきになるな、生焼けでも少々の長雨ではどうともない、だが二十日から漬け物にされたら、これはもう天災というもんだ」
「げっ、手前の文句などききたくもねぇ、この度の投票にはアメリコとオクビオにはやらんからな」
「おい、車屋。ここで二人の悪口は言わんことにしてくれ」
と売り台の向こうから、カスクードが一本釘をさした。
場所により二派の人気はさまざまであったが、辺境の郡長など誰がなろうと、おれは全く興味はない、一つの賭がお祭りになるので、行事の少ない田舎では、何年かごとに気分の浮き立つ選挙を人々は楽しんだ。そのような河下の話題を集荷船が持ってくるようになった頃、薬店主で郡長に立候補したルイスが突然に訪ねてきた。ボートを岸につけると、二人の用心棒と共に漁小屋の前

で手をたたいた。おれは訪問客を確認してから、パンツ一枚で彼らを迎えた。それは漁夫として当然と彼は思っただろうが、招じられた住まいの貧しさには呆れただろう。

「さて、ピンタードのマリオ。いや失礼した。ツグシ・ジンザイ君だったな、今日はとくにお願いがあってきたんだ」

改まった口上で切りだした頼みというのは、彼が郡長に乗りだしたので、応援をしてくれというのであった。出水の後、おれがいくらか働いたのを、泊まり周辺の住民は認めているので、自分の片腕になってほしいという、当選すればなにかの役についてもらうとも約束した。おれはどんな役目もお断りだが、イネスの事では世話になっているし、彼もおれを話せる友人として扱ってくれるので、断るわけにもいかなくなった。

こんな人口のうすい地方でも、面積だけは広いので、支流をさかのぼり、細道を馬でたどって、相手の喜ぶようなことをいって一票をたのみ、時にはS・C町まで乗り込み宣伝することもあった。ルイスの人気はかなりのもののように思えるのであるが、選挙戦がしだいに急迫してくると、おれもルイスの事務所に泊まる日が多くなった、そんな訳で一時は休漁を思いたったが、マウロが漁場を守って、なんとか供出する出荷量は揚げていた。両派とも蜜をもって虫を誘う作戦だが、宣伝がしだ

いに激しくなってくると、相手側の個人の悪口にうつっていった。なりふりかまわない双方の遣り取りに、おれはこの選挙に参加したのに嫌気がさしてきた。一日もはやくこの喧嘩がやんでほしかった。ところがおれの身辺にも変な噂が流れていると、知らしてくれる者があった。ルイスの片腕と見られての悪口だった。

サントの前身は牛追いというが、ただの牧夫でなかったのは、知る者はしっていた。年をとり稼業から身をひいて、この地で漁夫になり、身元をくらましていたが、どんな事情があったのか、風来坊に漁場をゆずって姿をけした。この本流きっての水揚げのある権利を、老人はそう安くは渡さないはずで、ジイアス農場の豚飼いに、それほどの金があったのかとー、と余計な他人の懐のさぐりようである。

それにしても、この噂はかなりおれの前歴を知っている者が、広めたと推してよいところがある。それにかなり気にかかる者と、マウロが接触しているのを、一日暇をみて小屋に帰ったとき知った。息子が会ったという男は、藁帽子をかぶりライバンの黒眼鏡をかけていたので、容貌ははっきりしないが、髭などはうす汚れた白さだったと言うから、マウロはかなり観察していたことになる。

「おっ父はいるかい」

と、とっつきから訊いたという。留守だと告げると、

そうかと頷き、
「お前がマウロで、ここの息子か」
と尋ね・、マウロが頷くと、その男はちょっと問をおいてから、
「おっ母はどうした」
と訊いたと言う。
「どこにいるか分からない」
と答えると、老人はそうかと首をかしげたが、どんな用件できたとも告げずに、動力つきのカヌーで川下に去ったという。
その訪問者は、おれの留守を前もって知っていたこと、名を呼ぶことでおれたちが親子関係にあること、エバの消息を探ったことなどから、蔭からおれたちを見張っている人物が予想された。過去の男として万平が脳裏をかすめたが、彼の噂はここ十年から耳にしたとはない。まさかと思うが否定する根拠もない。その男との間にまだなにか話のあったのを、マウロは隠してはいないのか、どちらにしても、もうすこし時間の経過をみて、対策をたててみることにした。
その頃から、マウロは生みの母（エバ）に異常とみえるほどの慕情をいだくようになった。どこかでまだ生きていると患いこんでの、母恋しさの念がつのってきたのだろうか。

エバのほんの小さな形見の写真でもないかと、思いあまったすえか訊くことがあった。
「なぁ、父さん。ジョン小父さんの姉娘、母さんに似てはいないか」
「誰かが、お前にそんなこと言ったのか」
ついおれは厳しい表情になり問いつめたので、
「いいや、ただそう思っただけだ」
と息子は慌てて言いつぐないをした。そう言われてみれば、過去のエバの面影にパメラ（ジョンの娘）に重なる。けれども人柄はかなり違うようであった。
エバは少女の頃から、苛酷な運命の下で、皮をはがれた兎であった。悪徳を強いられ、弄りものにされても、それは他からきた悪であって、諦観のうちにも救いの手があればすがりつく謙譲と、心の純真はなくしてはいなかった。
パメラはもう十四歳にもなろうか、すでに早熟な浮気女の質がみえる。父母のきたない口論、ジョンの暴力、泣きわめく母親、アルコール中毒の父、策略に愚痴あらゆる悪徳がすえて臭う家の中で、彼女は子供を生める年になっていた。
S泊まりの噂といい、マウロの疑惑をもった目差しといい、にわかにおれとエバの過去が、人々の好奇心の的になっているのを、無視するわけにはゆかないようであった。

おれはエバの死を、息子が理解できる年頃までと延ばしてきたが、しだいに真実を告げる時期が遠くなるのを知った。

次期郡長の席はルイスのものと決まった。すると彼の悪口もしぜんと消えて、彼の店は味方、寝返り者までまじえて、にわかに市のようになった。ルイスは郡の準備におわれて公証人には見知らぬ若い書記がすわった。ゆくゆくはルイスも郡役場のあるＳ・Ｃ町に家をうつすという話であった。

おれは、郡長に誰がなろうと関心はない。ルイスの運動員になってうごいたのも、彼の懇請があったからで、彼の袖にとりついて、何らかの役得を貰おうとする気持ちは毛頭ない。彼とは当選祝いの後、一度も会っていない、おれのことなど忘れてくれてよいのだし、おれもこの漁場を去る日には、誰にも知られずに消えるつもりでいる。

それにしても疲れた。その弱りの故かもしれないが、エバの夢をみた。それが二度三度と続くとやはり気にかかった。おれはまだ一度もエバの墓どころの消息を確かめにいっていない。

「エバは行方不明にしておいたからな」

とサントに言われて、いちど承知したからには、エバの埋葬地を見にいくことは、一つの戒律をやぶると恐れたからであった。けれども、サントは死んだという確か

な知らせはあったし、いつまでもマウロに隠すわけにもいかないので、一日おれは意を決して、カヌーをだして支流の遡行をこころみた。動力つきで速いのは計算にいれていたが、あっーという間に着いたのは意外であった。記憶のなかの距離は現実には三分の一にちぢまっていてこれではほんの隣といってもよい土地であった。当時、救いを求めようにも、絶望であった無人の荒野も、いまでは丘のなかほどや麓に農家が散見できた。

目ざす送電塔の下にカヌーをやって、おれは当惑した。辺りの様子はすっかり変わっていて、かっておれたちが野宿した砂州はなくなり、一方を壁にして風や夜の冷気をふせいだ、あの崖も消失していた。鉄塔の礎にした団子岩はさすがに、昔のままであったが、水位が上がったのかひと回り小さくなっていた。

なんで忘れようか、エバの埋葬した地点は、おれが北にむかって立ち、前面の鉄塔の左側の脚と手前のこれも左の脚の合うところの線を、二十歩下がった処である。ところがそこは水が満ちていて、おれはカヌーに乗って浮いているのだ。

おれたち親子をめぐる関係にも微妙な変化があった。マウロがおれから離れていくのが日常の仕草からでも明らかであった。成長期にあるという一時の反抗なのか、漁をしている時にも、息子の疑惑をもった邪視を背中に感じることがあった。

そういえば、マウロのＳ泊まり行きが目立った。日曜日は休漁するので、カヌーは彼の自由にさせてあった。始めは近くを乗り回す程度であったのが、しだいに夜になってから戻るようになった。彼のＳ泊まり通いは一おう名目はたつ、ちょっとした用件など持ってくるが、あの土地と家は自分の財産だという、自負のような奢りが言葉のはしにでるのもマウロを身内に取りこもうとする者のおだてに乗っているのか。そのような徴候がしだいに彼の行為のなかに現れるようになった。

おれはマウロがジョン一家に馴れ親しむのに危惧をおぼえた。とくにイネス亡きあとはその気持ちはさらに強くなった。

Ｓ泊まりの年中行事の一つに守護聖人のお祭りがある。土曜日の午後からマウロは舟を持ちだしたいと頼むので。遅くとも翌日の夕方までには帰る約束で許してやった。

ところがその日。川波も暗くなってきたのに彼は戻ってこない、これは何か事故でも起きたという心配がわいた。マウロの持ちだしたカヌーがなくては、本流での漁はできないので、予定日に上がってくる船にわたす定量の荷はととのはない、事情ができて出荷できない場合は、前もって川下の同業者に知らす義務があった。

その間の事情をマウロはよく承知していると思えば、

苛立ちの感情はしだいに激しくなっって、おれは足で地面を踏みならした。S泊まりまで様子を見にゆく手だてというと、出水の後、おれが暇々につくくった安定はよいが、でぶで太尻の女のような小カヌーしかない。それに漕いてゆくとなると、下るにしても六時間はかかる水の上である。眠るどころではなかった。吊り床でゆれながら微かな発動機の響きでもとらえようと、しじまの中で耳をすましたが無駄であった。

辺境の原始林を流れる大河にも、一日の時刻によってそれぞれの貌がある。夕暮れ時のなんとなく疲れたような流れ、宵の口、おおさな魚がはねたり、カワウソが獲物をねらってたてる水の音。月のない夜などしだいにふけると、フクロウが飛びかい夜鷹のけたたましい叫び声が、蔭ふかい樹々のおくでこだまする。それもすぎると、原始の森はしんしんと闇をしだいにこくしてゆき、草むらで鳴く虫の音がいっそうおれをいたたまらなくさせる。暮れると向かいの岸の樹立ちの上にあった大きな星はもう落ちていた。満天の星の下、本流はのべた白布に似て、漆黒の鬱林を分けてどこまでも延びている。おれは意を決してカヌーをだすことにした。

心はいくら急いても、櫂でやる舟は下りとはいえ知れたものである。これを機会にマウロの泊まり行きは止めさせようと考えた。場合によっては転居してもよい、い

まのおれたちは一つの曲がり角にきているように思えた。うまく切り抜けなければ親子の縁は破綻するかもしれない、という恐れがたかぶる神経を沈静させた。

おれはここで、じぶんの位置というか、息子から見ればおれはどう写るかについて客観したとき、はっと覚るものがあった。確かにおれは彼の親代わりはした。マウロもそれは認めるだろうが、そこに人倫の関わりをみなければ、養父なんてなんの徳もない記号にすぎない。マウロは出生届にはエバの父なし子として記入されていて、おれの名などどこにもない。これはすべてエバの不慮の死からきていた。それに原野に生きた野人サントの生きざまを、書き写せばこのようになるだろうか。すると、もうとっくにマウロは自分の実父は誰かと思い悩んだことだろう。それにつれて思い出されるのは、先日、訪ねてきたという白い髭の老人は誰か、もし万作だとすれば、何んのために、―わしはお前の実父じゃーと知らすためか、マウロはすでにそれを知らされているのか。

それとも、たび重なるS泊まり通いは、陽気で野卑、悪知恵のはたらく、ジョンのおだてに乗せられているのか、そこまで推索すると、おれは万作とジョンは旧知の仲ではないかと考えた。たぶん二人のマウロについての目論見は異なるだろうが、どちらにしても悪への誘いには違いない。

何時の間にか星影はうすくなった。カヌーはかわたれ

の河を下っていく、おれは舟の滑りをよくするため、ときどき櫂を流れにいれた。河づらに濃い霧がわいてきた。上着はしっとりと濡れ、眉に水滴がたまるほどにもなった。乳白色の視界をわけて舟をやっていると先方で鶏のときの声、犬の吠えるのも耳につく、おれはやっとS泊まりに着いたのだった。

いつものように、カヌーは雑貨屋アルピーノ父っあんの店の横にもやいた。主は赤鼻の怪異な容貌の大男だが、ルイスを応援した仲間で、ここの代理署長をやっている。

「もう来なすったか、はやいことで」

「なにかありましたかい」

「なあにー、他でもないが、お前さんとこの息子マウロとか言ったな、宵宮だったかな、モータつきのカヌーが盗られたとかで、大騒ぎさね」

「えー、息子は父っあんの店に頼んじゃなかったのか、そう言ってやったのに」

「わっしか得意先から預かったものなら、心配無用よ、いままでに間違いがあったかい」

と、代理職を鼻にかける、

「一昨夜は宵宮で、カスクードの店では一晩騒いていたが、どんな相談ができたやら、わしも検べているが、証拠がないんじゃ」

おれは代理署長に礼をいって別れた。彼が知らしてく

れたような事情がおきて、マウロは帰れなくなったのだ、盗難にあった損害はすくなくないが、息子のこの度の落度は責めないでおこう。それにしても、この本流で舟が盗られたのは初耳である。カヌーにもそれぞれの顔があって、壊してしまわないかぎり、誰の物であったかすぐに分かるので、この河の上下では使えないし、買い手はつかないはずである。しかし、他の目的につかうす

なわちマウロの責めにしようとする悪巧みだとすれば、おれは人の心の裏の裏まで読まなければならない者どもの中に、息子はおけないと考えた。

おれがジョンの家の外にたつと、女房のアラウジアは張った針金に洗濯物を干していたが、声をかけるとさっと顔色が変わった。低い押し戸をあけて庭にはいると、地鶏がけたたましく鳴きながら、裏手の柵をかいくぐって逃げていった。

「旦那さん、あいにくジョンは留守でして」

と明らかにおれを家に入れたくない態度にみえた。

「マウロはきているだろう」

「はい、ここはあの子の所有ですもんね」

「舟を盗られたというではないか」

「それで、うちの人も心配して出かけていったんですよ、夜のうちに下流からきた奴らが持ちだしたとかで」

この女の話の糸口はたいてい決まっていた。夫の悪口

から、だらだらと身の不運のありったけを述べたのち、なにがしのお助けとくるのだが、この度はすこし様子が違っている。珍しくもジョンの肩をもって、盗品さがしに奔走していると言うのだった。

おれは組んでいるなと直感した。

「ジョンに用はない、マウロは連れて帰る」

おれが先に立つと、アラウジアは一足おくれてついてきたが、部屋の戸は彼女がたたいた。おれは敷居にたって、そこに有りうべかざる場面を目にした。マウロとパメラは近頃こんな田舎まで入りこんできた、にせ皮ぼりの長椅子の上で抱きあっていた。バメラの母はおれの横に立って、ーどうです、この二人の仲の良いことーと言わんばかりに、両手の甲を腰のくぼみに当てて、含み笑いさえもらした。

その時、おれの感じはーしてやられたーと言う一路につきる。知らずに家鴨の卵を抱かされて、孵化した雛の水にはいるのをみて、驚きうろたえる母鶏はなにも家禽だけではない、養父のまえでも憤然として、身をとりつくろう風もないのは、なにかに欠けた痴呆状のところがあった。

これでは進学の望みもなく、漁夫として一人前になろうとする熱意もないのは当然で、漁師の手足ともいえる舟を失うへままでしでかすのだ。

おれはけばけばしく原色で飾りたてた、女郎屋のよう

な卑猥な部屋から、マウロを引き離したかった。
「さあー、帰ろう。盗られたものは仕方がない」
おれは充分に自制はしているつもりであった。この度の事は責めないことにした。
「おら、戻らない、戻るもんか」
息子の意表をつく反抗にあって、どこかでおれの自制心は切れた。このところマウロの背はのびて、おれと互角になったが、自分が本気になれば、まだまだ彼の腕などは鶏骨のように細い、彼の手をつかんで引くと、パメラは横にひっくり返り、わっと泣き声をあげた。娘の母は乱暴されると思ってか、後からおれの腰にまといつく、一瞬、部屋は騒然となった。
「帰るもんか。人ごろしが」
マウロは憎々しげに昂然と言いはなった。何かの放言かと理解できない言葉であったが息子はおれに向かって一人殺しーと確かに言ったのだ。
「おれが誰かを殺したと」
「そうだ。お前は母さんをやって、首飾りなど金目の品をとったんだ」
放言にもよりけりで、養子の口からエバ殺害の疑いをかけられたのだ。事の重大さにおれは茫然となって立ちすくんだ。
「なんのこった。それは」
「みんなそう言っとる、その金で馬盗人サントの漁場を

買ったとな」
「誰から聞いたんだ」
「ジョン小父さんもそう思っとる」
「そうか、それでお前は、おれを信じるか、ジョンか、どちらだ」
問いつめられたマウロは、さすがに逡巡した。無理はないまだ大人ではないのだ、懐かしい母の噂がたって、逆上したのだろうと、おれは浅くおし計っていた。
「さあー、帰ろう。戻って話し合えばすべては分かることだ」
おれは誘うつもりで、また彼の手を引いた。そのとき、マウロは馬鹿げた空手のまねをした。おれは二の腕の急所をたたかれて、しびれが肩まで上がってきた。
「ばか者。育てられた恩を忘れたか」
養育の恩という言葉は、日ごろはもとより、どんな事態になろうとも、決して口にすべさものではないと自戒していたが、ここでついに破れてしまった。平手打ちのつもりが拳になって、相手の顔面にとんだ。マウロは打たれた鼻梁に手をやると、掌では止められないほどの血が噴きだしてきた。真っ赤に染かった両手をみて、長椅子にのけぞると失神した。顔は血でよごれて赤鬼の面をかぶったようになった。
アラウジアはとっさの出来事にどうしてよいのか分からず、ばっと立っている。パメラはいつの間にか逃げて

いた。

おれはマウロを気楽な形に寝かし、シャツのはしを前歯でさいて、鼻腔につめたので出血はやんだが、失神のほうが手当てはいる。おれはもう平静にかえっていた。これから困難な悪の世界に入るにしては、口ほどにもない奴だ。

「アラウジアさん。ピンガ（火酒）はないか」

「ありませんので、旦那さん」

「なんだ。ジョンの腹はいつも酒蔵なのに」

「ひと走り取ってきますか」

「うん。頼んだぜ、アルピーノの店で、おれからだと言えば渡してくれるから」

ジョンの女房はこの騒ぎから逃げられるのを喜んで、泊まりのほうに駆けくだっていった。使いはいつ戻ってくるか当てにならない、気づけには冷水でも良いはずと、客間の隅にそなえてある素焼きの壷の水を、マウロの顔にぶちまけた。するとと反応があって、正気になったらしくうす目をあけると、下からおれを見上げたが、混乱した頭では事件の経過はよく理解できないらしく、とろりとした目つきであった。けれども意識は働いて起きようとするのを、おれは押しっけて安静にさせておいた。

突然、鈍の外が騒がしくなった。戸口から顔をだす

と、ジョンの女房がどんな金棒を引いたのか、ルイスをはじめ、代理署長に従卒、カスクード亭の連中がジョンを先頭に、どやどやと庭になだれこんできた。
「どうした同志。ジョンの神さんは君が養子をなぐり殺したと、泣いてきたんだ」
これは自分の出番とばかり、赤鼻の代理官は訊問してきた。
「なあにー、ちょっとした内輪もめだ。鼻血がでただけで、もう起きている」
代理官はーなんだ大騒ぎしよってーという顔つきになって、引き上げる様子になった。するとジョンは大声で叫んだ。
「みなさん。この事件をだまって見逃してはいけませんぜ、これは明らかな未成年にたいする暴力行為ですわい、親の厳しい躾でもない、マウロとそいつは親子ですかい、なんの係わりもありませんわい、わしの姉に犬ころのように投げてよこしただけです、まあー、餌代はよこしましたがな」
人々の中には笑う者もあった。
「まだ聞いてもらいたい事がある。わしはマウロを幼い頃からよく知っている。子供の実母はいまだに行方が分からんということだが、その女はかなりの金目の品を身につけていたという、それはまあー、噂としても、この傷害事件はこのままにはできませんぞ」

とわめきちらすと、ジョンの飲み仲間は一せいに歓声をあげた。この連中はルイスの反対側にまわった者たちであった。

薬店主ルイスは選挙には勝っていたが、まだ就任はしていない。この大切な時期に敵方から、味方としてのおれの問題をてがるく扱えば、摘発される恐れがあった。ルイスはおれの助力はそれなりに認めていても、このように人々の眼についたうえは、黙視できないと判断したようであった。

彼はアルピーノ代理官になにか耳うちをした。近ごろますます肥えてきた署長は、店にでるのも大儀な毎日であった。これから飯にありつき一杯やって、昼寝でもというところにこの騒ぎである。朝会った時の機嫌はどこえやら、代理官はむくれ返っていた。

「あいつらが、あのように訴えているので、本官としては知らん顔はできん。訊きたい件もあるので同行してくれ」

本署から巡査が一人派通されていたが、その詰所の別室が留置場になっていた。おれはそこに放りこまれた。古い板囲いの建物で、土台の方はもう腐れがはいっている。用があれば呼べといったが、彼はどこかへ出かけていった。

この度の事件について、このような事態になったのは残念でならないが、人は世代が変わっても同じような事

を繰り返すのか、母がおれに望んだものと、おれがマウロに求めたものは同じに思えた。もうおれの懐に戻って来ることのない養い子は、残念ながら他人になったが、ほかにもエバの噂について、代理官の尋問があれば、どのような弁明をするかの問題があった。事実そのままの述供するか、サントの忠告にしたがって、エバを行方不明にするかであった。真実はこの場合うたがいを招きかねない、おれはサントに賭けた。

幼児を預けて逃げた女は、何処を探しても現れる気づかいはないからである。エバが死んで十五年いまになって、故人についてこんな配慮をしなければならないのは情けなかった。翌日の昼すぎになって、おれは署長によばれて事情のあらましを訊かれた。けれども気にかかっていた、エバの件については一言の質問もなかった。・

あれからマウロに会っていないので、その後の様子を尋ねてみた。

「小僧かい、道でころんで鼻血がでたぐらいだ。ジョンの婿どの気取りでほやほやされているだろうよ」

他人はどんな事でも言えるものだ。おれは複雑な気持ちできいていた。

「なあー、マリオ。子供なんかに望みをかけるもんじゃないぜ」

アルピーノには娘が三人あって、親には似ずに美人ぞろいで、娘たちがそれぞれに好きな男を連れてくると。

「牡犬ども、さっさと失せやがれ」
と怒鳴るのは、S泊まりの名物になっていた。この代理官はおれに好意を持ってくれたのか、ルイスはS・C町へこの事件について、その筋の了解をとりにいってくれるとも知らしてくれた。
おれはいくらか気持ちも落ち着き、何日かの豚箱ぐらしを経験した。自由はないが苦しい野宿の旅よりかどれほど楽かわからない。三度の食事はくるし・、雨風に気をつかうこともない。おれはここで半生にはあまりなかっ瞑想のなん日かを送り、人間の絆のいかに脆いかを悟った。

三日目の午後、ルイスが来てくれた。いま着いた由で、世間ざらにある出来事で、起訴するほどの事件ではない、ただ無条件でおれを釈放すると、反対側の目もあるので、肝心のジョンとマウロに本心を聞いたところ、養子はもう君とは暮らしたくはないと言い、ジョヨンは後見役がほしいらしいので、おれがそれさえ承知すれば、すべては無かった事にしてもよい、と言ったと知らしてくれた。
マウロがおれと共に・暮らしたくないのを知ったいまでは、後見役などなんの意味もない。それは捨ててよいし、それをどこの犬が拾おうとかまうことはない。
すぐに書類は作成しておくが、できればおれの身許引

受人はおれから出してくれと言われた。残念だがこれは自分らの友人では出来ないとも念をおされた。

おれは自分が窮地におちたのを知り、助力を求めるとなると、案外と人のいないのが分かった。どうしても頼みたくない奴か、にべもなく断られるそうな連中であった。あれこれと知人をさぐってみても、頭を下げてもよいという者はうかんでこない、思いあぐんだすえに、ふと思いだしたのは、かっておれがいたことのあるジイアス農場の一族である。

農場主ゴンサルベは死んだが、おれが水難から助けたことのある少年二人は壮健と聞いている、というのもジイアス一族でP市の貧民区にいたジョン（イネスの弟とは別人）は、アルコール中毒で早死にしたが、後家は縁者からの援助もあって、ジョンのいた時よりも楽になっていた。P市に下った折は宿をしてもらったりして、ジイアス一族のたいがいは聞かされていた。コンサルベの弟、家畜商のレオも故人になった。娘のマリア・イレネはあるパウリスタ（サン・パウロ州生まれ）と結婚したのも知った。

おれは農場の人たちに引受人になってもらおうと考えた。しかし、この依頼にもそれほど期待したわけではない、先方でーそんな浮浪人は知らんーと撥ねられればそれまでである。ともかく人を遣ってもらうよう署長に頼んだ。彼はおれがその経費の支払いのできるのを確かめ

ると、すぐに使いの者をだしてくれた。待つ身の一日は長かった。

「出ろ、迎えの者がきている」

従卒は笑顔で知らしてくれた。留置場につづく控え室で、農場から迎えの二人と面会した。皮帽子、長靴、縫い目に飾りのついた皮ズボン、弾入れつきのバンド、若者たちは牛追い服のままできてくれた。雨上がりの急流でカヌーが転覆して、危うく溺れかかった二を救助してから、遠くかすむほどの歳月がすぎていた。あの時の面影は忘れてしまっていた。けれども、この地方切っての家族としての貫禄は挙止にもうかがわれた。

彼らの一人が初めてかけてくれた言葉は、

「マリオ小父、どうした」

と親しみをみせて訊いてくれた。

「なあに、ちょっとした内輪事に、わきの者が騒ぎだして、世話になるな」

おれは二人の名前さえ忘れていた。これは全く逆さごとではないか、そう思うと胸が熱くなった。

「それじゃ、もらってゆくぜ」

脊の高いほうが代理署長など、ものの数でないようすで言った。

「さあー、行こうかい、農場でゆっくり休んだらよい」

おれが若者について出かけると、署長はおれが拘留された時、取り上げられた財布つきのバンドを返してくれ

た。
「使いの駄賃は払っていけよ」
と注意をうけた。おれは上がっていて、約束のジイアス家への使いの経費など忘れていたのだ。
「これは、使いの者が見てきた話だが、お前の漁小屋は灰になっていたそうだぜ」
おれはこの不意の知らせにも驚かなかった。不幸は踵を返してくるというではないか、犯人は誰か、詮索の方法もないが、人は落ち目になると禄なことはない。もう再びS泊まりにくるなと、強いられているのは分かった。
桟橋には動力つきのカヌーがもやいてあった。舵取りが始動させると、舟は波をわけて遡行しはじめた。十幾年見なれた泊まりの人家、丘の上の黄色い教会の塔など、おそらくは見おさめになるのに、何の感慨もわいてこないのは、それどころではないもっと辛い心の痛手があったためだろうか。もともとおれなどが手を出してはならぬものに、手を貸して火傷をおったのだ。けれども、この度の痛手もみごと耐えたおれの神経に、あらためて自信を持った。辺境での苦難の体験が自分を治癒してくれたのだ。
「ああ、そうだ、もう人目もないから構わんだろう。従姉さんが小父の手首に巻けと、これを渡されたんだ。はめてみな」

そう言ってくれたのは、赤糸で編んだ平打ちの紐であった。

「姉さんてぇ誰だい」

「イレネ従姉さ」

従弟にあたる彼らは声をあげて笑った。

「P市の後家さんにきいていたが、嫁にいったということだったが」

「あれかい、A市ちかくの牧場主の息子と結婚したんだが、男は道楽者なので、別れて後ずっと農場にきているんだ。またなにか頼まれるかも知れんな」

これで赤い紐の意味は分かった。迎えられるほどの男ではないのだ、この幾年月おれは鱗をあげ塩物にして、たつきとしてきたので、漁師として必要なものの他はすべて忘れた。

そしていまは舟も漁場もなくしてしまった。おれはつぎの旅立ちのために、何日かを農場で休ませてもらいたいだけであった。

（終わり）

作者後記

この度纏めて一冊にした本の内容は「うつろ舟」と「赤縄」の二部になるが、合わせて「うつろ舟（全）」の題名にした。はじめ「コロニア詩文学」誌の「武本文学賞」に応募した一編だったが、未完としたので、規定外の作品としてはずされた。ところがいくらか読ますところがあったのか参考作品として、「コロニア詩文学」　武本賞特集二十七号（一九八八年）の巻末に載せてもらった。その後なんとなく書きつづけて、足かけ七年、同誌四十七号で終了した。

この七年間は筆者の半生の間でも、もっとも安穏な年月であったので、書きつぐことが出来たのであった。文末ながら　「コロニア詩文学」の編集部が、拙作に貴重な紙面をさいて下さったのについて、感謝の意を捧げたい。

一九九五年五月刊　　非売品

（注、原本は作者自製のもので友人たちに配布された）

作者略歴

本名　　松井太郎

一九一七年　神戸市に生まれる・父　貞蔵・母　をきよ
一九三六年　一家をあげてブラジルに渡る
一九四五年　曽根千代子と結婚・二男　二女あり
一九六二年　宿痢をえてモジ近郊にうつる
一九八七年　サンパウロ市に居を定める
モジ近郊で家業のかたわら、小説を書きはじめる、現在までに短編十数篇と本篇がある。

（文庫編集部　注１　この物語の舞台は架空となっているが、読者の便宜のために書き添えると時代は一九五五年前後。場所はサンパウロ州の奥地で、マット・グロッソ州に近いあたりになる。両州の州境をＰ河すなわちパラナ河が流れている。パラナ河はパラグァイ河と合流し、ラプラタ河となり、アルゼンチンのブエノスアイレスで海に注ぐ）

（注２　２００３年に作者は「マリア・イレネ」の章を書き足した。ジアス農場にひきとられた継志はそこで働き、やがてマリア・イ

レネと夫婦になる。彼女は離婚した夫からエイズをうつされていたので、ふとした風邪がもとで死ぬ。継志は農場で一生を終える。養子のマウロは悪の道にはしり、警官から撃たれ、逃亡したがのたれ死にする。

日本の松籟社から２０１０年に松井太郎作品集が発行されたので「マリア・イレネ」の章は当文庫に収録を見合わせました）